
東方幻想入り

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想入り

【NZコード】

N1256Y

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

私、星空澪は不思議な世界に迷い込んだ。不思議な子、変な子、大人をバカにすることしかできない子供。そう言われ続けてきた私が迷い込んだのは、優しい人がたくさんいる、私以上に変な、独特な世界だった。その世界のことを、人は幻想郷と、呼んでいた。

- ・この作品は二次創作です。原作との相違点、キャラクターの違い、設定の違いが多くあります。ご了承ください。

迷い込んだ私（前書き）

迷い込んだ私

自己紹介から始めるべきだらうか。私の名前は星空澪。性別女性。生まれてから十年、楽しい事よりも辛い事の方が多かつた。母とお父さんが六歳の時に離婚して、それからすぐに母が自殺したせいで、私は一人きりになってしまった。いや、ふたりがいたころも、一人きりだったようなものか。

今はお父さんが養つてはくれているんだけど、お金を送つてくるだけで、他に父親らしいことはしてくれない。

お父さんは私のことを愛してくれているはずなんだけど、罪にならないギリギリまで私を放つておくみたい。怒つてくれるのを期待して学校を一ヶ月行かなかつたこともあつたけど、先生に怒られただけだつた。

私は運も悪いのか、はたまた巡り合わせが悪いのか、学校の帰り道に攫われて死にかけるような日にも何度も遭つた。何をしようと父親が何も言つてこない、というのがどこからか伝わつて、私は犯罪者の格好的になつた。それでも五体満足で生きている私は、ある意味で運がいいんだろうけど。

こんな人生を歩んできた私は、いつしかどんなことにも動じない心を手に入れていた。もし今心臓の上にナイフが突き刺さつても、普段と変わらず状況を分析できる自信がある。大人はそれを心が死んだと表現したがるけど、私はそう思わない。冷静であるということは、生き残ることに繋がる。私は短い人生の中、得られた経験からそう悟つていた。

自分の自己分析が普通の子供達よりも明晰なには理由がある。自分のことを見つめられるようになつたとき、自身の中の語彙の少なさに非常に困つた。そのことに対する対策を講じたからに他ならない。

一人きりの私は、他の子供と違い、家族ではなく他人に頼つてしま

が生きていけない。

冷静になつたせいで感情を表情や行動で表すことに関して極端なまでに不得手になつてしまつた私が、自分のことを理解してもらつためにどうすればよいのか。私が出した結論は、話すことだつた。

痛い、苦しい、楽しい、嬉しい、気持ち悪い、気持ちいい、と言つたものを言葉で表現しなければならぬと、私は考えた。

そのために必要な言葉を、私は家にいる間必死で覚えた。辞書に書いてある言葉の八割を覚えて、大人向けに書かれた本を読むのには苦労した。だが、苦労しても知識を頭に詰め込んだおかげで、少しは理知的に物事をかんがえるようになったと思つてゐる。ただ、その弊害もあつた。知りたくもないような醜悪な知識も、同時に頭に入つてきたのだ。

私の目の前に広がつてゐる深い深い森。これも、私に恐怖をもたらした知識だつた。本曰く、一度迷うと一度と元の場所に帰れない。私はそここのど真ん中……どこのが真ん中なのかはわからないが、とにかく三百六十度、木と草の縁と幹と地面の茶色で埋まつてゐる。地面に目をむけると、土と草に混じり、色とりどりのキノコがいくつか生えていて、一層不気味に私は感じた。

今度は自分の姿を見る。私は白い素足を晒し、水玉模様の長そで長ズボンのパジャマに身を包んでいた。つまり私は、眠る前の格好のまま、ここにいるというわけだ。私は立ち上がり、何も考えずに前に進んだ。

どうせ方角を知る方法など知らないのだ。ならば、ひたすらに真つ直ぐに進めばいつかはどこかに出るだろう。出なければ、野垂れ死に。いつものことだ。何かに成功しなければ、死ぬ。

死ぬのか、死ないのか。わからないことが少しだけ、怖い。枝をくぐり、草をかきわけ進みながら、そんなことを考える。そして同時に、恐怖を感じながらも冷静に考える自分を奇妙に思つ。

「……」

足の裏に痛みを感じ、足をあげてそこを見る。鋭い石を踏んだ

ようで、踵の部分の一部が裂け、血が流れていった。

このまま歩き続けたら化膿するだろうか。もしそうなつたら、足が使い物にならなくなるのだろうか。……どちらにせよ、この痛みではもう歩けない。そう判断した私は、その場に座り込んだ。じめりとした感覚がお尻に伝わる。今もう一度立ち上がり、お尻回りが土色に汚れていることだろう。

注意深く周りを見回しながら、重要なことを考える。

私はなぜここにいるのか。家のベッドで横になり、目を閉じたのは覚えている。しかし、私はここで目覚めた。

考えられるヒピソードは、犯罪者に攫われたが必死な思いで逃げ出し、その途中で力尽き眠りについた、というもの。もしそうなら、私の眠る前の記憶があやふやなのが気になる。

……汚されたのだろうか。

少し不安になつて、服やその他色々なことを調べた。服には脱がされた跡はなく、肌にも汚れはなかつた。汚されたわけではないのがわかつて、息をついた。

ならばなぜ私はここにいるのだろう。問い合わせが巡りだす。わからぬことばかりで、少しだけ不安になる。一度は否定したはずの可能性が、再び頭をもたげてくる。

「あなた、こんなところで何してるの？ 死にたいのかしら」

そんな時、女人人が茂みの奥から出てきた。白を基調とした服装に身を包んだ、宙に浮かぶ人形を従えた摩訶不思議な人だった。

「助けてください。迷い込んでしまいました。踵を切つてしまい、動けません。肩を貸して頂けますか？」

私の丁寧語が間違つていたのだろう、目の前の女性は驚いたような顔をした。

「……あなた、人間？」

「はい。私は星空憑と申します。助けていただけますか？」

女性は気を取り直すように咳払いをすると、手を翻した。すると彼女の周りで浮いている人形達が私の脇のしたと膝の裏に周り、

私の体を持ち上げた。急に体が浮く感覺に全身が逆毛立つたが、何も言わない。

「……私はアリスよ。変な子、あなた」

「そうですか。お世話になります」

私は頭だけ下げてお礼を言った。アリスは私を一瞥すると、踵を返して森の中を歩き始めた。彼女の足取りは淀みなく、まるでこの森が自分の庭であるかのような自然な歩みであった。

「あなた、ここがどこかわかつてる?」

「わかりません。ここがどこか教えて頂けますか?」

「敬語やめて」

思つたりよりも鋭く、そんなことを言られた。多少面食らつたが、初めて言われたことでもないので言つ通りにする。

「わかった。ここはどこ?」

「ここは幻想郷。知つてた?」

「……知らない」

幻想郷。知りたいような知りたくないような、そんな名前だった。

優しい人に出会った私

魑魅魍魎の拠り所。忘れ去られたモノの最後の居場所。幽靈妖怪鬼悪魔。人に近しい人ならぬモノが跳梁跋扈する現世とは異なる違う世界。

「どうやら私は、そんな場所に迷い込んだようだつた。

「つまり私は忘れ去られた、と」

私は結論をアリスに言った。

母に置いていかれ、父とも長い間会つていない上、ついに友人や先生にも忘れられてしまったのだろう。一ヶ月休んだ後、さらに二ヶ月も学校にいかなれば、そうなるのは当たり前か。

「さあ。外の世界から来た人間は、必ずしも忘れられたから来るわけじゃないから」

「そう」

だからと言って、可能性が消えたわけじゃない。私が知ってる人全てに忘れられてしまった可能性は、未だにあるのだ。

「……忘れられてしまったのかもしれないのに、怖くないの？」

「怖い」

素直に答える。見知らぬ土地で一人迷い込んだせいか、得体の知れない恐怖が私の心の大半を占めていた。いや、それ以前の問題だ。お父さんも友人も、先生も。皆が皆、私というものを忘れてしまう。そんなのは嫌だった。眞実は、どうなのだろう。

「とか言う割に、冷静みたいだけど？」

「怖いのは事実だけど、それを態度に出すかどうかは別だと思う」「的確な表現ね」

褒めてもらえたはずなのに。心の奥が痛んだ。それは、振り向いたアリスの顔が、私に対する哀れみに満ちていたからだろうか。なぜ、この美しい女性は私を哀れむのだろう。外から来る、ということが珍しく、そして可哀想なことなのか？ それとも、ここに来る

理由は複数あるようなことを言つていたが、それが優しい嘘なのだろうか。

もしそうなら、真実なんて知らない方がいいのだろう。

「あなた、なんでそんな話し方なの？」

「なんで、とは？」

そんな、とはどんな話し方なのだろう。よほど癪に障る言葉遣いなのだろうか。それとも、ここではタブーになつていてるような言葉を知らず知らずのうちに使つているのだろうか。

「その、言葉から感情を抜き取つたみたいな変なやつ。理由あるの？」

「理由……？」

言われて、少し悩む。

なぜ、このような話し方にしたのだったか。その記憶はかなり曖昧だつた。元の話し方が、大人達を怒らせるからだったのか、他人に頼るに不利な口調だつたからか。よく覚えていない。

「なぜかは、覚えてない」

「じゃあ、特に理由はないってことね。その話し方もやめたら？ もうと子供らしい話し方した方がかわいいよ」

「……」

親切心から、そんなことを言つてくれているのだろうか。嬉しくもある反面、悲しくもある。

「子供らしさなんて、要らない」

「……そう」

私に必要なのは物事を考へることのできる頭と、知識。体なんて鍛えてもたかがしれているが、頭なら、心なら。それならば、何かあつた時死なずにすむかもしれない。読む本はつまらなかつたし、楽しくなかつた。それでも死にたくない一心で頑張つた。

頭の中が今のような頃には、私の中の子供らしさ……可愛いものが好きだと、フリフリとした服を好むとか、人形がお気に入りだと、そういったことは私の中から排除されていた。……いつ

か消えるものなのだ、惜しくはない。そう思つてゐるはずなのだ。

「……何かあつたの？」

私は思わず首を傾げた。今まで私を哀れんでいた瞳は、今度は心配そうに私を見つめていた。今までなら、大人達は皆、私のことなど知らない振りをしたのに。

「な、何かつて、何？」

「……怖い目に遭つた？」

私は呆気に取られた。なぜだろう。なぜこの人は私にこうも気をかけるのだろう。

「……あ、遭つたことなんて、ないよ」

「そう。辛いこと聞いちゃつたわね」

それきり、アリスは黙つた。怒らせただろうか。嘘をついたのが、わかつてしまつたのだろうか。

「私の家、空き部屋結構あるから、しばらく泊まつていつていよいよ」

「ありがとうござります」

そうお礼をいいながらも、私は戸惑つていて。なぜ、この人は私を泊めてもいいなんて言うのだろう。家族は何も言わないのだろうか。そもそも、なぜ警戒しないのだろう。私が悪人だとは思わないのだろうか。

「……それから、元いたところに帰るまでくらいなら、食事くらいは用意してあげる」

「……同情？」

本で読んだことがある。あまりに可哀想な人を見てしまうと人はつい優しくしてしまうのだと。私は、可哀想な人なのだろうか。

「……嫌だったかしら」

「ううん。すごく嬉しい」

嬉しいのは嬉しいのだが、反応に困る。じついう時、どんな反応をすれば喜んでもらえるだろう。……しばらく考えて、お礼を言つ以外に思いつかなかつた。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで。帰るまでだから、きつとすぐでしょ」

そう言ってアリスが笑うのと同時に、開けた場所に出た。相変わらず木と土とが視界のほとんど占めているが、広間のようなこの場所には木製の家があった。小さい家だが、ただ広い私の家とは違つて人の温もりがありそうな、優しそうな家だった。

「あれ、私の家だから」

「お邪魔します」

アリスは私のお礼に苦笑すると、家まで行つて玄関の扉を開けた。内装はさながらログハウスのようで、台所からテーブル、食器棚から食器にいたるまで全て木製で、テーブルの上にはおしゃれなクロスがかけてあつた。壁の上のほうに備え付けられた棚には、アリスの周りに漂つているような人形たちが所狭しと並べられている。私はアリスの人形に運ばれ、テーブルの近くにあつたソファの上に座られた。

「ここで待つってね」

アリスはそう言つと、玄関とは違う方の扉を開けて、どこかへ行つた。人形達が私の前でふわふわと浮き、何やら踊りを踊つている。その様子はなぜか楽しそうで、微笑ましかつた。

「楽しんでくれてるみたいね」

「うん。アリスが動かしてるの？」

頷いたアリスの手には、木製の籠があつた。救急箱だと思う。彼女は私のそばまで来ると、怪我をした足を取つた。怪我をある程度見終わると、驚いた様子で言つた。

「かなりざつくり切つたわね。痛くなかった？」

「痛い」

私がそう言つと、アリスは苦笑した。

「なら痛がるなり泣くなりしたらいいのに」

私は首を振つた。

「これが私の精一杯」

私は別に無理に痛いのを我慢して冷静を装っているのではなく、自然体でこうなのだ。そもそも私は痛いとちゃんと言つたし歩けないとも言つた。ちゃんと伝わったと思うのだが、足りなかつたのだろうか。もつと言葉を尽くさなくてはならないのだろうか。

「そうなの。……どんな感じ？」

「傷口同士が触れ合つて今でも裂かれるような痛みがする。血が止まらないのが少し不安。跡が残つてしまわないかどうかわからないのが怖い」

私は傷に関して思つていること全てを伝えた。過不足はないと思う。

「わかりやすくて助かるわ。その点に関しては大丈夫よ。ちゃんと血は止まるし、痛いのもなくなる。ここまで大きいと跡になるでしょうけど、小さいものよ」

そう言いながら、アリスは籠の中からガーゼと包帯を取り出して、手当を始めた。見ず知らずの私に医療道具まで使つてくれるなんて嬉しい。

「消毒するから、ちょっとしみるわよ」

「わかった」

消毒液がついたガーゼが、足の裏に当たり、染み入るような痛みが走つた。つんとするような臭いに、少しだけ嫌悪感を抱く。

「えっと、踵に包帯を巻く時は……と」

テキパキとしていたアリスの手際が、急にたじたじしくなる。おそらく手当をすること自体は多いのだろう。包帯を巻くほど怪我は少ないのだろうが。

もしかしたら、こんなやせしい女性にかいがいしく手当をしてもらえるのならば怪我をするのも悪くない、と思う人がいるかもしれない。

アリスの顔に視線を移す。人形なんかとは比べ物にならないくらい美しく凛々しい顔立ちの美しい人。でもそれは綺麗すぎて、見る人によつては彼女に冷たい印象を抱くかもしれない。こんなにも暖

かくて優しい人なのに、もつたいたいとは思う。

「はい、これでよし……と痛かつたわね、賢いわ」

アリスは私の頭を撫でながらそう言った。足に目を見やつた。踵から足首に巻かれた包帯は、手つきが拙かつた割には綺麗だつた。手先が人より器用なのだろう。そうでなければ人形を宙に浮かべるなんてできるわけがない。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで、星空さん」

「澪、と」

私はアリスの目を見つめて言つた。

「澪、もしくは星空澪と呼んで」

「名前、嫌いなの？」

頷く。星空。美しくも儂い夜空に輝く星々と同じ名前。本来なら誇るべきところなのだろう。だが私は、この名前を同級生にからかわれ、先生にまで変な名前と言われたせいで、誇らしいどころか嫌悪感を抱いていた。お父さんと私を繋ぐの大好きなものだけど、嫌いなものは、嫌いなのだ。

もしどうしても呼びたいというのなら構わないけど、名字だけで呼ぶというのはやめてほしい。

「そう。じゃあ、澪。これからのことなんだけ……」

そうアリスが楽しそうに切り出したところで、変化があつた。家の外から空気を切る音が聞こえてきたのだ。それはだんだん大きくなってきて、思わず私は外の方を見た。

「……はあ」

アリスは心底面倒くさそうにため息をついた。その次の瞬間、アリスの家の玄関が開き、外から人が入ってきた。

「ういーっす！　アリス、元気にしてるかー？」

誰だらう。悪い人かな。私は立ち上がり、アリスの前に出る。いざとなつたら、盾にならなきや。

「うん？　なあアリス、その子誰？」　アリスの子供？」

侵入者の問いに、アリスは肩をすくませて首を振つて答えた。

なんだろう、アリスに警戒心がない。もしかしてアリスの家族なのだろうか。そう思つて、侵入者をよく見る。

大きな三角帽子をかぶり、さながらエプロンドレスのようなデザインの服に身を包んだ、金髪の綺麗な人。アリスとはまた違う綺麗さだった。アリスを人形の美しさに例えるなら、この人は自然の美しさ。雄大で、凜々しくて、それでいてしなやかで。だが、アリスに似ているかどうかで言えば、そうではない。……でも、やっぱり家族かもしれない。私も、お父さんにも母にも似ていないと言われてばかりだったから。

「澪、こいつは魔理沙。霧雨 魔理沙よ。」

まりさ。キリサメマリサ。独特な名前だな。私はそう思った。アリスの知人だということがわかると、私は警戒を解き、ソファに座る。足の裏を見ると、血がにじんでいた。急だったので忘れていたが、私は怪我をしていたんだった。気をつけないと、傷口が開いてしまうかもしれない。

「私は星空澪と言います。アリスのご友人ですか？」

私がそう聞くと、マリサは不思議そうな顔をしたあと、大口を開けて笑つた。

「あはははは！ ご友人だつてよ、アリス！ あたしでもそんな言葉使わねえのによくできた子供だな！」

マリサはひとしきり笑うと、私の頭に手を乗せた。

「別に敬語なんて使わなくていいんだぜ？ 子供は、子供らしいだけで可愛いもんなんだからな」

「私は、可愛く見せたくて敬語を使つてるわけじゃないよ」

相変わらず、私の表情筋は機能を果たさなかつた。でも、私は喜んでいるのだ。無理することはない。そう言ってくれたような気がして、嬉しくて。

「私、普通に話していると無感情だと言われるから。敬語の方が、そう言わることが少なくて」

私は感じていないのであるのだ。ちゃんと痛いも苦しいも、嬉しいも楽しいも感じる。だが、このことについて言葉を尽くして説明して、誤解が解けた試しがない。だから私は、このことに関して他人に理解してもらうことを諦めた。

「そうなのか？　ま、やつぱり敬語よか親近感湧くよ。さつきよりも百倍いい。今度新しい人に会つたら、そつやつて自己紹介したらどうだ？」

「う、うん」

ちょっと馴れ馴れしく感じて、返事が遅くなってしまった。これが、この人の普通なのだろうか。少し疑問に思う。

「……で？　何の用？　魔導書なら貸さないわよ」

アリスはつっけんどんにそう言つた。魔法使い、なのかな。

「ああ、貸さなくていいぜ。パチュリーんとこから貸してもらひつから」

「あんたの場合は盗み出すでしょうが。早く用件を言へなさい」

アリスがイライラとしながらそつひつと、マリサは肩をすくめた。

「せつかちだな、アリスは」

「いいから」

「わかつたよ。靈夢が呼んでるぜ」

その用件に、アリスは訝しげな表情をした。レイムという人に会うのが嫌なのだろうか。

「なんである子が？」

「行けばわかるぜ。来るか？」

頷いて、口を開こうとして、アリスは私を見た。

「この子がいるわ。だから」

「私、ここで待つてる」

「一緒に連れてけばいいじゃん」

私とマリサは全く別の意見を言った。一緒になんて行つても、足でまといになるだけなのに、この人は何を言つてゐるのだろうか。

「わかつたわ。さ、澪。魔理沙の後ろに乗つけてもらいなさい」

「……。うん」

アリスは私を抱き上げて、外まで私を連れ出した。外には少し大きめの幕が立てかけられており、マリサはそれをひつつかむと跨った。この人は何をしようとしているのだろう。そしてどうしてアリスはマリサの後ろに私を乗せたのだろう。

気恥ずかしさで消え入りたくなるような気持ちになつているといふのに、マリサは朗らかに言うのだ。

「じゃ、飛ぶから口閉じとけよ。舌噛んじまうぜ」

言われたとおり口を閉じる。体が宙に浮くような嫌な間隔に見舞われ、上から豪風が吹いてきて、思わず目を閉じる。再び目を開けるとそこには田を疑いたくなるような光景が広がっていた。

「こには……」

こには、知らない世界。そう思い知らされた。本で見た世界地図と、共通点が見当たらない。そしてかつて学校の屋上から見た景色とは、まるで違っていた。ビルもなればコンクリートで舗装された道すらもない。あるのは縁とちょっとの家屋。

「きれいだろ？ あたしもこの景色好きなんだ」

「そう」

幻想郷。ここから元の世界に戻れるのだろうか。不安に思う。もし戻れなかつたら今度こそ一人きりになつてしまつ、と思うと、耐えがたい寂しさに見舞われた。マリサの腰に抱き着きついて、寂しさを紛らわす。

「魔理沙、もうちょっとゆっくり飛んであげたら？ 怖いのかも」

アリスの声がしたので、その方向を見る。すると、アリスが何も持たずにマリサと並行して飛んでいた。

「うん、速いか？」

「……うん。でも、このままでいい」

このまま、もう少しだけ人のぬくもりを感じていたい。久しぶりに触れた人の体は、すごく柔らかくて、いい匂いがしていた。人つて、こんなにもよいものだつただろうか。

少し記憶を探つて、自分が最後に人に抱きしめられた、もしくは抱きしめた記憶を思い出す。……吊り下がつた母を下ろす時に、抱えたのが最後だった。嫌なことを思い出した。気分が悪くなつて、吐き気さえしてくる。

「……」

あの時の母は、思い出したくない。綺麗な人ではあつたが、死に顔は凄惨なものだつた。口をだらしなく開き、目を見開き、ありとあらゆる穴から汚物を垂れ流していた母。私が死を忌避するのは、死んだら私もあるなるのだ、と思っているからなのかも知れない。あんな物体になるなり、どれほど苦しかろうと生き抜いて見せる。おそらく私はそう心のどこかで思つてゐるのだろう。

「澪、あれが目的地だぜ」

マリサは赤い鳥居のある神社を指さして言つた。境内はそんなに広くなくて神社そのものも小さめ。あれは、どんな神様を祀つているのだろう。

「どんな神社？ どんな神様を祀つてゐるの？」

「知らね」

マリサはそつけなく言つた。興味がないであらうことは後ろからでもわかつた。

彼女は高度を下げ、その神社に接近する。アリスが先に境内に降り立つた。マリサも彼女に続いて地面に降りると、私のことを抱き上げてくれた。

「遅いわよ、魔理沙！ ……で、そのちつここの何？ 魔理沙の子供？」

神社の中から、肩口が露出した特殊な巫女服に身を包んだ女性が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ上げて、大きなリボンで止めている。マリサもアリスも、そしてこの人も。この世界にいる人は皆、彼女たちのような珍妙な格好なのだろうか。

「私、星空澪。今は、アリスにお世話をなつてゐるの」

マリサに言われた通り、丁寧語を使わずに挨拶してみる。

「私は靈夢。よく挨拶できたわね、偉いわよ。……魔理沙が抱きかかえてるのはなんで？」

「この子足をけがしちゃって。一人にしつくのもかわいそつだから連れてきた」

アリスが神社のほうへと足を進めながら言った。

「あんまり知らないところを連れまわしても疲れちゃうだろ？」「早く要件を済ませましょ、靈夢」

「わかったわ。神社の中で話しましょ」

レイムは頷くと、神社の中へと歩き出した。マリサも、彼女たちに続く。

「ちょっと話するけど、大丈夫か？」

「大丈夫。ゆっくりお話ししてて。私は考え方としてく」

マリサが呆れたように息をついた。私は彼女を見上げる。

「考え方って。もつと遊んだりとかしねえのか？」

「遊びにも、足がこれじゃあろくに動けない。そもそも私も遊びは必要ない」

「そうかよ。じゃあ、今度あたしが教えてやるよ」

そういってマリサはニカリと笑った。そんな反応をしてくれたのは、この人が初めてだった。

初めて入った神社の中は、意外と普通の家屋だった。畳の上に座らされ、三人は一つのちゃぶ台を中心にして座つた。私はすることもないで横になる。眠れればよいのだが。

「で、靈夢。なんで私を呼んだの？」

「この前、あなた外来人を連れてきたでしょ？」

外来人、というのは私のように外の世界から来た人のことを指すようだ。先ほど、アリスに教えてもらつた。

「ええ、それが？」

「最近、外来人が多すぎて、厄介な連中も増えてきたわ」

「……私のせいだと言いたいの？」

「違うわ」

レイムは静かに言うのが聞こえた。

「ただ、外来人を分別なしに保護するのはやめてほしい、ということが言いたいだけ。今日みたいに」

「見捨てたら死ぬかもしれないのに？」

「それもやむなし、という状況よ」

私は全身がこわばるのを感じた。もしかしたら、殺されてしまうのだろうか。体を起こして、三人を見る。

「どうしたの？ 喉かわいた？」

レイムが聞いてきた。優しい女性。でも、もしかしたら私の命を奪うかもしれない女性。

「……なんでもない」

「そう」

聞いても、悪く思われるだけだ。私はまた体を横にして、今度は三人の会話に集中する。

「何かあつたのか、靈夢」

「ここに来るときに力を持った馬鹿が幻想郷で何かしようとしたんで

る、つてだけよ」

「……それが、私がここに連れてきた人だ、つてわけ？」
アリスが悲しげな様子で言ったのが聞こえた。

「責めるつもりはないわ。ただ、これからは保護するなら保護する、見捨てるなら見捨てるではつきりさせてしまつてだけ。神社ではもう面倒見きれないわ」

「そんなに多いのかよ？」

「一日一人から二人。十日には一度はろくでもないのが迷い込むわ」「多いな。あたしんとこには来たことないぜ？」

「あなたはいつも空飛んでんでしょうが」

「はは、それもそつか」

マリサは笑っているけど、私は気が気がでなかつた。この話し合いの結果如何で私はどうこうされてしまつたのだから。
逃げ出すか？　その選択肢は、すぐに消えた。ここから逃げたらそれこそ絶望だ。

「それはわかつたけど、幻想郷の結界はどうなつてんだ？」
「それが緩んでるから、大量に外来人が来てるんでしょうが」

「対策はあるの、靈夢」

「幻想郷を外から切り離す」

「今いる外来人はどうなるんだ？」

「結界が安定するまでは、残念だけどここにこじもらうことになるわ」

私はほつと胸を撫で下ろした。よかつた。少なくとも、ここにいる三人に殺されることはないんだ。

「この子は？」

アリスが聞いた。どういう意味だろ？

「ちょっと変な能力もつてゐるけど、まあ帰れるでしょ……？」
レイムがしばらく黙りこくつた。

「靈夢？」

「この子、は」

私は違和感を感じて、体を起こした。

「な、なに？」

レイムの目は、なぜか潤んでいた。ゆっくりと私に近づくと、私のことを抱きしめた。痛いくらいに込められる力に、私は戸惑う。

「……あなたは、ここにいなさい。ずっと」

「れ、レイム？」

どうこうことだらけ。 なんでこんなふうに抱きしめてくれるのだらけ。

「元の世界に帰っちゃダメよ」

「なんで？ 説明して。理由もなしに帰るなと言われても頷けない」

私は静かに言った。レイムもきっと戸惑っているのだろう。私の中に思わず涙を流してしまってほど凄惨な何かを見てしまったのだろう。巫女さんなんだから、他人の本質を見抜くくらいはできるだろつ。

「おい、靈夢。何勝手なこと言つてんだ？」

「二人に頼みたいことがあるの」

私を解放し、涙を拭うとレイムは一人に向き直った。

「あなたたちを呼んだのは、さつき言つたことを各地にいる主要人物に伝えて欲しいの」

レイムがそう言うと、二人は訝しげな顔をした。

「……はあ？ なんで私が？」

「なんであたしなんだ、靈夢」

「信用に足るからよ」

レイムは私の隣に座ると、説明を始めた。私のことではうやむやにしたのに、このことではちゃんと説明するのか。もしかしてこの人の中で何か線引きがあるのだろうか。

「外来人を保護するか否かは発見した本人に委ねる。これはある意味で危険な案よ。無差別に広めれば、それは外来人への襲撃を公的に認めたと捉えられかねない。そんなことは、避けなければならぬ

いわ

レイムは袂に手を入れると、その中から紙を取り出した。そこには地図のようなものが描かれていて、レイムはそれをちやぶ台の上に乗せた。

「だから、注意して伝えて欲しいことがあるの。これは決定事項ではないことと、外来人を襲うことを認めるわけではないということ。それから、これは試験的運用でもあるから、信頼できる部下にのみ伝えてほしいということ。以上の三点よ」

穴がある。私はそう思った。けれど、それは落とし穴と同じで、人為的に作られたものだ。そう感じた。

これがもし全面的に広まつたとしたら、悪意を持った人間は確実に外来人を食い物にするだろう。それを問題視させないための試験運用なのだろうか。それとも、騙すための試験運用なのだろうか。

こんなことをして、騙す相手は誰だろう。外来人だろうか。ここにいる一人だろうか。それとも、幻想郷の人間全てだろうか。「わかったぜ。さとりとか紫とかレミリアとかに伝えればいいんだろ?」

「よくわかつてんじゃない。よろしくね」

レイムは優しく微笑んでそう言った。私は半ば無理にでも立ち上がった。足の裏に鋭い痛みが走る。

「大丈夫、澪」

「うん。アリスも行くの?」

アリスはしばらく悩んでから頷いた。なぜ悩んだのだろう。

「じゃあ、私も行く」

「……危険よ?」

「それでも行く」

私はアリスのそばまで痛みを我慢しながら歩く。

「あなたは、ここにいなさい」

「ここはイヤ。行く」

レイムと一緒にいるのは、少し嫌だった。レイムと一緒にいた

ら、最後には閉じ込められてしまうのではないか、そんな恐怖が全身を襲つたからだつた。

「……そう。嫌になつたらいつでもここに来なさい」

レイムは残念そうにはしていたけど、特に怒つたような様子や、壊れてしまつのような様子はなかつた。私は安心すると、アリスの方を向く。

「最初はどこへ行くの？」

私が聞くと、アリスはマリサと田を見合せた。

「私はこの近くにある紅魔館に行くわ。各地に伝え終わつたら、伝書鳩を飛ばすから。あなたもそうして」

「ういっす。じゃああたしは天子んとこ行つてくるぜ」

マリサは駆け出して外に出ると、簾に跨つた。

「ごめんな、澪。遊び教えてやれなくて。でも今度会つたら絶対教えてやるからな！　じゃあな、元氣でなー！」

そう言い残すと、返事も聞かずに行つてしまつた。まるで、嵐か台風のような人だつたな。

「私達も行きましょうか。歩ける？」

頷くと、一步踏み出す。傷をかばう歩き方をしたせいか、かくりとバランスを崩し、膝をついてしまう。

「大丈夫？　見せてみて」

「大丈夫、歩けるから」

私は強がつて言つた。もしここで足手まといだと思われたら連れて行つてもらえないかもしない。そんなことになつたら、私はレイムと二人きり。そんなのはイヤだつた。

それにしても、なぜ私はただの想像を根拠にこれほどレイムを嫌うのだろう。私は、偏見で人を判断するような人間にはなるまいと思っていたのに。

「靈夢、子供用の靴とかある？」

「ないわ」

だから、ここにいて。そう呴喝されたように感じて、私はアリ

入の後ろに隠れた。恐らく私は何かをレイムに感じ取つて、それを恐れているのだろう。愚かな私。

「……えらく嫌われたわね、靈夢」

「まあ、私子供受けよくないから。それじゃあね、アリス、澪。また会いましょう」「う

そう言つとレイムは神社の奥の部屋に消えていった。

「足、どうする?」

「歩く」

「傷開くわよ?」

「構わない」

とにかくここから出たい。こんなにも一つの場所を恐れる自分に憎悪さえ抱く。レイムだつて私を迎えて入れて、抱き締めてさえくれたのに、なぜ私は恐れるのだろう。よくわからない。わかりたくないような気がする。

「はあ。あなた、頑固ね」

「足手まといにはなりたくない」

アリスはまたため息をついた。怒らせただろうか。

「もう。わかつたわよ。急ぐ用事でもないでしょ?、ゆっくり行きましたよ。辛くなったり痛かつたりしたら言いなさい」

「ありがとう」

私はお礼を言つと、境内を素足のまま歩く。おもわず叫びそうになるくらい痛むけど、嫌われたりするわけにはいかないのだ、黙つて歩く。アリスと一緒に境内を出て、階段を降りる。それからは、土がむきだしになつた街道を歩く。

「澪、紅魔館に行つたら次は永遠亭に行くわよ」

「永遠亭?」

なんだろう、その素敵な響きは。永久を手に入れれる場所、とかならば素晴らしい場所だな、と思つ。

「病院よ。流石にちゃんとした医者に見てもらいたいでしょ?」

「病院、か。お父さんに行くなと言われてからは、行っていない。

大病を患えば死が確定するが、お父さんが言つのなら、別にそれでもかまわない。

「病院はいや？」

「つうん。久々だな、って思つて」

「へえ。具体的には？」

「四年くらい」

アリスは驚いた。

「すごい。怪我もしなかつたの？」

私は首を振つた。

「行かなかつただけ」

「え、お父さんとかは？」

私は首を振つた。大人なら、これだけで理解してくれるはずだ。普通の人に、私とお父さんとの絆は理解できないだろうから。

「い」「ごめん」

「いい。謝つてくれるだけ、嬉しい」

お父さんは死んだ。そう伝える方が、お金だけ送つて来てあとは放つたらかしというのよりも理解されよい。お父さんとのことで嘘をつくのは気が引けるけど、こんなことでそつだらだらと会話するのもイヤなので、私は話を切り替える。

「紅魔館つて、どんなところ？」

「え？ ……吸血鬼、レミリア・スカーレットの住居よ」

吸血鬼。血を吸いとる鬼。そんな恐ろしい存在がいる場所に自ら足を運ばねばならないことを、私は嘆いた。

「怖い？」

「うん。でも大丈夫」

私は上手く踵をかばいながら歩く。ひょこひょこと変な歩き方になつているが、アリスは笑おうともしない。優しい人だな。

「ふうん。まあ、ほんと無理だけはしないでね」

「うん」

吸血鬼つてどんなのなんだろうか。それこそ、人を食糧にしか

見てないような、そんな存在なのだろうか。……私、外来人だし、食べられるのかな。

「まあ、すぐには紅魔館に着かないし、ゆっくりおしゃべりでもしながら行きましょ」

「うん」

暇しないように配慮してくれるのが、嬉しかった。この気持ちを笑顔で表現できない自分が恨めしい。

「アリス、ここは妖怪がたくさんいるの？」

「まあね。でも大丈夫よ。私が守るから」

そう言ってアリスが指をひらめかせると、周りに浮いていた人形達の手に様々な武器が握られていた。斧や槍、剣などの恐ろしいものを可愛らしい人形が持っているのが、不気味だった。

「それで、殺すの？」

「殺しはしないわ。撃退するだけ。まあ」

「人間だー！」

甲高い声が聞こえた。周りが闇に閉ざされる。まだ昼間だとうのに、なぜ。

「あなたは、食べてもいい人間？」

声が聞こえる。想像するに、女の子の声だ。年齢は私と同じくらいの、小さい子。その子は、きっと今私の後ろにいる。息が右の耳にかかるほど、近い場所。多分、この子は妖怪だ。人を食つような、怖い妖怪。おそらく私の心臓の鼓動さえ、気取られているのだろ？。

なんと答えたら、助かるのだろう。なんと答えたら、殺されてしまうのだろう。

「答えて？　あなたは、食べてもいい人間？」

彼女の問いにどう答える。肯定する？　その場で齧られ、食われてしまうかもしない。否定する？　もしかしたらこの質問はただ趣味で聞いてるだけで、嫌がる人間を食つのがいい、とか言われるかもしない。

「答えないの？ 食べちゃうよ？」

「やめなさい。ルーミア、その子は食べてはいけない人間よ。手を出さないで」

暗闇の奥から、アリスの声がした。

「そーなのかー。じゃあ、かえるのだ」

そう言うと、子供の妖怪……ルーミアは去つて行つた。闇が晴れ、視界が戻つた。一歩も動かなかつたため、景色は変わっていかつた。勝手に移動させられたということはなさそうじ、よかつた。

「大丈夫、澪」

アリスが私のそばに駆け寄つてくれた。よく見ると私の周りに人形がたくさん浮いている。いざとなつたら、あの妖怪と戦つてくれたのだろうか。

「うん、大丈夫」

「驚いたわ。普通の子は驚いて騒いだり走つたりして大変なことになるのに」

アリスは歩きながら感心するように言つてくれた。私はアリスについて歩く。足の痛みにもなれた。

「私は、いつでも冷静だから」

「そうね。でも、怖くなかった？」

私は素直に答えることにした。

「もうここで食べられて終わっちゃうんだって思つた」

「そんなこと思つてたのによくじつとしてられたわね」

「生きるためなら、なんでもする」

私は静かに言った。この先泥水をすするような日に遭つても、生き抜く。

死にたくないから。母と同じになりたくない。またお父さんと会いたい。だから、死ねない。

「随分と固い決意ね。すごいわ」

「ありがとう、アリス。……ところで、ルーミアはどんな妖怪なの？」

私は質問してみた。今度一人でルーミアに遭つても死なないようにするための、情報が欲しかつたからだ。

「あの子は闇を操る人食いよ」

「私を食べようとしてたのかな」

アリスは奇妙なことに首を振つた。

「まあ、そうなんだけどね。でも、無理矢理食べられたりしないわ。あの子、食べてもいいか聞いて、許可がもらえないと食べてこないから」

「どうして、妖怪なのにそんなルールに縛られてるの？」

私の中の妖怪という存在に対するイメージは、自由奔放、気まぐれで人を殺したり救つたりするような強大なものだつたのに。随分と、イメージと違う。

「まあ、どんな妖怪も多かれ少なかれルールの中で生きてるわ。もちろん、そのルールを破る奴もいる。……そこは人間も一緒でしょ？」

私は頷いた。

「わかつてくれて嬉しいわ。で、ルーミアはルールに縛られているタイプの妖怪よ。ルーミアに食べられたくなかったら、私は食べてはいけない人間です、って言えばいいのよ。簡単でしょ？」

頷く。なんだ、変に深読みをしてしまつた。そんな単純なものだつたら、素直に答えるべきだつたな。情報がなかつたのだから仕方ないといえば、仕方ないのだろうが。

だが、これからは情報を多く取り入れるよう注意しなければ。知らないことが理由で、死にたくない。

「アリス、話は変わるけど、外来人ってどんな人がいるの？」

すると、アリスは困つたような顔をした。聞いてはいけないことだつたかな。

「ううん、多すぎで一概には言えないわ」

「じゃあ、たとえば、外来人が近づいてはいけない場所とか、しちゃいけないこととか、ある？」

「この質問にも、アリスは言葉を濁すだけだった。

「まあ、ないことはないけどね。あなたにはどう頑張っても無理だから安心して過ごしなさい」

「なんにもないの？」

アリスは少しためらつて、頷いた。

「まあ、そりや入つたら怒られちゃう場所はあるけど、それも外來人だから、で特別に案内するとかあるから……」

私は驚愕する。なぜこんなにもここの人人は警戒心がないのだろう。そんな私の疑問を感じ取ったのか、アリスはにっこりと笑った。

「ここの人、基本的にお人よしが多いから」

「そうなんだ」

私はそう言うのとほぼ同時、道が開け、視界いっぱいに湖が広がる。思わず、声が漏れる。これほどきれいな景色を、私は見たことがない。そして、湖の奥には赤い館があつた。

「あの奥にあるのが、紅魔館。さ、行きましょう」

アリスは湖の円周沿いに歩き始めた。

紅魔館への道のりと私

綺麗な湖を眺めながら、私とアリスは歩いていた。舗装されていない道を歩くのは辛いけれど、我慢する。だんだん慣れてきたし。左側にはアリスが歩いていて、その背景にな森と青い空があつた。右を向くと、目を見張るような美しい湖が見える。

水面は光り輝く網をはつたように太陽の光を乱反射し、まぶしいくらいにきらめいている。湖の水は、ここからでも中心の底を見れるんじゃないのかと思うほど透き通っていた。

「この湖、おきにいり？」

「私はこの景色を美しいと思う。だから、好き」

アリスの方を見る。

「素直にキレイだから好きって言えばいいのに」

アリスは苦笑しながら言った。

その様子は、まるで親しい人間にするような、柔らかい顔だった。私がアリスの家族になったかのような錯覚に陥り、それを振り払おうと首を振る。

「どうしたの？　また何か理由があるの？」

「違う。アリスと家族になったような感覚がして。それを頭から振り払っていた」

アリスはしばらく悩むような仕草をした。やはり、気持ち悪がられただろうか。せっかく仲良くなれたのに、残念だ。

「別に、いいけど」

「……？」

「いい？　何がいいのだろうか。

「別に、家族になつてもいいよ」

「……本気？」

「私に新しい家族ができる？アリスが、こんなに優しくて綺麗な人が私の家族に？」

「本気も本気」

「……なぜか、聞いてもいい？」

アリスはしばらく顎に手を当てて悩んだ。本人もわかりかねているのだろうか。しつかり悩んで、結論を出して欲しい、半端な考えで家族になつて、いるないから、で捨てられるのは嫌だから。

「私、あなたを助けるつて決めたから。靈夢が言うには長いこと滞在してもらわなきないけないのよね。その間ずっと一緒にいるわけだし、それつてもう家族と一緒にでしょ？　まあ、あなたが帰るくらいまでなら、ね」

私はすぐに頷くことができなかつた。家族が一緒にいるのが当たり前かのように言われて、戸惑つたのだ。やはり私はおかしい。そう再認識した。

「私、アリスの家族になるの？　なつていいの？」

「ええ。この際だし、別にいいわ。でもちゃんと帰るのよ？」

ああ、なぜ私は笑顔や仕草で喜びを、この全身を包む幸福を表現できないのだろう。

私は自分のできる精一杯として、アリスに抱きついた。アリスは照れ臭そうに頬をかくと、まあ、家族だしね、と言つて抱きしめてくれた。

お母さんではだめ。お母さんと呼んでしまえば、アリスも母のようになつた。

「澪、震えてるわよ？」

「嬉しくて。喜びに打ち震えるというものだと思つ」

私の言い訳を、アリスは信じてくれた。私はお礼を言つてアリスから離れる。私は震える体を無理に動かし、湖の奥に見える紅魔館を目指す。

「澪、どうしたの？」

すぐにアリスが追いついてきた。

「なんでもないよ」

吊り下がつた母の遺体が思考の端から消え、体の震えが止まると、私はアリスのそばに行つて手を繋いだ。姉妹はこうするものだと思つたからだ。

「おー？ アリスじゃない！」

紅魔館へ進もうとしたとき、声がした。私達の目の前に氷の粒が集まつて、それは人型をとり、やがては一人の女の子になった。

その子は短い水色の髪に、水色を基調としたブラウスを着ていて、背中には三対の氷柱が翼のように生えていた。

「ここにちはチルノ。用事があるからあんたの相手はしてやれないの。どつかいって」

アリスは冷たくあしらうように言った。

アリスが誰にでも分け隔てなく優しくするような人間でないことがわかつて、少しだけ安心する。

聖女と共に暮らす自信はない。

「私が相手してほしいのは、そこの人間なのだ！」

チルノ、とアリスに呼ばれた子供は私のすぐそばまで来て言った。空気が急に冷え込んだような気がする。私の本能が警鐘を鳴らしているのだろうか。

警告に従い、私は何歩か後ずさる。

「おー。なんの力も持つてない人間だ。名前は？ あたいは『氷精』チルノ！ 氷を自在に操れるのだー！」

氷を、自在に？ そんなもの、人間が、少なくとも私が叶う相手じゃない。なんとかして生き残らなければ。どうする。

「私は星空澪」

アリスの名前を名乗りたかったけど、教えてもらつていなから名乗れなかつた。あとで聞こう。生き残れたら。

「ほー。星空か。いい名前だな！」

「澪つて呼んで」

チルノはあつさり頷いた。

「わかつたぞ、澪！　さあ、弾幕勝負だ！」

そんなことを言つて、チルノはいきなり攻撃してきた。氷粒がいくつも、無数に飛んでくる。

知覚はできている。ちゃんと見えている。けれど、避けれない。

私はまだまだ未熟な上に華奢だ。怪我もしてる。

氷の弾の雨にさらされた私は、後ろに吹き飛ばされて地面上に転がる。お腹が痛い。体がうまく動かない。

「チルノ！　あんた何してるの！？　いきなり撃つとか何考えてるのよ！」

「い、いやまさか本当に何もできないなんて思わなくて、あつせりよけて反撃するんだとばかり……」

「あんた澪の力量見切つてたでしょ！？」

「あ、あれは、その、なんていうか……」

「なによ」

「当てずっぽう……」

「ああ、もう！　とつとと失せろ！」

「わ、わかつたのだ。」「ごめん澪。」

それきり、チルノの声はきこえなくなつた。アリスが駆け寄つてくる音がした。

「大丈夫澪！？　お腹見せて。内出血してわね。痛い？」
抱き起こされ、聞かれる。正直、傷みはもう引いている。

「チルノのこと、許してあげて」

「はあっ？　なんの澪があいつを庇うのよ？」

「あの子はきっと、ただ子供なだけで、普通に悪気があつたわけではないはずあから」

悪意があれば、去り際謝るなんてことしないだろうし、そもそも私は死んでいるだろう。

「優しい子ね」

私はそう言われて嬉しかった。ここに来る前はなにを言つても何をしても、誰も何も言つてくれなかつた。気味が悪いといって近づ

いてもくれなかつた。

それなのに、ここの人達は。

「ありがとう、アリスお姉ちゃん。もう歩けるから」
自力で立ち上ると、ふらつきながらも歩き出す。アリスも心配そうについてくる。

「そうだ、アリスお姉ちゃん」

「どうしたの？」

私は紅魔館を見つつ、アリスに聞く、

「アリスお姉ちゃんの名字はなんていうの？ 私、お姉ちゃんの名前を名乗りたくて」

星空。こんな名前、いらない。いくらお父さんの名前でも、関係ない。お父さんとは血が繋がっているんだから、名前が違つても繋がつていれるはずなんだ。だったら、こんな名前は、捨てる。

「マーガトロイドよ。そんなに名前が嫌？」

頷く。私は今から、澪……。

ミオ・マーガトロイドだ。少なくとも、この幻想郷にいる間は。

「じゃ、行こうかアリスお姉ちゃん」

「わかつたわ。ホントに大丈夫？」

「大丈夫」

私はそう言つと、少しだけ歩む速度を上げた。傷みが増してくるけど、構いやしない。

歩いてからかなり経つて、紅魔館の門が見えてきた。遠くで見たときはそもそもなかつたのに、今見ると物凄く大きな館だ。壁から屋根、窓枠に至るまで全てが朱色に染められているところは、さすが吸血鬼の住処だ、と思つた。

「ここにちは、アリス。今日はどんな御用ですか？」

赤く染まつた門の前には、中華風の衣装に身を包んだ女性がいて、アリスにそんなことを聞いた。門番さんだろう。ここまで大きい館なら、門番くらいはいて当たり前なのだろうか。

「今日はレミリアに伝言があつて来たわ

「……伝言？」

「ええ。靈夢からの大切な伝言よ。通してもいいえる？」

「……何か書類はお持ちでしょつか」

「持つてないわ」

そうアリスが言つと、門番は少々お待ちを、言つて門の中に入つた。話し声が聞こえるのでおそらく内線か何かで主と連絡をとつてゐるのだろう。

「妙に嚴重ね」

「いつもは違うの？」

アリスが不思議そうにしていたので、聞いてみた。すると訝しげな顔をしたまま、私に教えてくれた。

「いつもは用件言えば大抵通してくれるのよ。そもそも昼寝していることもあるし」

「門番がそんなので大丈夫なの？」

「まあ、こここの主は強いから。ちょっと腕に自信がある、くらいで忍び込んだところで夕食にされるだけだからね。……まあ、今日は様子が違うのだけど」

「どうしてだと思う？」

アリスは肩を竦めた。興味がないのだろうか。もしかして、アリスはあまり他人に興味がない？

「お待たせしました。通つてよい、とのことです。それでは、お通りください」

門から出てきた門番は、私たちを中へと案内した。

「ありがと。美鈴」

「いえ」

そう言つて恭しく一礼したメイリンという女性は、私たちを見送ると再び門番としての仕事を果たすため、門の外に立つた。クールビューティという言葉が彼女ほど似合いそうな人は、今まで見たことがなかった。

「どうしたの？ 美鈴の方ばっか見て」

「……なんでもないよ」

私はアリスに促され、ちゃんと前を見る。赤い大きな扉が田に入つてくる。この先に、吸血鬼がいるのか。

思わず震えそうな体を感じながら、私はアリスについていく。無意識的に、ぴつたひと寄り添うように歩く。アリスは私を見てにこりと微笑んで、扉を開けた。

「いらっしゃいませ、アリス様。お嬢様がお待ちです」

広々としたエントランスの中央で、メイド服にみをつつんだ人形のような女性が待っていた。彼女は綺麗なのは綺麗なのだが、なぜだか、背筋が凍るような悪寒を感じた。

「……はじめてまして」

そう私に言ったメイドの瞳は、夕日のような真紅だった。

吸血鬼と私

真っ赤な扉が等間隔でいくつも続く、真っ赤なカーペットが敷かれた廊下を、私とアリスはイザワイサクヤというメイドに先導され歩いていた。

「……ね、ねえサクヤさん」

「なんでしょうか」

冷たい声が浴びせられる。体の芯から冷えるような感覚がして、少し震える。怖くなつて、アリスの手を握りしめた。

「あ、あなたは、吸血鬼……なんですか？」

「…………。そうです、とも言えますし……違います、とも言えます」

「どうしたことなのだろう。……ハーフなのだろうか。いわゆるダンピールという人種。

「……興味があるのですか？」

「え？」

「吸血鬼に」

私は首を振つた。サクヤは前を向いているから、話さなくてはならないことに気づくのに、しばらくかかった。

「う、ううん」

「そうですか」

サクヤの声が怖い。まるで、調理台の上に乗つていいと言われたら、そんな嫌な気分。

「ねえ、咲夜。あなたはもし外来人を好きにしていいと言われたら、どうする？」

「なんで、アリスは今そんなことを言うのだろう？ 反応が気に入るのだろうか。サクヤはここで初めて、振り返つて私の方を見た。視線だけで、貫かれたような気分になる。

「その少女を私に……。そういう意味ですか？」

「違うわ。どうするか知りたいだけ」

この人はどんな反応をするのだろう。お願いだから、普通の反応をして。そう心の底から願う自分がいた。

「そうですね。もしそのようなことになつたら、お嬢様と妹様の食材を安定して調達できますね」

思わず、アリスの後ろに隠れてしまった。

「ちょっと、澪？ どうしたの？」

「……な、なんでもない」

アリスの影から、サクヤを見る。普通の女人にしか見えない。だけど、人とは違う何かを、この人は備えていた。

廊下の一番奥にある大きな扉の前まで来ると、サクヤは静かにノックした。

「お嬢様。お客様をお連れ致しました」

「わかつたわ。お通しして」

扉ごしだというのに丁寧に礼をしたところを見ると、この人の主人に対する忠誠はかなり高いものだということがわかった。サクヤは重そうな扉を片手で開けると、私たちに中へ行くよう手で促した。中に入つても私はサクヤに対する恐怖が消えず、彼女の方を見ていた。

「それではお嬢様、失礼致します」

「ええ。ご苦労様」

「ありがたきお言葉」

私達が部屋に入ると同時に、サクヤが消えた。足音一つさせずに消えるなんて。暗殺者か何かなのだろうか。

「ようこそ、アリス。久しぶりね」

私はここで初めて、紅魔館の主を見た。

王様が座るような赤い豪奢な椅子に座つているのは、私と同じかそれより下の年齢に見える、幼い女の子だった。西洋人形のように整つた顔立ちをしていて、ネグリジェのような服装が、幼さを一層引き立てている。この子が、吸血鬼。私達人間を食らう、化け物。

彼女は私を見て、舌なめずりをした。背筋に冷たい汗が流れる。

「……あら、お土産？ 気が効くじゃない」

「違うわ、レミリア。外来人で、私の妹よ」

「へえ」

レミリアという吸血鬼は、興味深そうに立ち上がると、私のすぐそばまで来た。レミリアの顔が、視界いっぱいに広がる。全身が恐怖で凍りつき、レミリアの紅い瞳から目が離せない。殺されてしまうのだろうか。臓腑を撒き散らし、私を咀嚼するレミリアを想像する。その様は酷く似合っていて、神秘さえ醸し出していた。

「……あなた、私のことが怖くないの？ 吸血鬼だってわかってるのに」

「怖い」

そう言つた私を、レミリアはじつくりと観察する。何を見られているのだろう。全てを見られているのだろうか。

「この子、面白いわね、アリス」

「面白い？」

アリスがレミリアに聞いた。怖いと言つた私を気遣つてか、レミリアの前に立つてくれる。私はすかさず、アリスの後ろに隠れる。「そうね。心拍数も呼吸も体温も全て、恐怖を感じた時と同じものなんだけど、表情だけは平静そのもの。眉ひとつ動かさない。でも、怖いのよね」

にやりと、レミリアは嫌な笑みを浮かべた。

「うん」

頷いた私に、すっとレミリアが青白い指先をのばした。顎のラインをなぞるように動く指。恐怖からか、くすぐったいからか、背筋が凍るような感覚がする。

「随分と、うまく表情を殺すじゃない。どれ、ちょっと運命を……」

そう言つたレミリアの顔色が変わった。私の顎にあつた手が離れ、それは彼女の美しい口元に。

「あなたの運命は……凄まじいわね」

「運命？」

私は首をかしげた。

「そう、運命。いずれ来るべき未来。避けることのできない決定事項。私はそれの一部を読むことができ、ある程度の干渉もできる」私は黙つて話を聞く。聞きたいことはあるが、それは全てレミリアが話終わつてからだ。私の命は今、レミリアが握っているのだから。

「あなたの運命は強力すぎて微調整すらできないけど……」

そう言つと、レミリアは私の耳元に口を近付けた。耳たぶを齧られると思つた私は、一步下がつた。

「とつて食いやしないわ。内緒話がしたいだけ」

そう言つと、もう一度レミリアは口を私の耳元に近付けた。彼女の冷たい吐息が耳にかかるすぐつた。思わず声を出してしまいそうになるのを、必死で抑える。

「これからきっと、死を懇願したくなるような目に遭うわ。そうなつたら、一人でここにいらつしやい。楽にしてあげるわ」

その言葉が、心の奥の奥まで染み渡つた。ような感覚がした。そして同時に、得体の知れない根源的な不安が、全身を包んだ。

「どういつ、こと？」

「それは、来てからのお楽しみ」

そう言つたレミリアの言葉が、足の先から頭の上まで駆け巡つた。気持ちの悪いような、でももつと聞いていたいような、不思議な感覚だつた。

「……ふふふ。で、アリス。どんな伝言なの？」

私から離れると、レミリアは子供のように笑いながらアリスに聞いた。レミリアの声がもう少しだけ聞きたくなつて、思わず一步前に出た。

「……外来人の処遇に関してよ」

「何？ 絶対に保護しなきゃいけなくなつたの？」

不快そうにレミリアは顔を歪めた。その顔すらも美しく思えた。

私はこの時、自分の異常に気付いた。最初は恐怖の対象でしかなかつたレミリアが、非常に魅力的に、あるいは神秘的に感じるようになつてゐるのだ。

私の感じていた恐怖は、心を歪ませてでも解消しなければならぬほど強くはなかつた。にも関わらず、私の中の感情は劇的といふほど変化していた。なぜか。

「逆よ。必ずしも保護する必要はなくなつた、といつゝことな

「へえ、それは重畠。実に喜ばしいことだわ」

皮肉めいたその言葉をもつと聞いてみたいと思う私は、おかしい。なぜ。私はレミリアに好意を持つてゐる？ 血を吸う鬼を好きになるなど。

「無差別にやつてはダメよ」

「わかってるわ。伝言ご苦労様。それじゃあね、アリス

「ええ」

アリスが踵を返し、部屋を出ようとすると、私はすつと、レミリアを見ていた。視線が彼女から離せない。ずっと、見ていたい。

「澪、何してるの？ 早く行くわよ」

「え、あ、うん……」

私は名残惜しげに、レミリアから視線を外し、アリスのそばまで歩いた。

「咲夜。お客様がおかえりよ」

レミリアがそう言つて手を叩くと、私たちのすぐ前にサクヤがいた。恐ろしい思いは、すぐに全身を包んだ。

レミリアには好意を、サクヤには嫌悪と恐怖を抱く自分に不安を感じる。何かされたのだろうか。……レミリアに。

「館の外までご案内します」

「よろしく、咲夜」

外出したらアリスに相談しよう。優しいアリスのことだ、きっと、相談に乗ってくれる。

私は淡い期待と共に、サクヤと一緒に外へと向かつた。

ヨーリアに対する好意は、歩く度に強くなつていった。自分の意
思とは関係なく強くなつていく気持ちが恐ろしい。

そして、好意や恐怖を感じる自分と、こうして冷静に自分を考え
ている自分との距離が離れていくような気がするのが、妙に
気になつた。

感情の変化と私

アリスに相談しようにも、どう切り出せばいいかを悩んでいる内に、私はついにその機会を逃してしまった。つまり、私はレミリアに対する好意を消したくないと思うほどになっていた。

レミリアに会えない寂しさを感じながら、紅魔館を出てしばらく歩いたところで、神社から素足のまま歩き通しの私の体に限界が来た。足から力が抜け、砂利だらけの道に思い切り膝をついてしまう。

「澪、大丈夫！？」

アリスが私の顔を覗き込んでいた。これがレミリアの顔だつたらどれほどよかつただろうか。

そう心の底から願う自分が恐ろしかった。一体、何をされたのだ、私は。

「大丈夫。足から力が抜けただけ。何も問題はない」

「大有りよ！……って、あなた」

私を覗き込むアリスが、驚愕に目を丸くした。

「あなた、目が」

「どうしたの？」

紅い。そう言われて喜びを感じたのは、レミリアに好意を寄せる自分だった。絶望を感じたのが、冷静な自分だった。

「目が、紅い」

「そう、真っ赤よ？……わたくしレミリアに何かされたの？」
「多分」

アリスの肩を借りて、立ち上がる。足の裏が痛むが、この痛みは覚悟していてるので、もはや問題ではない。問題なのはむしろ、もはや恋心や、愛と呼べるほど強まったレミリアへの好意だった。まさか、人間の男性に恋する前に吸血鬼の女の子に恋をするなんて。なんて、数奇な。

「何をされたの？ 今、どんな感じ？ 説明できる？」

「……わからない」

「わからない？」

「何をされてるのかは、わからない。でも、どんな感じかは説明できる。曖昧な表現を含むかも。いい？」

頷いてくれたアリスに、私は必死で伝えようと決める。今しかない。今伝えなければ、私の心は彼女でいっぱいになつて、彼女以外の何も考えられなくなるかもしれない。

歩こうとして、アリスに止められた。

「無理しなくていいから、早く話して」

「……わかつた」

私は口を開いた。

「あの時、レミリアに会つてから私の心が激変している」

「……激変？」

頷いて、続きを話す。

「具体的には言えないけど、レミリアを求めてる。際限のない気持ちが心の奥から湧き上がりってきて、頭の中が溢れてしまいそう。このままでは、彼女のこと以外何も考えられない人形のようになってしまうかもしれない」

「……そんな、レミリアが、そんなことを？　あなた大丈夫なの？」私は首を振った。素直な、でもかなりワガママな気持ちを伝える。多分、冷静な自分が頭から追い出された時点での、恐れている瞬間は訪れる。だから、その前に。

「アリス」

「な、何かしら」

会つてからあまり経っていないアリス。私が、こんなことを言つていいのか。悩むけど、言わなければ。今、ここで。

「助けて」

ピクリと、自分の体が震えた。レミリアに対する愛情が、弾けたように強まった。急な感情の変化を、私は受け止めきれなかつた。その場で蹲ると、今こうして冷静に考えている自分を必死に保とう

と努力する。

「澪！？…………あのドラキュラリー やつていいこと悪こことが……」

「…」

ドラキュラ。そんな蔑称のような呼称でレミリアを呼ばれたことが、非常に腹立たしく思う。そう思つた自分を見限りたい気持ちを抑えて、ひたすらに溢れる感情から冷静な自分を守る。

「…………永遠亭しかないか。澪、急ぐわよ。怖いけど、耐えてね」

そう言つと、私は宙に浮いた。急に空に浮かされたというのに、元のところもつ恐怖すら感じなくなつていて。目を閉じればレミリアが思い浮かび、目を開ければ驚くような早さで景色が流れしていく。

森を行き、竹の林を飛んで抜けた先にあつたのは、小さな庵のような家だった。

「永琳！ 急患！」

ドタバタと慌ただしいくらいに急いだ様子の着地に、庵の中から左右非対称の色をした奇怪な服をした女の人と、ウサギ耳をつけた女子高生のような格好をした女人人が出てきた。

「アリス、急患って……。その子の足？ 大したことないわ。化膿してるとか消毒すれば……」

「この子、レミリアに何かされたみたいなの！ 助けてあげて！」
もはやどうでもよくなつた足の傷を言つたエイリンという女性で、アリスは私を差し出すようにして見せながら言つた。

「あら、この子の足……」

「何？ わかったの？」

頷いたエイリンは、静かに私の症状を的確に告げた。

「魅了されかかつてるわ、この子。確かに急患ね。じゃ、処置するからアリスは居間で待つて」

そう言つて、私はエイリンに受け渡された。……もう、限界が近い。

「…………よ、よろしく、お願ひ……します」

「ええ、わかったわ。よく耐えたわね。偉いわ

二口りと笑つたエイリンを最後に、私は耐えきれなくなつて、冷
静な自分を失つた。
でももう大丈夫。そう思えた。

……。

「で？ 永琳。レミリアのバカはなんだって澪を魅了なんてしたの？」

アリスの声が聞こえる。なぜかひどく苛ついたような声色だった。「ううん、なんていうかね、この件に関してレミリアは悪くないのよ」

「なんでよ。この子、レミリアに魅了されたんでしょ？」

アリスの怒ったような声が聞こえる。それに、エイリンの声も。彼女は少し申し訳なさそうな声色だった。

「それは間違いないわ。でも、それ以上にこの子の能力が今回の件の原因ね」

「……能力？」

エイリンはアリスの問いに、しばらく答えなかつた。目が覚めきつた私は、目が覚めたことを悟られないよう注意しながら、二人の話を聞く。

『幻想郷の流儀に乗つ取つて彼女の能力を表すなら……『特殊能力を増幅する程度の能力』ってところかしら』

程度？ 能力？ ……增幅？ 嫌な予感がしつつも、私は聞くのをやめなかつた。聞かることはできる。何？ みたいなセリフを言いながら体を起こせばよいのだ。一人とも声を潜めているだ、きっと私には聞かれないのだろう。……でも、私はこうして聞いている。

「それが、原因？」

「そう。しかも、彼女の能力は、他者へ干渉する力を持つてないから、必然的に他者から受けた特殊能力を増幅することになるわ」「ようするに？」

「ようするに、支援効果と、敵からの体に留まるタイプの攻撃全て

を増幅することになるわ」

私は何を言われたのか理解したくなかった。つまり、私は。

「……この子、チルノの攻撃食らってたけど」

「体を貰いた？ 違うでしょ？ 体の中に入った時点で増幅されるから、もしあの子の攻撃が澪ちゃんの皮膚を突き破つて体の中に留まつてたら、もしかしたら氷のオブジェになつてたかもね」椅子が弾かれるように動いた音が聞こえた。アリスが驚いて立ち上がつてくれたのかな。

「……レミリアに魅了されかかつてたのは、あの子がレミリアの視線にこもつた僅かな魔力を……」

「増幅し続けた結果、というわけよ。まあ、澪ちゃんの能力はまだ未完成。完成したら特殊能力を食らつたら死ぬ世にも珍しい子供になるわ」

特殊な力を持つてる人つて、この世界にどれだけいるんだろう？ 私はどれだけその人たちと会つのだろう。それが不安だった。

「……そう。わかったわ」

「理解してくれて嬉しいわ。そろそろ麻酔が切れて起きる頃だから、不審に思われないよう何か話ときましょ。何か話題ある？」

アリスは呆れた感じでため息をついた。

「あんたいつもにまして尊大ね……」

「ま、患者じやないし」

「はいはい、わかったわよ。……話題はあるわ

「聞かせて貰いましょうか」

「外来人の遭遇について、よ

そろそろいいだろう。私はゆっくりと体を起こした。お腹に感じていた妙な痛みも、足の裏の擦れるような痛みも、私の中についた燃えるような情愛も全て消え失せていた。

私の中にあるのは自分で制御できる正しい私だけだった。ほつと、胸を撫で下ろす。

「あら、おはよう

「おはよう、エイリン。おはよう、アリスお姉ちゃん」

エイリンは診察室のよつた部屋で、お医者さんが座る場所に座つていて、アリスは患者さんか、患者さんの保護者が座る場所に座っていた。私はその隣にある小さなベッドに寝かされていたよつだ。自分の見回すと、パジャマから白い入院患者が着るような服に着替えさせられていた。なぜ、誰が、私の服を着替えたのだろう。少し気になる。

「あら、自己紹介したかしら？」

私は首を振つた。

「私の名前はミオ・マーガトロイド。アリスお姉ちゃんの、妹です」私の自己紹介を聞いて、エイリンは目を丸くした。そのまま、アリスに視線を移す。

「この子が、あなたの？」

「何よ。文句あんの？」

「私は、この幻想郷にいる間だけ、アリスお姉ちゃんの家族にしてもらいました」

そう私が言つと、エイリンはさらに驚いた様子を見せて、そして大きく笑つた。

「ふふ、アリス、あなたの数倍、人間ができるわね

「つるさい」

頬を膨らませて、アリスは言つた。

「……外来人の話なんだけどね。これからはそんなに躍起に外来人を保護しなくともいいらしいわよ」

「詳しい話を聞かせてもらえるかしら」

「いいわ」

黙つて話を聞いていた私に、エイリンが何かを思いついたような表情をした。

「あなたはここを好きに見ててもいいわ。地下には入らないでね」どうするかをアリスに目だけで相談すると、アリスは笑顔で頷いてくれた。

「じゃ、こつてきます。ありがとうございます、エイリン」

私はお礼を言つと、診察室の扉を開けて、外に出た。木の廊下に、襖の扉。まるで昔話に出でてくるような作りの日本家屋だった。

「あ、目が覚めたんだ。元気になつた?」

廊下の右と左、どちらに行こうか悩んでいた私に、そんな声がかかつた。右を向くと、廊下の奥からウサギ耳をした女人の人と、その人にぴつたりと寄り添つのような形で歩いている男の子がいた。男の子は綺麗な顔立ちをしているけど、表情は暗い。私と同じ、入院用の白い服を着ている。

「はじめまして。ミオ・マーガトロイドです。エイリンから地下以外を好きに見て回つてもいいと言われました」

そう言つと、ウサギ耳の女のは驚いたよつな顔を一瞬すると、笑顔になつて私の頭を撫でた。

「すうい、すうい。よく自己紹介できたね。私は麗仙。で、こつちの子がノーマ」

ノーマと呼ばれた子は、私に小走り一礼しただけで、挨拶一つしなかつた。

「私は、ミオ・マーガトロイド。よろしく、ノーマ」
嫌われたのだろうか。いつものことだ。いちいち気にしないことにする。

「あー……。澪ちゃん、この子は口が利けないの」

「失語症?」

確かに、言葉を失うことそぞ言つたと思う。

「う、ううん、ちょっとと違うかな。なんていうか、口を開かないの。話す氣力もない……のかな?」

レイセンの質問に、ノーマは悲しそうな顔をして首を振った。
何か、ノーマにはあるのだろうか。

「筆談は?」

「え? ……この子、まだ六歳くらいよ?」

小学校に入る少し前、か。

「でも、他者との『リニアケーション』を取る手段が他にないなら努力するはず」

私は、努力した。動かなくなつた表情をカバーできるよつ、必死で言葉を学んだ。幻想郷にくる前までは、その努力が功を奏したことがなかつたが。

「え、えつとね、そんな、先生もなしにそんなことできる人なんて……それもそうか」

普通の親は文字習得を学校に任せゐる。その学校に就学する前なら、文字が扱えなくとも無理はない、か。

「そもそも、ノーマは親はいた？」

ノーマは嬉しそうに頷いた。その表情が私の心に刺さる。みんな、親がそばにいるのだろうか。お父さんに、会いたい気持ちが強くなつた。

「あ、あなたはどうなの、澪？」

「母はない。お父さんは……いないようなもの」

冷静なまま、私は言った。いつものよつに言葉を濁さなかつたのは、あわよくば同情してほしかつたからだろう。

「う、ごめん」

レイセンは、怒られたと思つたのだろうか。もつと愛想良くできればいいのだが。

「いい。……レイセン、地下以外に行つてほしくない場所、ある？」

これ以上話題を続けたくないで、私は半ば無理に話を切り替えた。

「え？ そうね、一番奥、姫様のお部屋には入らないで欲しいな。それから、厨房も避けてほしいかな」

私は頷いた。……姫様、か。頭に湧いた疑問を疑問のままにして、

私はレイセンとノーマの横をすれ違うように通り抜けた。

「あ、澪ちゃん」

「何？」

私は振り向いた。レイセンと、不安そうな顔をしたノーマが見えた。

「あなた、人里から来たの？」

私は首を振った。

「私は別の世界から来た、外来人」

「そ、それじゃあさ、ノーマと仲良くしてあげてくれない？」

そう言つて、レイセンはノーマを私の方へと押し出した。死んだ魚のような目をした彼は、私が近づくとレイセンの方へと下がつてしまつた。やはり、嫌われた。

「ノーマが私を嫌つてゐる。仲良くすることはできない」

「で、でも」

「それに、コミュニケーション手段を持たない人とは意思疎通が行えない。私はそんな人と友達にはなれない」

そう言つと、レイセンが止める声も聞かずに廊下の奥へと歩き出した。

……レイセンにも嫌われただろう。仕方あるまい。私は私のことを子供らしい子供として扱う人と仲良くなれた試しがない。

「ずいぶん、冷たくあしらうのね」

廊下の奥の、意匠の凝らした襖が開き、中から人が出て來た。この世のものとは思えぬほど美しい女性だつた。十二単のような豪奢な着物に、床まで届きそうな長い黒髪。この人が、レイセンが言つていた姫様か。私は瞬時に理解した。これほど完成された人に、姫様という呼称以外は似合わない。そんな気さえした。

「姫様。どうされたのですか？」

後ろから、レイセンの戸惑うような声が聞こえた。

「かわいらしい声が聞こえたものだから。子供なんて、久しく見てないわ」

そう言つて、姫様は私のそばまで歩いてくる。しゃがんで、私の顔を覗き込む。近づけば近づくほど、姫様の造形の美しさが際立つ。

「あなた、お名前は？」

「私はミオ・マーガトロイド。幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹になつた、外来人」

私の自己紹介に、姫様はクスリと優雅に微笑んだ。

「ふふふ、面白い子ね。私は蓬萊山輝夜。輝夜でいいわ」

カグヤ。そして、姫様。もしかして、この人は。

「かぐや姫？」

「そう呼ばれたことも、あつたわね。何年前かしら」

「この人が、かぐや姫。私が唯一知ってる昔話の登場人物。

「あなたの物語を小さい時に聞いて育ちました。お会いできて光榮です」

私は思わず、手を差し出していた。握手……してほしかったのだろう。

「……ふふっ。大人っぽいと思ついたら、心根はちゃんと、子供なのね」

「おかしいでしょうか」

「いいえ？ とっても、愛らしいわ」

そう言つて、カグヤは私の手を握つてくれた。すべすべで、柔らかくて、冷たい感じがするけど、でも確かに暖かくて。しばらくそうしたあと、私は名残り惜しげに手を離した。

「ありがとうございました。思い出になります」

「気にしないでいいのよ」

私にそう言つて微笑むと、カグヤはレイセンのそばまで歩いた。

「ウドング、その子、まだ声が戻らないのかしら」

ノーマの頭を撫でながら、カグヤは言った。

「はい。会話を交わそうとはしているのですが、どうにも反応が薄くて」

「……会話はもう諦める、といつのもそろそろ視野に入れるべきね。今度から筆談を覚えさせて」

カグヤの指示に、レイセンは何も言わずに礼をした。

「それと、てゐは？」

「今薬の材料を取りに竹林に向かつており、ここにはおりません」

「そう……」

カグヤは残念そうに肩を落とした。その様子も美しくて、私は惚れ惚れするような気持ちを感じた。

「……わかったわ。レイセン、てゐが帰つてきたら私の部屋に寄越して。話があるから」

そう言つてカグヤは歩いて私の方へと向かつてくる。きつと、部屋に戻るのだろう。

「そうだ、澪。永遠が欲しかつたら私達のところへ来なさいな」「……永遠？」

「そう、終わりなき生を、共に楽しみましょっ？」

襖を開けて、部屋に戻る寸前、カグヤは私にそんなことを言った。

「……考えておきます」

「ふふ、応対の仕方は立派な大人ね。それじゃあ、よい返事を期待してるわ」

ぱたりと襖が閉じられ、カグヤの姿は見えなくなつた。

「綺麗な人」

母よりも綺麗な人というのを、私は初めて見た。

それにしても、永遠？ なんのことだろう。人はいつか死ぬとうのに。それとも、あの人は永遠に生きる術を持っているのだろうか。……母のようにならずに済む方法があるのだろうか。

「……澪ちゃん？ 姫様の言うこと、本気にしたらダメだよ？」

レイセンがそばに来て、そんなことを言つた。

「なぜ」

「姫様、気まぐれで物を言つから……」

「それでも、死なずに済む方法があるのなら」

私は、永遠を求めるのだろうか。ずっと、ずっと生き続けるのだろうか。

レイセン、あなたなら……どうする？

「澪！ 次行くわよ！」

そうレイセンに聞こうとしたとき、レイセンの後ろの方にあつた襖が開き、アリスが出て來た。

「アリスお姉ちゃん」

「そこにいたの。楽しめた?」

私はアリスのそばまで歩いてから、頷く。

「そう? ここ、なんにもないでしょ?」

「かぐや姫がいた。それだけで十分」

「かぐや姫? ああ、輝夜のことね。まあ、子供にとってちゃんと馴染み深いか?.....」

アリスはそう言いつと、私の手を握った。

「さ、行きましょ。パジャマは私の家に運んでもらえる手はずだから、安心していいわ。靴も、くれるみたい」

そう言つて、アリスは手元の鞄から小さな、私の足に合いそうなサンダルのような靴を取り出した。

「レイセン、澪が世話になつたみたいね」

アリスが歩くと、レイセンもついてきた。玄関先まで送ってくれるのだろうか。

「いえ。しつかりとした子供さんですね」

「ホントよ。ところが澪が昔話を知つてたことが驚きよ。難しい本ばかり読んでるイメージだつたわ」

私は首を振る。

「難しい本は楽しくないから嫌い」

「正直なところも、子供らしいのね」

らしいも何も、私は子供だ。一人では何もできない未熟な存在だ。

「これから、どちらへ?」

「まあ、闇魔のところを予定してるナビ、今日は無理ね。澪も疲れたでしょ? 今からあいつのところ行つてたら日がくれても帰れないわ」

玄関までたどり着くと、アリスは私の前に靴を置いてくれる。

「ありがとうアリス」

「これくらい気にしないで」

私は置かれた靴に足を入れた。少し大きいけれど、問題なく歩ける。

さっきまでとははるかに違う。アリスも同じように靴を履くと、玄関の引き戸を引いた。

外には竹の林が生えており、ここを抜けることができるのだろうか、そんな不安に駆られる。

「じゃあね、麗仙。永琳によろしく言つといで」

「はい、それでは」

アリスは私の不安に構わず、竹林に入つて行く。

大人の外来人と私

麗仙が小さくなつて、永遠亭が見えなくなるころには、私はすっかり方向を見失つてしまつていた。

「だ、大丈夫なの、アリス」

「大丈夫よ」

同じような景色が延々と続くここが、少し怖い。

アリスにくつついでしばらく歩いていると、男の人を連れた女人が視界に入った。

男の人はスーツを着ていて、小さな鞄を下げていた。日本だつたら違和感ないのだろうけど、こんな竹林じゃ不審人物に見えてしまう。

女の人は白い長髪に、頭に大きなリボンをつけていた。白い上着に赤いオーバーオールのようなズボン。赤い瞳をしていたため、私は彼女が吸血鬼ではないかと思った。

「ん、アリスか。永遠亭の帰りか」

けど、彼女には恐怖を感じない。むしろ暖かい人柄ではないかと想像した。

「ええ、元気みたいね、妹紅。そつちは外来人？」

「まあな。その子もか？」

「そんなところ」

軽く挨拶を交わすと、一人はお互が連れてる人物が気になつたらしく、すれ違う寸前で止まつた。

「……よ。私は藤原妹紅。そつちは？」

「私はミオ・マーガトロイドです」

「一応、うちの妹。そつちの中年は？」

アリスが聞くと、モコウという女性は後ろのスーツ姿の男性に目配せした。

「私は東野康介」

そう自己紹介した彼の声は、上ずつっていた。

「だから、康介、無理して気張るなって」

「黙ってくれ。早く帰してくれ。仕事があるんだ」

「あなた随分冷たいのね」

アリスも私と同じことを思つていたようだつた。

アリスの言葉に、東野はさらに言つた。

「君には関係ないだろう。それに、言葉遣いに気をつけたらどうだ？ 私はこれでも、社員五千人を抱える会社の代表取締役だぞ？」

「この人、そんな上の役職の人なんだ。少し私は感心した。

「何？ 暗号？」

「こいつずっとこんな調子なんだよ。どっから電波受け取つてんのか、とか本氣で思つてよ。今から永琳んとこに行くつもりだつたんだ」

もしかしてモコウは、東野が病氣だとでも思つているのだろうか。その可能性は否定できないが、訂正はしておいた方がいいだろう。

「モコウさん」

「ん？」

「代表取締役というのは、日本とのある会社形態で上位に位置する役職」

「へえ、偉いさんだつたのか、あんた」

モコウが感心したように東野を見ると、彼は偉そうに胸を張つた。「ようやく理解してくれたか。にしても君、小さいのに物知りだね。偉いぞ」

そう言つて、東野は私の頭を撫でよつとした。ふと、背中に悪寒が走つた。

「ありがとうございます。お気持ちはあるがたいのですが、あなたの手に恐怖を感じるので、撫でるのをやめてください」

私は一步下がつた。東野はピクリと動きを止めた。なぜだろうか、この人の手がとてもなく怖かった。

「あはははは！ なんだこのガキ！ 面白い拾いもんしたな、アリス！ いやあ、愉快愉快」

残念だつたな、と言つてモコウは東野の肩を叩いた。彼は顔を赤くしてその手を振り払つた。

「黙れ！ なんだこの子供は！ アリスと言つたか、一体どんな教育をしてるんだ！」

「いや、私に言われても」

「私は外来人です。アリスはここにいる間だけ、家族になつてくれると言つてくれました。アリスを責めないで」

私が言うと、東野はう、と言葉を詰ませた。

「……君は何を考えてそう大人をからかうような事を言つんだ？」

「からかうなど。私は私の思つたことを伝えただけです。悪意はありません」

「何をバカな！ 子供がそんな口を聞くときはな！ 大人をバカにしてる時だと決まっているんだ！ もつと子供らしく話せないのか！？」

東野の言葉に心がさされ立つた。この人は、私がいた世界にいた大人と同じことを言つのか。私は間違つていない。何も嘘をついていない。

だけど、私が間違つていると判断されてしまうのだろう、きっと。いつものように、そういうことにされるのだ。モコウも、アリスも、大人である東野のことを信じて……。

「ちよつと、あなた？ さつきから随分偉そうな口を利いてるけど、

ちよつとは落ち着いてモノを考えたらどう？ この子みたいに「

「な、何を。君は、そんな子供の言つことを信じるのか？」

「当たり前。あなたの数倍信用に足るわ」

アリスは、言い切つてくれた。私のことを疑いもせず、信じてくれた。

「ふん。さつきから表情一つ動かさない子供が信用に足る？ 血迷つてるとしか思えん」

「……あなた、いくつ?」

「? 三十五だが」

「無駄に生きたわね」

「何をつ!?」

アリスに、東野が掴みかかるとした。私はアリスを後ろに引っ張つて、代わりに私が前に出た。東野の前に、両手を広げて立ちはだかる。

「アリスお姉ちゃんに、手を出さないでください」

東野は拳を振り上げた格好のまま、動かなかつた。しばらくして、拳を下ろした。

「……わかつた。行こう、妹紅。こんなやつらと一緒にいたくない」「酷い言い草だな、私の知り合いに。

……ああ、そうだ、言い忘れてた。私はあんたを永遠亭に送り届けたら帰るんで、あとは一人でなんとかしろよ

永遠亭の方に足を向けた東野が、驚いたようにモコウに向かって。

「何驚いてんの?」

「い、いや、まさか置いていかれるとは」

「は? なんで私があんたと行動一緒にしなきゃいけないんだよ」

そういうと、東野は私を指さした。

「そいつだって外来人だろう? 外来人は保護するべきではないのか!?」

モコウは呆れたように肩を落とした。

「あんな。お前……。いや、違う世界で子供も大人もないわな。まあ、あれだ。さつきまで持論展開してたじさん

「あ、ああ」

「あれが気に食わないんで、一緒に行動できない。理解したか?」

そんな、と東野は呟いた。鬼のような形相になつて、私に向かってきた。

「……」

「いい、私一人で大丈夫だよ、アリスお姉ちゃん」

武器を持った人形を取り出したアリスを、私は手で制した。殺さ

せるわけにはいかない。

私のところに向かつてきました東野は、私の胸ぐらを掴んで、吊り上げた。苦しくて、息がつまる。

「お前のせいでの、私はこの得体の知れない場所で一人になってしまつた！ どうしてくれる！？」

「私のせいじゃない。あなた自身の責任」

「何だと！？」

頬に痛みが。はたかれたのだというのは、いちいち確認しなくともわかつた。

また、この人も怒るのか。なぜ、私は大人を怒らせてしまうのだろう。大人達が言うように、私が悪いのだろうか。

「落ち着いて考えてください。あなたが彼女たちなら、どう思うかを」

「なぜお前にそんな偉そうに言われなければならない！」

偉そうに。いつも大人達は言つ。偉そうに聞こえてしまつのは、きつと私の丁寧語が間違っているせいだ。

まだまだ、私は勉強し足りない。もつと学ばないと。

「お前が黙つていれば、私は！」

「私はその子がしゃべってくれて嬉しいけどな。危うくバカと一緒に行動するところだった」

モコウの言葉が嬉しいけど、今は少しそれどころではない。

「黙れ！ 今私はこいつと話してるんだ！」

胸をさらに締め上げられ、さらに痛みが増す。殺されてしまつのではないだろうか。そんな不安がわずかに生まれた。

「やめてください。話し合いましょう」

「うるさい！ 大人の私が、躊躇してやるのだ！」

ギリギリと音がして、息がし辛くなる。この体を、壊させるわけにはいかない。

この体は、母にもらつた大事なものなのに。

それに、傷がついてしまつたら、またアリスが心配する。

「お、落ち着いてください。私はあなたに何もしません。悪意もありません」

「無表情で言われても、説得力などない！」

どうすればいいのだろう？

東野の気持ちも理解できないわけではない。この人はきっと、一人になることが怖くて、一人になつてしまふ原因を自分に帰結したくないから、私をこうして攻撃しているのだろう。ならば、一人でないことを示してあげれば大人しくなつてくれるだろうか。

「あ、あなたは、一人ではありません」

「何を知つた風なことを！」

「きつとこの幻想郷には、あなたと気が合う外来人がいるはずです、だから」

「そのばしのぎの言い訳をするな！　ああ、本当に、お前を見てる」とイライラする！

私は説得を諦めた。私では、言葉が足りなかつた。なぜ、私はこうも上手く言葉を運用できないのだろう。

もう、この人は私の言葉を聞かないだろう。全身の力を抜いて、私はただされるがままにされる。少しだけ、楽になる。

見たところ、東野はここにくる前まではごくふつうに働いていたはずだ。今こうして私の胸ぐらをつかみ、そして首がしまつていることに気付かないのも、今まで喧嘩などしたこともなく、加減をしらないから。ならば、私が気絶すれば、殺してしまつたと思うはずだ。いくらなんでも、その時点で我に帰つてくれるはず。

「……」

どさりと、私は地面に落ちた。硬い地面にお尻が当たつて痛かつたけど、首を締められるよりははるかにマシだった。

東野の方を見ると、一体の人形が彼の腕を押さえつけていた。動かしているのは、もちろんアリスだった。

「あなた、人の妹を殺そとするんじゃないわよ

「う、うるさい」

「因果応報。死ね」

槍を装備した人形が一体、東野の前までふよふよと浮く。いくら小さいと言つても凶器は凶器。あんなので首なり心臓なりを刺せば、死んでしまうだろう。死なせるわけにはいかない。

なぜか保護しているはずのモコウは見て見ぬ振りを決め込んでいるし、私がやるしかない。

私は東野と槍人形との間に入つて、東野をかばうように両手を広げた。

「どいて」

「殺さないで」

アリスはため息をついた。

「なんですよ？ あなた、後ろの彼に殺されかけたのよ？」

「この人は私を殺せない」

「根拠は？」

私は後ろを振り向いた。東野は私がなぜかばうのか理解できないようで、呆然と私のことを見ていた。アリスの方を見て、私は自分が考えていたことを伝える。

「この人は戦闘はおろか殴り合い一つ経験したことがないはず」「だから？」

「あのまま首を締め続けたところで、私が気絶した時点で殺したと思つて手を離す」

「……ま、そうかもね」

アリスはそう言つてくれた。ほつと、私は息をついた。

「でも、そいつ、それでは納得しないみたいよ？」

アリスに言われて、後ろを振り向く。

「私をそんな風に見ていたのか。大人をなめるのも大概にしき」

「……私、あなたを守るつと」

「うるさい！ お前のようなガキに守られんでも、私は一人でなん

とかなつた！ 勝手なマネをするな！」

この人は何を言つてゐるのだろう。何か勝算もあるのだろうか。私が恐れずに槍人形の前に出てこれてゐるのは、アリストは私を守るために力を振るつてくれてゐると信じてゐるからだ。もしさリストが敵なら、私は全てを投げ出してでも命乞いをするだろう。

この人は、勝つつもりなのだろうか。勝てるつもりなのだろうか。

「……戦うつもりなの？ アリスト？」

「なぜそんな目で見る！ 大人をなめるな！」

「もういいかげんにしろよ、康介」

今まで傍観してゐたモコウが、ようやく口を開いた。東野はモコウの方を見た。モコウは東野の目を見て、それから嫌味たっぷりに嘲笑つた。

「お前、ほんとに滑稽だな」

「な、何が」

「元の世界でのプライドか？ オーやだやだ。偉いさんになると、自ら命を捨てても守るべきプライドがあるんだねえ」

「何を言つている！？」

東野にまるでとりあわず、モコウは私を見た。

「どいてやれよ」

「でも、どいてしまつたらこの人は死んでしまう」

「別にいいだろ。こいつ、お前の家族か？」

私は首を振つた。この人が私の家族かと思つと、吐き気がする。

「じゃあ、ほっとけよ」

「私はもう人の死体を見たくない」

モコウは深くため息をついた。

「気持ちはずげーよくわかる。ホント、痛いくらいにな。

でも、割り切れよ。いや、そりや最初は無理だろうよ。でも、一回だけだ。一回、敵が死ぬのを見逃すだけでいいんだよ。な？ 目を閉じて、一步下がれ。そうすりや、お前の敵はいなくなる

「ここを動いて、そしてこの人が死んだら、私が殺したようなもの」

妙に優しいモコウが気になつたが、構わず私は続けた。

「……あのな。殺すのはお前じやねえ。アリスだ」

「なら、なおさら。私は家族に人を殺して欲しくない」

「お前のためだぞ？」

「それでも」

私はアリスを見た。アリスは呆れ返つた様子で私を見た。

「アリスお姉ちゃん、お願ひ。この人を見逃してあげて」

「……あなたは、それでいいのね全く、お人好しね」

頷く。槍人形と東野を拘束していた人形がアリスの元へと帰つて行く。

「だいじょうぶ……」

後ろを振り向くと、東野が私を捕まえようと、両腕を広げていた。それから私は精一杯抵抗しようと思つたけれど、身動きを取る前に捕まつっていた。腕を首に巻きつけるようにして回されているため、私は動けない。こんな状態では、何もできない。

「ははは、さよならだ康介。ホント、澪に感謝だよ。クズと行動することになりかけた」

モコウの手のひらから、煌々と燃える拳大の火の玉があった。

「ち、近づくな、私に手を出すな！」「この娘がどうなつてもいいのか！」

「お前、自分が燃え尽きる前に祈る以外の何ができるとでも思つてんのか？」

モコウは火の玉を東野にぶつけようと、思い切りふりかぶつた。

「待つて、妹紅」

「なんだよ。お前も澪と同じ考え方か？」

「違うわ。万が一にも澪に引火したら、澪が死ぬわ

「……は？」

アリスは私の能力のことを言つているのだろう。私は知らない振りをするしかない。

「とにかく、澪に全く当てない自信があるなら、やつてちょうだい

「いや、無理だし。髪ちょっと焼いても大丈夫だよな、って言おう

と思ってたんだが」

「女の命に何するつもりだったのよ、全く。で、どうやって始末する?」

アリスとモウはまるで冗談でも飛ばしあつてゐるような雰囲気で会話する。私は別に構わないのだけど、東野は違つみたい。

「お、お前らふざけるな! い、いいか!? 私が逃げるまで手を出すなよ! ?」

「とか言つてゐるけど。……やっぱり私がやるしかないわね。死になれい!」

アリス後ろから魔方陣が現れ、そこからいくつもの人形が出てくる。それは全て凶悪な武器で武装されていた。

「アリスお姉ちゃん」

「すぐ助けてあげる。目を閉じて」

……さすがに、連れ去られたら何をされるかわからない。ここは、割り切るしかないのだろうか。

自分の命と東野の命、どちらを優先させるべきだろうか……。

私には、ついに判別がつかなかつた。だから、黙つた。アリスに任せることを選んだ。アリスの言うとおり、私は目を閉じた。

「よし、よく選んだわ、澪」

ひゅんひゅんと周りに何かが飛ぶ音がする。これで、私は十字架を背負うことになるのだろうか。

もう思つていたら、ぐい、と思い切り首が締まつて、振り回されるような感覚がしたあと、お腹に突き刺さるような痛みが走つた。目を開けて、疑問に思つ。どうこいつことだろ? なぜ私は、アリスの人形に刺されているのだろう。

「は、ははは! 私ではない、お前が刺したのだ! い、これでわかつただろう! わかつたら、私に手を出くな!」

アリスの人形の動きが止まつた。そうか、私は盾に使われたのか。なんてふがいない。私の存在が、アリスの枷になつてゐる。なぜ、

私ごと攻撃しないのだろう。決心がつかないのだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に構わず」

「……」

アリスは何も言わず呆然と立っていた。なぜ。どうして今、何もしてくれないの。

ゆっくりと、アリスと私の距離が遠ざかる。そして、離れる速度はだんだんと早くなつてくる。

「……助けて」

アリスの姿が完全に消える直前、私はアリスの方へと手を伸ばした。

星をつかもうと夜空に手を伸ばしているような気分になった。アリスはきっと、私を探してくれる。もし切り捨てられたら、その時はその時だ。

連れ去られている最中も、私は考えることをやめない。

どうやって逃げ出すか。力では及ばない。脚力も相手の方が強い。思考力も、何もかもが私の上を行く。そんな大人から、一体どうすれば生き延びられるか。

私はそんなことをかんがえながら、ただ連れ去られるがままに身を任せた。無駄に抵抗して殺されるわけにはいかないので。

殺されさえしなければ、生きて帰れさえすれば、それでいい。

私は、必死に逃げ出す東野を見た。

その顔は怯えと恐れに染まっていた。それは、今こうして人質になつている私の心境と非常に良く似ていた。

壊れた大人と私

竹林の中には、小さな洞窟があった。東野は入り込んだ。入り口は狭く、入る時に私の服の一部が裂けてしまった。パジャマじゃなくてよかつた、と一瞬だけ思った。

東野は私を洞窟の奥の方に放つた。ゴツゴツとした岩肌にお尻をぶつけた。小さい穴のあいたお腹とお尻が痛いけど、それ以上に、怖かった。

この洞窟はとても小さく、どんなに大きく見積もっても四畳は超えないだろう。湧き水がどこからか染み出しているらしく、壁の岩は全て濡れていた。土臭い匂いがして、むせそうになる。明かりは東野がいる入り口から注がれる光だけ。

こうして入り口を塞がれでは、どうあっても逃げられない。

後ろを振り向くと、行き止まりだった。つまり、私はアリスが助けに来るまでこんな狭い場所で東野と二人きり。

「ま、全く。バカな女だ。ははは、私を、誰だと思ってる……」

そう言つと、東野は入り口に座つた。逃がすつもりはないらしい。私はひたすら黙つている。今、私の命を握つているのはこの人。機嫌を損ねて殺される羽目にだけはなりたくないなかつた。

「にしても、あの二人、美人だつたな。ふふふ……」

彼の頭の中では、一体どんな想像が繰り広げられているのだろう。絶対に知りたくない。

「……お前も、中々。まだまだ子供だが、将来性はある」

「なんの、話をしているの」

品定めするかのような東野の物言いに、私はつい、口を開いてしまつた。

「教えてやろうか?」

失敗した。

東野は腰を上げ、私に近づいて来る。目がおかしかった。据わつ

ていて、頬も妙に赤い。スーツのネクタイを緩めると、ゆつくりと私の肩に触れた。

「……わ、私は、まだ子供」

「知ってるよ。大人にしてやるよ
ダメだ。早くなんとか切り抜けないと、取り返しのつかない事になる。

「近づかないで」

にじり寄つてくる東野は、止まらなかつた。

この人はきっと、命の危険が迫つて、理性よりも本能の部分が思考の半分以上を占めているのだろう。だから、私のような子供にすら、欲情するのだ。状況判断力も鈍つっている。ならば……どうする。何かを言う？　何を言つても無駄だろう。むしろ、余計に煽るだけかもしねれない。

何かをする？　大人相手に何をしようと。

服を脱がそうと迫つてくる手を見つめながら、私は思考する。
このままあえて、汚される。それならば、あるいは。少なくとも、その間は殺される心配はない。ない、が……。

「この期に及んで、まだ眉一つ動かさないのか？」　何もしないとでも思つてゐるのか？　大人だから、子供を守るものだと、本気で思つてゐるのか？」

違う。大人は子供を守らうとはするが私を守らうとはしない。

「……やめて」

私の服がはだけさせられる。上半身の全てをこの人に晒してしまったのが、気持ち悪い。このまま私は、一生ものの記憶を、植え付けられてしまうのだろうか。そんなのは嫌だ。この男が私の最初で、そして一生残るなど、気持ちが悪くて仕方がないだろう。

「ふん、本当にそう思つてゐるのか？」　嘘の塊だな、お前は」

なんとかしなければ、早くしなければ私は、知りたくもない痛みを刻まれる。

そうだ。私に手を出さなければまだ命だけは助けてくれるかも、

とこうことを伝えれば、躊躇してくれるかも。

「し、死にたくないでしょ」

「ん？　ああ、そのことか。もういいんだ」

私は思考を止めてしまった。

「私は、あの二人に殺されるだろう。ここだってどれだけばれずに済むかわからない。だから……」

私は耳を塞ごうとする。私の両手が東野に押さえつけられ、岩肌に縛り付けられるような格好になる。まるで押し倒されたかのような感覚だった。向こうももちろん、押し倒しての感覺なのだろう。

「だから、最期にお前の悲鳴を、お前が表情を歪めるところを見てみたい」

ダメだ、諦めよう。

ここまで強い決意を揺るがすほど強い言葉を私は知らない。私は言葉を発するのをやめ、全身から力を抜いた。今の私はただの人形のようなものだ。

抵抗をやめた私を、東野は好き勝手にいじる。下の服に手が伸びようとしたとき、東野が凄い勢いで振り向いた。

「な、なんでこんなに早く」

「ここは、私の庭だ。ほら、澪を出せ。今なら命だけなら助けて……」

東野が慌てて私を左手だけで思い切り抱きかかえ、首を掴んだ。モコウとアリスがショックを受けたように目を見開いているのが見えた。首が痛くて苦しいけど、もういい。

「……何をした？」

「は、はははは！」

東野はただ笑った。ついに精神に異常をきたしたのだろうか。

「この娘に大人の恐ろしさを心の底まで刷り込んでやつた！　これ以上この娘に何かしてほしくなければ、私が逃げるのを」「……」

モコウはやれやれと首を振った。それとほぼ同時、肉が焦げる嫌

な匂いがした。その後、私は解放された。

「ぎやあああ！？」

「わかつてねーな。ほんと、わかつてねえよ」

東野の方を見ると、彼の右手が炎に包まれていた。それはやがて、腕全体に燃え広がっていく。

「もうお前、死ぬしかねえよ」

苦しそうに叫ぶ東野の叫びが、耳に障る。

「澪！」

アリスに抱きしめられて、東野から引き離してくれた。東野についた炎は全身に広がり、彼の全てを焼き尽くやうとした。

「ま、待つてモコウ」

私は彼女を止めようと口を開いた。

「ダメだ。こいつは燃やす」

「殺さないで」

「アリス。先永遠亭に行つてろ。あんまりこいつのガキに見せんな」

私の言葉は、届かなかつた。

でも、届いてくれなくてよかつた、と思う私もいた。

「わかつた」

アリスは私を抱きしめたまま、空を飛んだ。浮遊感が少し嫌だつたけど、アリスに抱き締めてもらえて、凄く安心する。

「大丈夫よ、澪。永琳はすぐ優秀な医者だから、何も心配はいらないわ。大丈夫」

「……ありがと、アリス」

疲れた。久しぶりに悪い大人に攫われたから、妙に体力を消費した。何も感じなければ、こんな風に思うこともないのだけれど。なんとかして感じずにいる方法はないだろうか。

「ちょっと眠るね。疲れちゃつた」

「ええ。ゆっくり眠りなさい」

アリスに了解をもらつと、私は目を閉じた。

意識がおちる寸前まで、迫る大きな手と、東野が燃える姿が瞼の裏に浮かんで離れなかつた。

目が覚めると、アリスの顔があつた。心配そうな表情になつていた顔は、私が目を開けたことで嬉しそうな表情に変わつた。

「おはよ、澪。気分はどう?」

「おはよう、アリスお姉ちゃん。身体的には問題ないと思う」お腹をさすつてみたが、痛みは感じなかつた。真新しくなつている入院服を捲り上げてお腹を見ると、傷一つなかつた。

「ハイリンは?」

「ここは私の家よ。傷が完治したんで、帰ってきたの」そういえば、ここは永遠亭とはかなり作りが違う。全体的に木製だし、壁の上の棚やベッドの小物入れのところには大小様々な人形が大量に置かれていた。

「そう」

私は体を起こした。アリスが優しく手で体を支えてくれようとす
るけど、私は首を振つた。ありがたいけど、自分でできることはす
る。

「……ごめんね、澪」

「何が?」

私は首を傾げた。何か私は、アリスに謝られるようなことをされ
ただろうか。

「その、お腹、刺しちゃつて」

「そのこと。気にしないで。悪いのは、アリスお姉ちゃんじゃない
よ」

東野は……死んだのだろう。私は一つの命を見殺しにした。そして、彼が死んでよかつたと思う自分が、許せない。

「……ありがとう、澪。その、それからね、あなたが東野にされた
ことなんだけど……」

あわあわと言つにくそつに、アリスは切り出した。そういうえば、

私は東野に汚されたことになっていたのだったか。なぜ彼はあんなことを言つたのだろうか。

「死にたかったのだろうか。よくわからない。

「その、あれは……」

「知つてるよ、大丈夫」

「大丈夫って……」

「何もされなかつたから」

私は真実をアリスに告げた。アリスはぽかんとして、聞き返してきた。

「な、何も？　でも、あいつは……」

「最後の彼は様子がおかしかつた。……でも、間一髪だつたのは事実。本当にありがとう、アリス。あなたのおかげで、痛みを知らずに済んだ」

もし、そのままアリスの助けが来なかつたら、私はどうなつていたのだろうか。体は壊れ、心も狂い、私は私でなくなつてしまつたのだろうか。そんな恐れが体を包む。

「そ、そんな。気にしないで。そうか、よかつた。まだだつたんだ。間に合つたんだ、私は……」

そう呴くように言つと、アリスは私の方に近寄つて、両手を広げて抱きしめようとする。

「……」

一瞬だけ後ろにさがるつとして、なんとか自分を押さえる。

アリスは敵じゃない。

そう自分に言い聞かせる。やはり、私の中で東野に襲われたことは大きい事のようだ。警戒心が変に強まつている。

「本当に、よかつた、無事で……」

ゆつくつと、私は抱き締められた。東野にされたみたいに乱暴ではなく、まるで「ワレモノにでも触るかのようだつた。

おずおすと、私も抱き締め返す。

「……ありがとう、アリスお姉ちゃん」

しばらぐ、私たちはそうして抱き合っていた。温かくて、やらわ

らかくて。ずっとこうしていたいような感覚がしてくる。

「澪、私はもう失敗しないから。今度はちゃんと守るから、安心して」

アリスは私から離れて、私の田をじっかりと見てそつと語った。

「うん」

私は素直に頷いた。

「ふふ、素直ね。……ふああ」

安心したのか、アリスは手で口をおおい、大きなあくびをした。

「眠いの、アリスお姉ちゃん？」

「ん、まあね。普段なら寝てる時間だから

私は周りを見回して、時計を探す。いくら探しても、時計らしきものはこの部屋に一切なかった。

「ああ、正確な時間は知らないわ。田が落ちてからどれくらい経つたか感覚で判断してるだけだからね」「時計なくて、不便じゃない？」

アリスは小さく笑った。

「ぜーんぜん。そもそも私時計がいるほど正確な時間必要としてないし」

そんな人がいるのか。私は驚いた。

でも、確かに学校や仕事など、正確な時間が必要である場所に所属していなければ、正確な時間はなくとも生活に困らない……のだろうか。

「じゃ、私寝るから、もうちょいスペース空けて」

「え、うん」

私はそう言われて、アリスがいる方とは反対側に少し移動する。アリスは部屋の明かりを指を鳴らすだけで消すと、私の隣で横になつた。ベッドは確かに広めだけど、まさか一緒に寝るなんて思いもしなかつた。

「アリス、私床で寝る」

「気にしないの、ほら布団」

「あ、ありがとう」

アリスに掛け布団を被せてもらひ。

アリスに迷惑ではないだろうか。やはり、どいた方がいいのだろうか。

違う。私は自身で自分の考えを否定した。

私は怖いのだ。誰かと同衾することが、何をされるのか、何があるのか、どうなるのか、わからなくて、怖いのだ。

アリスは女性だ。そんなことはわかっている。それでも、私は記憶の中の誰かとアリスを重ねてしまつ。そんなのは、絶対に嫌だつた。

「あ、アリスお姉ちゃん、怖い」

「どうしたの？」

「『めん、アリスお姉ちゃん。』めんなさい。私、誰かと一緒に眠るのが怖い」

抱きしめようとしてくれたアリスの手が止まつた。

「……詳しく、話を聞かせてもらつてもいい？」

頷いて、私は口を開く。誤解されてはいけない。アリスが嫌いだから一緒に眠れない、だなんて思われてはいけない。

「私、あまりよく憶えてないのだけれど、何かがあつたみたいで、何故か、誰かと一緒に眠ると怖くて怖くて仕方がなくなるの。アリスお姉ちゃんのことが嫌いなんじゃないの。大好きだから、嫌いたくないの。それだけはわかつて。お願ひ」

私は精一杯、言葉を尽くした。嘘は何一つ言つていない。信じてくれるだろうか。

「そうなの。……それは、『めんね。わかつたわ、あなたがここで眠りなさい』

「でも、ここはアリスお姉ちゃんの家だし」

「いいのよ。何かあつたら、呼びなさい」

私が止めるのも構わぬ、アリスは立ち上がりて部屋を出でていって

しました。

……嫌われたかな。一人で布団をひっかぶり、目を閉じる。

アリス、ごめん。大好き。

私は眠りに就いた。それから、夢を見た。

元いた世界の夢だった。

今と同じように、私が眠っている。その隣に、美しい女性……母が一緒に眠っていた。

「ねえ、澪」

「なあに、ママ」

そうだ、この時の私はまだ無知で、滅多に帰つてこないお父さんと優しくて美人の母の言つことを聞いていれば全てうまくいくと、心の底から信じていた。母も、お父さんも、滅多なことでは話しかけてすらくれなかつたけど、そう思つていた。

「あなたは、私と一緒にいたい？」

「うん！　ずっと、ずっとと一緒にいたい！」

「そう……」

ああ、思い出した。この夢は、あの時の記憶だ。忘れていた、私の過去の夢だ。なぜ今更思い出してしまつのだひつ。

「じゃあ、一緒に行きましょう？」

「どこへ？　おでかけ？」

母が頷くのが見えた。電気が消されて、母が何をしようとしているのかがよく見えない。

「とっても、いいところよ

「…」

この時の私は、息が詰まるのを感じていた。今なら、紐で首を締められてこいるということがわかつただろう。

「な、なに、を……かはつ。何をするの、ママ？　やめてよ……」

「大丈夫よ、澪。すぐ楽になるから」

あの時は、何を言われているのか理解できなかつた。どんどん紐

に込める力が強くなる。意識がぶつりと切れかけたあたりで、ようやく私は殺されようとしていることを理解したのだったか。

「……い、いや……助けて、やめて、ママ……」

「大丈夫、大丈夫よ。何も心配はいらなしわ。すぐママもいくからね。ずっと、ずっとと一緒にさよ」

確かに、必死で助かるひとがいた記憶がある。首に手を当てて、紐を外そうとするのだけど、できなかつたことを思い出した。

ああ、そうだった。この時の母は、私を殺そつとする時に細いワイヤーを使ったのだつた。我が母ながら、残酷なことを。

「……い、嫌、死にたくないよお……！」

「！」

この時初めて、私の必死の懇願が届いた。ワイヤーから力が抜け、私はようやく新鮮な空気を吸うことができた。

「（）ほつ、がほつ！　ま、ママ……。うわああん！」

私が号泣している隣で、母は自分がしようとしていたことに気が付いたらしく、自分の手を見つめてわなわなわと震えていた。

「……澪」

泣いてる私に構わず、母はどこかへ行つてしまつた。しばらくすると私は泣き疲れて眠つてしまつた。どこかへ行つた母を追おうとはしなかつた。

そして、次の日の朝、目が覚めて、全てを忘れていた私は、いつものようにリビングへ行き……。

吊り下がつて揺れる母を見つけた。

「！」

私は飛び起きた。そうか。

私がアリスと眠ることを恐怖したのは、母と重ねてしまったからか。

にしても、今日の夢で様々なことを思い出せた。疑問も、同時に湧いてきた。

なぜ母は私と心中しようとしたのだろう。

…… 考えても詮無いことだ。 考えても、気が滅入るだけ。 もう一

度眠ろう。 そうすれば、幸せな夢が見れるだろう。

それから朝まで、私の意識が途切れるることはなかった。

一 田田の朝と私

「眠い。仕方あるまい、と自分を諫める。

「入るわよ、澪」

「どうぞ」

アリスは入つてくるなり驚いた。

「……目充血してゐるわよ?」

「眠れなかつた。おはよつ、アリスお姉ちゃん」

私はベッドから降りて、昨日ハイリンにもらつた靴を履いてそういつた。誰かに朝起きておはよつと言えたのは、随分久しぶりだつた。

「あ、おはよづ。眠れなかつたつて、どうして?」

「夢を見た」

「どんな夢?」

私はアリスのそばまで行くと、アリスを見上げた。昨日と似たような模様の服の上から、Hプロンをつけている。料理していたのだらう。

「隣で眠つていた母に殺されかける夢」

「……そつ。それは怖い夢ね」

「夢だとよかつたのだけれど」

「え?」

「なんでもない」と私は首を振つた。

「ふうん……。今」飯できたんだけど、眠いんなら寝とく?」

「いい。朝寝坊の癖がついたら困る」

たとえサボり気味とはいえ、学校に通つているのだ、早起きの習慣はなくしたくない。

「そ、そつ。ほんと、しつかりしてゐるわね。」いちばん用意してゐるから

「ありがとう、アリスお姉ちゃん」

隣の部屋に移動したアリスについて歩く。

本当に『ご飯までくれるのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。私に何かできることはないだろうか。小間使いの代わりくらいなら、できるだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に何かできることはない？」

「ん？ …… そうね、じゃお皿洗い頼んでもいいかしら」

「もちろん」

私は頷いた。家事くらいなら、私でもできる。掃除、洗濯、買い

物に料理に。ここに来るまでは全部一人でやっていたのだ。

「じゃ、『ご飯食べてお皿洗いしてもらつたら、今日も行きましょうか』

「うん」

アリスは、すでに料理が乗っているテーブルについた。私もアリスの向かい側に座る。木製の皿に、スープのような白い液体が入っている。これが朝食だろうか。アリスが食べ始めるのを見てから、私も食べ始める。

「いただきます」

「……ねえ」

私がスプーンを持つてスープを飲もうとしたところで、アリスが声をかけてきた。何かしてはいけないことでもしたのだろうか。

「ちょっと気になつたんだけど、その『いただきます』って何？」

言われて、初めて気づく。そういうえば、アリスは食事の前に何も挨拶をしていなかつた。この世界では食前に挨拶をする習慣がないのだろうか。もしくは、アリスにその習慣がないか。

「挨拶。意味は知らないけど」

「ふうん」

アリスはそう言つと、小さくいただきましたと言つた。

「これでいいのかしら」

頷く。

私は食事を始める。何の料理か聞きたいのだけれど、食材を知つ

たせいで食欲が失せるということが往々にしてあるので、知らないまま口に運ぶ。毒ではないはずなので、知らなくても大丈夫、……なはず。

口に含んでしばらく味わう。人肌程度の温度なので、舌が火傷するなんてことはなかつた。甘い香りととろとろとした食感で、味も良好。とてもおいしい。シチューではないだろうか、と予想する。

「すごくおいしい」

「お口にあつてなによりだわ」

何の料理だろうか。キノコが多めに入っているから、キノコシチュー……なのだろうか。

「何の料理？ 帰つてから作つてみたい」

「あなた料理できるの？」

「一通りは

「すごいわね」

アリスは感心してくれた。必要に迫られて覚えた事だつたが、こうして褒めてくれるのなら、覚えてよかつたと思える。

「これはキノコシチューよ。いっぱい作ったから、少なくとも今日はつとこれだからね」

「わかった」

これが三食か。目の前に出されている分だけだと、昨日一切の物を口にしていない身としては物足りない氣もするが、食べられるだけで幸せなことなのだ。我慢しよう。

「おかわり、してもいいのよ？」

「……いい」

「迷うくらいだつたらすればいいのに。変に遠慮しそぎよ」

私は首を振つた。

「これ以上食べたら、お腹を攻撃された時に吐いてしまうかもしない」

「攻撃されること前提で物を考えないでよ。……」「、そんなに危険じゃないから」

そうは言われても、昨日は一人もの人間に襲われた。チルノとう氷精を名乗る子供と、東野の二人だ。元の世界でも、一日に二回も襲われることはなかつた。

「……ごめん、アリスお姉ちゃん。それでも、私は警戒してしまつ」私がそう言つと、アリスは残念そうに肩を落とした。

「まあ、信じろつていう方が無茶よね。でも、お腹空くわよ？」

「満腹で動けなくなるよりかはマシ」

「ホント、普通の子供とは真逆に考えるのね」

そう言つてアリスは笑つた。嘲笑でないことば、アリスの顔を見ればわかつた。

「……話を変えるけど、今日はどこへ行くの？」少し気になつて、聞いてみた。

「ん、昨日も通つた魔法の森を抜けて、再思の道を越えて、三途の川を渡つて、それから裁判所の閻魔に会いに行くわよ」

私は空いた口が塞がらなかつた。その行程にはかなりの無理があるようしか思えなかつたからだ。

「え、し、死ぬの？」

「は？……あつ、そういうえば、そだつたわね。ごめんごめん、勘違いさせたわね」

少し逃げるかどうかを考え始めていた私に、アリスは手を振つて否定した。

「え？」

「幻想郷じゃあね、閻魔大王は別に死ななくても会えるのよ」

「……」

会いたくない。閻魔様に会つたら、私はきっと舌を抜かれてしまう。ただでさえ他人よりコミュニケーション手段が少ないのに、言葉まで奪われたら、私は……。

「何心配してるの？」

「え？ 舌を抜かれないと……」

私がそう言つと、アリスは大笑いした。

「あはははは！ 大丈夫よ、澪。その闇魔ルールには厳しいけど、生きてる人に何かする、なんてことないから！ にしても、あなたもそんな面があつたのね～」

なんだかバカにされてるみたいで、むつとする。

「変？」

「いいや、とつても可愛いわ」

「……」

なんだか、もうどうでもよくなつた。可愛い、か。初めて言つてもらえたな。嬉しい。

「ご馳走様でした」

キノコシチューを食べ終わると、私は両手を合わせて礼をした。

「それも挨拶？」

頷く。私よりも先に食べ終わったアリスは、遅めではあるが手をあわせ、ざいじちなくご馳走様をした。

「……毎日こじんなのやつてるの？」

「うん。毎日、毎食」

アリスは煩わしそうな顔をした。

「へえ。面倒なのね、外の世界つて。前に来た外来人もやつてけど、あいつが特殊なんじやなくて、外で習慣付いてんのね」

アリスの言葉に、少し気になるところはあつた。私の前にアリスのところに来た、外来人。……昨日、レイムはアリスが連れて來た外来人が何かを企てているということを言つていた。もしかして……。

想像だけで物を考えていた私は、かぶりを振つて思考をやめた。

決めつけで考えてはダメ。

「どうしたの？」

「え、えっと、シャワー浴びていい？ 浴びたくなっちゃって」

多少無理のある言い訳とは思つたが、アリスは不審に思うことはなかつた。

「そう？ そこ扉を出て右がバスルームよ」

「わかった。浴びて来る」

私は椅子から降りると、言われた通りにバスルームに向かう。

脱衣所も湯船も木製で、そうでないのはシャワーへッドくらいだつた。

脱衣所でパジャマと下着を脱いで裸になると、私はバスルームに入つた。バスルームと脱衣所を仕切る扉を占めると、私は驚いた。ここは森のど真ん中、電気も水も来ているはずがないのに、最新式の電子パネルが備え付けられてあつた。

どういう原理なんだろうと思いながら、ありがたいので使わせてもらう。熱いシャワーを浴びて、体を洗う。昨日東野に触られたところは、念入りに洗つた。

「澪。サイズが合うかどうかわからないけど、私が子供の時の服貸してあげる。ここにタオルと一緒にいておくから」

最後に髪を洗い終わつたところで、見計らつたようにアリスがそう言つて來た。

「え？ あ、ありがとうアリスお姉ちゃん」

またパジャマを着るつもりだった私にしたら、それは嬉しい驚きだつた。

……でも、いいんだろうか、こんなに色々としてもらつて。バスルームを出ると、アリスの言つていたとおりに、タオルの下に着古したような服が置いてあつた。下着も一緒だったのは、素直に嬉しかつた。お古だとかそういうことは、気にならなかつた。

最初私は幻想郷にいる間パジャマと同じく下着をずっと着るしかないと思っていたのだ。まさか、こうして服を着替えることができることなんて。

アリスに渡された服を着て、洗面所にあつた鏡を見た。黒い長い髪と、黒い瞳、全く動かない表情をして立つてゐる私は、アリスが今着てゐる服をそのまま小さくしたような服を着ていた。

なんだか本当にアリスの妹になつたようで、とても嬉しかつた。

「アリスお姉ちゃん、お待たせ。アリスお姉ちゃんは浴びなくてい

いの？」

大きめのバスケットのような鞄を下げ、出かける準備を終えたアリスに私は聞いた。

「まあね。夜浴びるわ。何か持ち物……なんて、なかつたわね。じや、準備はいい？」

うん。私は頷いた。

「じゃ、行きましょうか」

自然な動作で手を握ってくれて、さらに私はアリスと家族なつかのような錯覚した。

家を出て、森を歩く。靴があるのとのないのとでは、大きな違いなのだということを肌で実感した。

幻想郷に来て二日目の生活が始まった。

裁判所までの道のりと私

昨日と同じように森を行く。硬い土を踏みしめ、木々を越えて、アリスは迷わず進んで行く。

「ねえ、アリスお姉ちゃんはどうして方角がわかるの？」

「え、方角？……ううん、方角はわからないわ」

私は首をかしげた。方角もわからず、「どうして進めているのだろうか。

「ここいら辺は私、よく來てるから。もう道を憶えたわ。それだけよ」

「へえ~」

それだけでも、できるだけすごい。

「ふふ、あなたも見知った道なら地図いらぬでしょ？」

「そうだね。それと同じかな」

アリスは頷いた。

「じゃあさ、その再思の道つてどれくらいでつくるの？」

私の質問に、アリスはしばらく黙つた。

「そうね、だいたい……。日が登り切る前には着くわ。そんなに遠くないわ」

正確な時間は教えてもらえなかつたが、わからないのはアリスも同じだろう。

「そなんだ。ありがとうアリスお姉ちゃん」

私たちはそれからしばらく黙つて森を歩く。

昨日、聞きそびれたことがあつたのをひとつ、思い出した。しかし、聞いてもいいのかどうか、悩む。

私の手を握りながら歩くアリスを見上げる。綺麗で、優しくて強い私のお姉ちゃん。嫌われたくないし、嫌いたくないのだけれど。

「ねえ、アリスお姉ちゃん。一つだけ、聞いていい？」

「いいわよ」

「東野、どうなつたの？」

アリスは黙つた。目を閉じて、何かを考えている。

「……澪。あなたは優しい子よ」

「え、あ、うん、ありがと」

優しくなんかない。私は、東野に死んでいてほしい、って思つような悪い子なのだ。優しいなんて、間違つた評価だ。

「だから、言うけど。

……東野は、死んでないわ

私が驚いたのは、嬉しかつたからか、怖かつたからか。わからなかつた。

「え？」

「そりや、酷いことされかけた澪からしたらあいつが生きてるのは居心地悪いかもしれないけど、大丈夫よ。あいつ、一度と悪さできないから」

そうは言われても、不安ではある。また、襲つて来たら。今度、私は助かることができるのか。最後の最後、彼は私に興味を持つていた。もしかしたら、というのもあるかもしれない。

「……どうしても、つていうなら、妹紅のところに私が出向いて、その」

「いい。……私は大丈夫。東野が生きていっても、気にしない」

私は言いにくそうに言葉を濁すアリスに無理をして言つた。本当なら、殺してと言つてしまひたかつた。でも、それをすればそれこそ本当に私は十字架を背負つてしまうことになる。そうなれば間違いなく、東野は私の中ですつと残り続けるだろう。そんなのは、ごめんだつた。

「そう。ありがとうね、澪」

「教えてくれてありがとう、アリスお姉ちゃん」

私は精一杯の感謝を込めてそう言つた。表情が動いたのなら、どんな顔になつているだろうか。

「ねぇ、再思の道つてどんなところなの？」

「三途の川と地獄を結ぶ長い道よ

「ふうん」

三途の川、か。渡つていたら死んでしまつたりして。

……いや、あるいは、もう私は死んでいるのかも。アリスはちょっと変わった死神で、私に同情してしまい、こうして家族ごっこを続いている。本當なら、巨大な鎌で私の魂を刈り取らなければならないというのに……。

そんなストーリーが頭に浮かんだ。

「ねえ、アリスお姉ちゃん」

「ん？」

「私、実は死んでて、ここはあの世、ってことはない？」

アリスは否定も肯定もしなかった。なぜだろう。

「……なんとも言えないわね」

「どうして？」

「前に、自分が死んでた事に気付かずここに来た人がいたことがあつたから……」

私も、そんな人間の可能性がある、ということか。

死んだと氣付かず、存在しない体を守るため、必死になる人間は、さぞかし滑稽だろう。笑い話にするなるかもしれない。

「アリスお姉ちゃんは、どう思つ？」

「あなたなは生きてるわ。保証する」

アリスの言葉がきつかけで、私は思い出した。……よく考えたら、私は足を切つたり腹を貫かれたりしたではないか。痛みも感じた。それは何よりの、生きている証拠であろう。……痛みを感じたことを喜ぶなど、変な私。

「そう？ なら、信じる」

私の中ではもう結論が出ていたけれど、そう言った。このことだけじゃなくて、私がアリスに何かを騙されている可能性は、否定しきれないけど。

……まあ、別にアリスになら、騙されてもかまわない。割と本気でそう思う。

「ふふ、とつても嬉しいわ」

アリスは笑つてくれた。私に本当の姉がいたら、こんな感じなのだろうか。

「ねえ、アリスお姉ちゃんには、妹いる?
ん~? あなたがいるわ」

「本当の妹」

アリスは寂しそうに首を振つた。

「いないわ。……そういうば、ちょっと気になつたことがあって」「何? なんでも答えるよ」

こちらからばかり聞くのもどうかと思つていた矢先、アリスがそう言つてくれた。

「あなた、普段はどうやって生活してるの?」

「普通に」

「でも、『両親一人ともいないんでしょ?』

昨日も交わしたような質問だつた。私は昨日はぐらかすような答え方をした。しかし、今は違う。今は、ちゃんと答える。

「ううん。母がないだけで、お父さんはまだ生きてる」

「え? でも、昨日は」

「昨日は、お父さんは病院に連れて行つてはくれないという意味」後付けだけど、嘘をついていました、よりは遙かにマシだと判断した。

「.....ふふふ。隠さなくとも大丈夫よ。昨日はまだ、警戒してたんでしょう?」

「アリスお姉ちゃん。私は、あなたのことが嫌いなんじゃないでしょ?」

「わかってるわ」

必死で言い訳をし始めた私に、アリスは微笑んでくれた。

「警戒心があるのは悪いことじゃないわ。出会つてばかりの人に家庭の事情を話せ、つていう方が無理よ。だから、気にしなくていいわ」

そう言つてもらえて、私は安心した。

「『』めん、アリスお姉ちゃん。でも、今度はちゃんと話すかい」

「辛いのを無理に話さなくていいのよ？」

大丈夫。私はそう言つて、何から話すかを頭の中で整理してから、口を開いた。

「私のお父さんは、物凄く偉くて、物凄く働いて、物凄く稼いで、私にたくさんのお金を贈ってくれるの。

お父さんは、いないのと同じもの。でも、世界で一番愛してる。きっと私は、お父さんがいるから、元いた世界に帰りたいんだと思う」

「お金って……。もつと他にあるでしょ？」

「ない。でもいい。

お金が、私とお父さんとの愛の証。見えない、あやふやなものでなく、愛を形にしてる。毎月、お父さんはたくさんのお金を贈ってくれる。一度計算してみたけど、毎日三のようになに食べべて、遊び倒してもまだ余るくらいにお金をくれる」

「いや、お金のこととはもういいから、他の」

「それが、お父さんが私を想ってくれてこなとこう証拠。だから私は、お父さんの愛を無くしたくないから、ギリギリで生活していた。毎日、五百円に食費を抑える。光熱費、水道代、削れる所は全部削つて、お父さんの『愛』を残せるだけ残す。いつか、数えきれないくらいの『愛情』を集めて、会いに来てくれたお父さんにどれだけ私がお父さんを愛したか、わかつてもう。きっとそうすれば、お父さんだって私と一緒に暮らしてくれる」

「いや、あのね、澪」

「お父さんは私のことを愛してくれてる……はずだと思つ。一緒に暮らしてくれないのは、きっと母を思い出してしまつから。だから、きっとといつか、私を認めてくれれば、充分、一緒に暮らしてくれるはず」

「澪」

話し終わった私に、アリスが話しかけてくれた。

「……あなたの想いはよくわかったわ」「わかつてくれた？」

私はうれしくなる。やつと、私達の愛を理解してくれる人が現れた。やつぱり、アリスは優しいな。

「ええ。ごめんなさい。私、気付いてあげれなかつた。あなたは、まだまだ、子供だつたのにね」

「私は、一度も大人になつたことないよ」

「ごめんなさいね、澪。元の世界に帰れば、あなたは、暖かいご飯が用意してあつて、ご両親が迎えてくれると勝手に思つてた。だから、今こそ言うわね」

アリスが、私の手をしつかりと、握りしめてくれる。

「私どすつと……いえダメ、まだ、速いか……。帰りたくなくなつたら、言いなさい」

「え？」

「だから、もし元の世界に帰りたくないなら、私に言いなさい」アリスは奇妙なことを言つた。

「なんで？ 私、絶対に帰るよ？」

そう私が断言すると、アリスは残念そうに首を振つて、小さく、本当に小さく何かを呟いた。

「こんな家庭で育つて歪まないはずがないじゃない。……なんで気付かなかつたのよ、私のバカ」

私には聞こえなかつたけど、アリスの顔は悔しそうだつた。

「どうしたの、アリスお姉ちゃん」

「なんでもないわ。……さ、もうすぐ森を抜けるわよ」

森の木々が晴れ、私の視界は一気に広くなつた。地平線の向こうまで続く長い道の周りを、赤々しい彼岸花が咲き誇つている。そんな道を、私とアリスは行く。

「ここが、再思の道？」

アリスは頷いた。ここまで綺麗な道を歩くのはどこか気が引ける。

「ええ。ここは本来、死にたがりを思い直させるための道なのよ」

「……」

死にたがり……。自殺志願者か。気持ちはわからぬくもないが、ある命を自ら捨てるといつのはやはり、理解に苦しむ。

「あなたは？」

「？」

「あなたは、死にたい？」

アリスは奇妙なことを聞いてきた。

私は首を振つて答えた。私が、死を望んでいる？ あり得ない。

「そ、そ、う。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスは慌ててそんなことを言つた。

「アリスお姉ちゃんは？」

「え」
「アリスお姉ちゃんは、死にたいって思つたこと、ある？」

アリスは否定も肯定もしなかつた。なぜだろう。

「……興味ある？」

「何に？」

「人が死に關してどう思つてるか

興味。ないわけでは、ないだろう。けれど、こんな質問をする、ということは、アリスとしては聞かれたくない部類の質問なのではないだろうか。

「あるよ。でも、アリスお姉ちゃんが嫌なら、言わなくていいよ」
アリスはクスリと笑つた。

「ふふ、ありがと。澪は、本当にいい子ね」

「そんなことないよ

私達はそれきり、しばらく黙つて歩いた。

彼岸花が綺麗。道の脇を固めるようにして咲く花々は不思議で、本当に死者の国に来たみたい。

「ねえ、澪」

「なあに」

「あなたは、お父さんのこと、好き？」

私は首を振った。

「愛してる」

何よりも、誰よりも。

「……そう

アリスはそういうと、何も言わずに歩く。私も疑問を口に出さず、アリスと手を繋ぎながら歩く。

しばらく変わりばえのしない道を歩いていると、前の方から女人が歩いてきた。

「ん？ ……アリスじゃないか！ どうしたんだ、こんなところに！」

「その女のは、ほとんど一瞬、いや、一歩でこちらのすぐ前まで来た。

「あなたのところの閻魔に用があつて來たのよ」

「へえ、映姫様に？」

アリスは頷いた。構わず歩いているのだが、その女のは私達について歩いている。

女のは着物のような古式ゆかしい服装で、腰には大量の古銭を吊り下げ、手には大鎌。髪の色は赤みがかつていて、眼光は鋭い。チャキチャキの姉貴風、といえばわかりやすい……のだろうか。

「小町、あなたこそ何の用？ 仕事はいいの？」

「いいんだよ。最近外界から裁判所に来ることが多くなつてな、あたしは商売あがつたりさ！ ま、困るかそうでないかといえば、困らないんだけどね！ あははははは！」

「コマチ、という人は豪快に笑つた。ひとしきり笑つたあと、ようやく私の方に視線を向けた。

「うん？ アリス、こいつ誰？」

「澪よ。ほら、澪、自己紹介」

アリスに促され、私は口を開いた。

「私はミオ・マーガトロイド。外来人で、幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹にしてもらいました。よろしくお願ひします」

私は簡単にそう言つと、軽くおじぎをした。

「へえ、よくできた子供じゃないか。あたしは小野塚小町。三途の川の舟守さ」

「三途の川……。舟で渡るのか。知らなかつた。

「にしても、お前、死にたいのか？」

「どうして？」

「いや、普通の子供は地獄になんて行きたがらないからさ。もしかしたら、つて思つてな」

確かに、私だってアリスがここに用事がなければ来たいと思わなかつただろう。

「私は、死にたくないから」

「そりや重複。一つしかない命、粗末にすんなよ」

「ありがとう、コマチさん」

「小町でいいよ」

そう言いながら、コマチは快活に笑つた。

「やうやつて諭してると、死神っぽいのだけれどね」

「つむさい、あたしはいつでも模範的な死神さ！」

「どの口が言つうのよ……」

アリスは笑つてゐるけど、怖くはないのだろうか。この人は、死神を名乗つてゐるのに。

私の怯えを、コマチはいともたやすく読み取つた。

「うん？ 靔、あんたあたしが怖いのかい？」

「……ごめんなさい」

私が謝ると、意外にも彼女は嬉しそうに笑つた。

「気にすんな！ こんなでも怖がつてもらえるんだな！ いやあ、

アリス、本当にこの子はいい子だな！」

「あのね。もうちょっと弁明しようとは思わないの？」

アリスが言うと、コマチは何かに気付いたような顔をした。

「ま、怖がらせるのは悪いよな。青、あたしは死神だけど狩る方じやない。運び屋さ」

「…… そうなの？」

私が聞くと、コマチはニカリと笑った。

「おおよー。 その証拠を見せてやるー。 …… アリス、 目的地は映姫様んとこでいいんだな？」

「まあ、 送つてくれるつてんならありがたいけど」

「おっしゃー！」

さうコマチは嬉しそうに言つて、 死神の鎌を振り上げ、 遥か遠くを見つめた。

「澪、 これがあたしの…… 力だ！」

ヒュカ、 と地面に鎌が突き立つた。 が、 特に変化は見られない。

「さ、 一步踏み出しな。 そうすれば、 あたしの力の凄さがわかるよ。 じゃあね、 澪、 アリス」

そこについて、 これからもかなり歩かなければならぬのに、 コマチはまるで田の前に目的地があるかのような口ぶりだった。

「ありがとう。 じゃあね」

アリスは一步踏み出した。 すると、 消えた。

「……アリスお姉ちゃん？」

「ほら、 あんたもついて行くんだよ！ 死神妙技、 名付けて縮地！ とくと味わいな！」

「それは仙人の……」

言葉を言い切る前に、 私はコマチに押され、 一步進んだ。 すると、 景色は一変していた。 花の咲き誇る美しい道から、 荘厳な裁判所の入り口まで、 一瞬で移動していた。 後ろに下がつても、 また景色が一変する、 ということはなかつた。

裁判所の前で待つっていたアリスの前まで駆け足で行く。

「すごいでしょ、 小町の能力」

私は頷いた。 本人は縮地と言つていたが、 それとはまた違うような気がした。

「さ、 三時間ほど短縮できたわね。 運がよかつたわ。 さ、 映姫に会いにいくわよ」

そう言つとアリスは裁判所の扉を開けた。

「……え」

その向ひには、驚くべき光景が広がつていた。

愛するお父さんと私

裁判所の中は、テレビで見たようなものとほとんど変わらなかつた。違うのは、裁判官が座る場所と、証言台しかないこと。弁護人が座る場所も、検察が座る場所もない、奇妙な裁判所だつた。

今はそこにスーツを着た男性が立つており、口うるさく何かを言つてゐる。その言葉を黙つて聞いているのは、小さな、私くらいの女の子だつた。頭に偉そうな冠をかぶつて、手には錫を持っていた。

「アリスお姉ちゃん、今審理中だよ、いいの？」

「……難しい言葉知つてるわね。いいのよ。黙つて聞く分にはあいつ何にも言わないから」

おもちゃを見つけたような顔をしたアリスは、裁判所の周りを囲うようにして設置されていいる傍聴席の、裁判官と証言台に立つている人などがはつきり見える席に座つた。私達以外に、傍聴している人はいなかつた。

「ほら、澪。ここ座つて。どんなヤツがどんな言い訳してるか聞きましょ。面白いわよ」

私は黙つてアリスの隣に座つたけど、内心穏やかではなかつた。いくらなんでも、趣味が悪いと思つたからだ。人間、必死になれば何でもするし何でも言う。嘘もつくなんて当たり前。それを面白がるなんてことは、私にはできなかつた。

「へえ、あいつ面白いわよ、ほら、みてこ覽なさい」

そもそも、なぜここはなんのチェックもしないのだらう。ザル警備にもほどがある。

「澪、ほら」

「え？」

アリスに言われて、私は証言台に立つ男性を見た。全然面白くなかつた。アリス、どうして、どうして。

「お父さん」

「え？」

「ねえ、アリス。どうしてお父さんがここにいるの？」

「お父さん！」

私は思わず、叫んでしまっていた。いけないことだと知つてはいたけど、けど。

私が叫ぶと、女の子は私の方を見た。それからお父さんを見て、一言。

「……と、彼女は言つていますが。何か弁明はありますか、星空
七星」

私と同じくらいの年の女の子は、私と同じくらい冷たい声色でそんなことを言つた。

「お、俺は知らない！ あんな子供も、あんな女も、知らない！」

「知らない？ …… 知らないって、どうして？ 忘れてしまったのかな。私は、忘れられたから、ここに来たの…… だろ？ お父さんの口ぶりからすると。

「知らない？ 忘れていた？ …… それは通りません。ならばなぜあなたは…… 毎月大量の金銭を彼女に送つていたのです？」

「そんなの、愛してるからに決まってる！」

まるで咎め立てるような女の子の言い方に、私はつい、口を出していた。女の子は私の方を見ると首をかしげ、次にアリスの方を見た。

「アリス。説明を求めます」

「私もよくわからないわ。連れ出しましようか？」

アリスの提案に、女の子は首を振つた。

「…… その方が、より早く彼に罪の重さを理解してもらえるでしょう。その年頃の娘には辛いでしょうが、いつか知ることです。むしろ、今知らねば永遠に知る機会は訪れないでしょう。星空湧。発言を許可します」

私は一度深呼吸をした。大丈夫。お父さんは悪くない。だから、だから大丈夫。

「な、何から説明したらいい?」

「……そうですね。あなたとこの男性の関係について、ですかね」

「わかった、裁判長さん」

「映姫です」

私はあくどんとした。

「裁判長と呼ばれるのは相応しくないのでやめてください。映姫、もしくは闇魔とお呼び下さ」

「う、うん、わかった、映姫」

よく考えて。お父さんが悪く思われなによつて、言葉を紡いで…。

「嘘は、厳罰ですよ」

「……舌、抜かれちゃうの?」

「厳罰です」

エイキは否定も肯定もしなかった。怖くて、全部本当のこと話しここまおつかと思ったけれど、ダメだ、と首を振る。私の舌と、お父さん。どちらが大事なんて、比べるまでもない。

「私も、お父さんも、愛しあってます。家族として」

嘘は言つていない。そうだ、悪いことなんて、何もないんだから、包み隠さず言えばいいのだ。

「……あなたは、父を愛している。それは誰が見ても明らかです。では、彼はどうか?」

エイキは、お父さんの方を向いた。見ているいつうちが凍りそうなくらい冷たい瞳だった。

「お、おれ、俺は!」

「嘘は、厳罰ですよ」

再び、エイキはそんなことを言つた。けど、私に対して言つた時よりも数倍、本気に感じた。

「……俺は、そんなガキを愛していない」

私は、何も考えられなくなつた。

何も、考えたくなかつた。

「お、お父さん？ なんで、なんでそんなことこのつなの？」

「なんでもクソもあるか。あの女が浮氣して作ったお前なぞっ！」

浮氣。ウワキ。お父さんの言葉を信じるなら、私は、お父さんの子供じやなくて。私は、要らないう子で。

違う。私は頭を振る。

「じゃあ、なんでお父さんは私に『愛』をくれたの？」

「愛い？ んなもん、俺は……」

「毎月、送ってくれた。たくさんの『愛』を、毎月、たくさん！ それが、お父さんが私を愛してるので、何よつて証拠じゃないのつー？」

「そんなもん送つてない！」

「いいえ」

エイキが、鋭く口を挟んだ。

「あなたの送つたお金」

「それがどうした？」

「彼女は、それをあなたからの愛だと、思つてこるみつですね」

エイキの言葉のせいで、お父さんは私を露骨に嫌そうな顔で見た。存在すら許さない、そんな、この場にいる誰よりも冷たい顔をしていた。

「は、はは。……気持ち悪い」

必死で積み上げていたのに、完成する寸前で崩された積み木を思い出した。いや、あるいは、賽の河原で、ただひたすらに石を積み上げ、あと少しのところで鬼に崩されたような……そんな感覚が、私の中でした。

「ど、ど、どうして。私、お父さんのこと、愛してるんだよ？ 家族として、お父さんとして。どうして気持ち悪いなんて」

「それが、気持ち悪い。お前は、俺の子供じやねえ。だから、早く、消えろ」

私は、黙ることができなかつた。

「なんで！？ 私は、お父さんが帰つて来た時のために、必死で、

お父さんからのお金貯めてたんだよ！？　お父さん、お願ひ、気持ち悪いなんて言わないで！　一緒にいて！　そばにて！」

言葉を尽くせば尽くすほど、お父さんと私の距離は離れて行く。「なんでもする。どんなお願ひでも聞く。だから、お願ひだから」これが、本当の気持ち。私の、包み隠さない真実。

「お父さん、私を……愛して……！」

「……断る」

返ってきたのは、拒絶だつた。違う。もつと、近くで。もつと、そばに！　そうすれば、わかつてくれる。わかつてくれる……。

私は傍聴席から飛び出し、お父さんのそばまで走る。誰にも、止められなかつた。お父さんのそばまで、すぐに辿り着いた。お父さんを見上げる。久しぶりに見たお父さんは随分と瘦せこけていて、疲れている様子だつた。大丈夫、私が癒してあげれば、何も問題はない。

「お、お父さん。わ、私は、星空澪、だよ。私、私なりにお父さんのこと愛してる。大好き。一緒に暮そう？　ね、きっと、疲れもとれる、かもしれないし。

……だから、愛して、お父さん。娘としてじゃなくてもいいから」「黙ってくれ、もう。帰れ。消えろ。……死ね」

視界が、歪んだ。目の前の光景が潤んで、何も見えなくなる。

「……判決、黒。これ以上審理の必要性は認められません。地獄で娘の心を歪めた罪、とくと反省なさい」

「はっ。お前のせいで地獄行きだ。どうしてくれる。ほら、お前も死ね！」

怨嗟の声が、私の心を埋め尽くす。うん。お願ひだ。やつと、かけてもらえた言葉だ。叶えてあげたい、かなえなきや。

「わかった！　待つてね、お父さん！」

私はどびきりの笑顔をお父さんに向けて言った。

「連れて行きなさい。それから、その娘の保護を頼みましたよ、アリス。それが善行になります」

誰かが扉を開けて、お父さんのことを連れて行こうとする。足音が私のそばまでくるけど、気にせず、私は声をお父さんにかけた。

「待つて」

私は、黒装束に身を包んだ人達を止めた。お父さんが、振り返ってくれた。

「お父さん、最期に、抱きしめ……おでて、つないでいい?」

「……好きにしろ」

私はいそいそと、お父さんと手を繋ぎにして、その手が、すり抜けた。

「……え?」

「気付かなかつたか? 僕は、お前のせいで、死んだんだ! お前も、早く俺を追つて死ね。地獄で虐め抜いてやる」

「うん、わかつた。すぐに逝くな」

死んでいた。お父さんは、すでに死んでいた。だったら、娘の私も、後を追わなきや。それが、私の義務なんだ。お父さんも、そう言つてゐるし。

「何をしていいのです。早く、連れて行きなさい」

黒装束の人達は、一礼するとお父さんをどこかへ連れて行つてしまつた。

「……死ななきや」

振り向いたところで、女人の人……アリスが、私の前に立ちはだかつていた。

「どうして、アリス」

「アリス『お姉ちゃん』でしうが。どこへ行くの?」

さつきまで、私達の会話を知つてゐるはずのアリスは、なぜかそんなことを聞いてきた。

「死に行くの」

「地獄行きよ?」

「地獄に、行きたいの」

お父さんが、待つてくれてるから。

「あなた、あいつの

「お父さん！」

私は、思わず怒鳴つていた。

「……あなたのお父さん、なんて言つてたかホントにわかるてる？」

「嘘め抜いてやるつて言つたのよ！？」

「わかつてるよ。でも、それがお父さんなりの愛なんでしょう。どんな形であつたとしても、私はお父さんに愛してくれるなら、それでいいよ」

私がそう断言したとき、エイキが私のそばまで歩いてきた。背の高さは私と同じか、私よりも低いくらい。でも、この人は多分私じや比べ物にならないくらい、違う。何もかもが。

「自己紹介がまだでしたね。私は四季映姫。あなたは？」

「星空澪」

私はそう名乗つた。すると、エイキが手に持つた錫を、私に突きつけた。

「それは、悪行ですよ」

「……？」

「あなたは、この幻想郷では『マーガトロイド』を名乗るとアリスに言つたのではないですか？」「

「でも、お父さんに認めてもらわないと」

私は相手が誰かなど考えもせず、反論していた。

「血の繋がりはないかもしない。心の繋がりさえもないかもしない。ならば、名前だけでも……。その気持ちは、十二分に理解できます。故に悪行ではあれ罪ではありません」

まるで、学校の先生みたいな口ぶりだった。でも、学校の先生でさえ比べられないくらい、偉いのだろうということは、簡単に理解できた。確かに、一度交わした約束を破るのは、いくら繋がりを確かににするためとはいえ、褒められたことではない。名前などの繋がりなんてなくとも、死んで地獄に行けば、お父さんから愛してもらえるんだから、何も心配はいらないのだから。

「『めん、アリスお姉ちゃん』

「え、まあ、いいわよ」

アリスは少し照れた様子だった。

「アリス、よく許しました。善行ですね。澪、よく頭を下げました。これで、先ほどの悪行は帳消し、です」

「ありがと、エイキ。じゃあね」

「行かせるわけにはいきません」

踵を返して一人になろうとしたところで、エイキに服を掴まれた。「どうして？」

「自殺は罪です」

「そんなの知ってるよ」

「賢いですね。最近は自らの命は自らの物だという理論から、命を投げ捨てる人間が増えてきています。その中でも、自殺は罪だと理解しているあなたは、十分に素晴らしいです」

話が長い。でも、すごくわかりやすい。エイキの表情からは読めないけど、言葉尻から、私のことを褒めてくれているのだといつこどがわかった。

「ありがと、エイキ」

「いえ。では」

「それでも、私は死ぬよ」

錫で額を打たれた。軽くではあるけど、痛いものは痛い。

「父に歪められたあなたに、罪はありません。けれど、私は一人の年長者として、あなたを打ちました。思い直してください」

「嫌」

私はキッパリと、言い切った。なぜ悪行ですらないのかは知らないけど、それでも私は死ぬのを諦めたくなかつた。お父さんが愛してくれる、最後のチャンスかもしれないのに。

「……アリス。もし、この娘が壊れたとして」

エイキは私の目の前で、そんな風に話を切り替えた。

「な、何を縁起でもないことを……」

「あなたは、この娘が治るまで支えることを約束できますか？」
「私、何かされるのかな。少し、不安になつた。どう壊されるのだろうか。恐い。」

「……当たり前、よ」

「閻魔との約束は、重いですよ。では、澪」

「よしやく、エイキは私の方に田線を合わせた。

「あなたの父親は、あなたを愛していません。今までも、これからも」

「嘘だ」

「ピシリと、私の中にビビーが入つたような感覚がした。

「閻魔が嘘を吐くとでも？……彼は、いや、あなたは本来ならば祝福されて産まれる子供だった」

「そうだよ、母は優しかったし、愛してくれた！」

「幻想です」

私は、何も言えなくなつた。私の頭の中が、真っ白になる。

「あなたは、世間一般、特に外界の日本における愛情を体験したこと�이ありません。だから、両親からの虐待を、愛情だと思い込むことができたのです。いくら本や、物語で真実の愛を知つても、体験したことがなかつたから、そんな離れ業ができたのです」

「お母さんからもお父さんからも虐待なんてされてない！私は、何もされなかつた！殴られもしなかつた、蹴られたりもしなかつた、タバコを押し付けられたことも、罵倒を浴びせられたこともなかつた、犯されたり、殺されかけたりなんてこともなかつた！私は、虐待されてなんか」

「そうですね。あなたは何もされなかつた。料理を作つてくれることも、褒めてくれることも、微笑みかけてくれることも、服を買つてくれることもなければ抱き締められたこともない。『えられたのはただ一つ、なんの暖かみもない、お金のみ』

「それが、お母さんとお父さんの愛情表現だったんだ！」

「ネグレクト、という言葉に聞き覚えは？」

「……」

「賢いですね。よく、勉強しましたね。でも、気付きたくなかった。
違いますか？」

「ダメ、なの？」

「ええ。愛情を勘違いしてもらつては、困ります。お金は、愛情を表現するのに足る媒体であることは否定しませんが愛情そのものであることはけしてありません。あなたは生い立ちからして不幸であり、幻想に浸りたくなる気持ちもわかりますが、今は前を向いて、アリスとの家族関係を」

「エイキ」

「なんですか」

「私、ダメなのかな」

「……」

「エイキは何も言つてくれない。アリスでさえ、何も。

「『愛して』って、そんなに思っちゃダメな事なのかな」

もう、何も見えなかつた。生暖かい液体が、視界全体を覆つて、潤んで、歪んで。頬に流れる生暖かさが、気持ち悪くて。

「……まさか」

「私、頑張つたんだよ。エイキ。愛してもらおう、つて必死だつたんだ。お父さんが難しい話をしても合わせられるように勉強したよ？　お父さんがお金に困つておうちを訪ねて來たときにお金を好きなだけ渡せるよう、お金も貯めた。それでも足りなかつたとき、身体を売る覚悟だつてした。気持ち悪かつたし、怖かつたんだよ？　私があげれる全部をあげるつて伝えたんだよ？　でも、ダメだつた。ねえ、エイキ。なにが間違つてたのかな？　私のどこが、ダメなんだと思つ？　私がどうすれば、お父さんは私を愛してくれたと思う？」

「エイキは、しばらく田を閉じ、そして、いつも言った。

「本当に、頼みますよ、アリス」

目を開けると、鋭い眼光が、私を射抜いた。

「あなたがどう努力しても、あなたは愛されることはないでしたし
よう。あなたの存在そのものを、彼は認めていなかったのですから」

私は、かくりと膝から力を抜いた。そんなわけがない。お父さん

が、私のことを愛してないなんて。そんなわけ。

「……あなたは、外界では……いわゆる、要らない子供、といつことになります」

私は、今日なんど心を碎かれただろう。なんで、私は……。

「もう、やめて」

「だから、例え死んだとしても、悪霊になりかけている父親に愛されることは、けしてありません。むしろ、いたずらに傷を広げるだけです。だから」

「やめてッ！」

もう、嫌だ。こんな、こんな辛い思い、したくない。嫌だ。苦しい。

……こんな人たちに構っている暇なんてない。早く、お父さんの元へ。

私は一人に見えないようになりつつむき、舌を伸ばす。気付かれないうちに、一気にそれを噛んだ。

血の味が口全体に広がって、い、いき、が。

「澪！？ え、映姫何したのよ…」

「舌を噛んだのです、急いで医師を……小町を呼んで、永遠亭まで早く！ いないなら、永琳を呼んで来てください！ 応急処置はこちらでやっておきますから！」

「ええ、わかったわ！」

アリスが走つてどこかへ行つた。

「……大丈夫です。あなたは、死なせません」

口の中に、エイキの小さな手が入ってきた。

……死なせてよ、辛いから。

私は酸素がなくなつたせいか、だんだんと意識が薄れていつて、いつしか、私の意識は途切れた。

もう一度と、田観めたくなかつた。

目が覚めると見知らぬ天井だった。体を起こして、周りを見る。この部屋には私の寝ていたベッドしかなかった。全体的に暗いイメージで、私から見て右の壁に、学校にあるようなスライド式の扉があった。六畳ほどの空間に、アリスとエイキ、そしてエイリンがいた。アリスは私のそばについて、エイキは入り口そばの壁にもたれかかるようにして立っている。エイリンはアリスの隣で、私のことを見つめていた。

「もーじー」

挨拶しようとして、出来なかつた。何かが口に嵌められていることはわかつた。それが何か触つて確認しようとして、それすらもできることに気付いた。

「お目覚めですか、澪」

「もぐ、もが？」

「自殺未遂に加えて、死にたがり。失礼は承知で猿轡と拘束服を着せています。着替えさせたのは女性なので、なんら心配する必要はありません」

……私が自殺しないための処置だらうか。なら、嘘を吐いて、この人から離れて、そこで死のう。

「……ねえ、澪。舌、もう噛まない？」

頷く。もちろん、嘘。

「嘘は、厳罰ですよ。永琳、お願いします」

「はいはい」

エイリンが私の後頭部に手をやつて、口にかかっているタオルを外してくれた。拘束服の方は、まだ脱がせてくれないけど。

「……ありがと、エイリン」

私がお礼を言つと、彼女は首を振つて立ち上がつた。

「気にしないで。もう死のうだなんて思つちゃダメよ。……じゃあ

ね、映姫」

「ええ。またお願ひしますね、永琳」

スライド式の扉を開けて、永琳は部屋を出でていってしまった。

死のうと思つては、ダメ？ なぜ？

「……。では、澪」

ゆっくりと、私にエイキが近づいてくる。錫を胸の高さで持つて

いる姿は、まさしく地獄の閻魔大王。

「その前に。お父さん、どうなつたの？」

歩みを止めることなく私のすぐそばまでくると、エイキは私を憐れむような目で見つめた。

「あなたの父親は、半悪靈となつてしましました」

「私がすぐに死ななかつたからだよ。田の前で死んであげれば、少しば

その続きを、唇に錫が当たられたために言い出すことができなかつた。

「父親を想う純粹な気持ち。それは評価します。しかし、だからと言つて自殺は認められません」

キッパリと、エイキは言つた。

「お父さんのそばにいちゃ、ダメなの？」

「はい。あなたの父親はもう死んでしまいました。あなたの関係ないところで、勝手に、自らの命を絶つたのです」

お父さん、自殺だつたんだ。私のせいだ、と言つていた。

「じゃあ、私はお父さんを追うね」

また錫で打たれた。

「いけません。それはいけません。……アリスト、この娘はかなり冷静で理知的だという話でしたが？」

「……父親のことになると、年相応よ。いえ、それ以上に直面的ね

エイキはアリストの言葉を聞いて、少しだけ残念そうにした。

「あなたほどの年頃だと、父親、母親が世界の全てに思えるでしょう。両親以外の大人が信用に足るに値しないような人間ばかりだつ

たなら、なおさら」

「じゃあ」

エイキは錫を自分の胸元まで戻すと、静かに言い切った。

「それでも、あなたは死ぬべきではありません」

「死ぬことが、娘としての義務なの」

「そのような義務はあなたの頭の中にしかありません」

「お父さんが死ねと言っていた！」

「だからと言って、素直に死ぬ必要はありません」

「……わかった、もういい！」

この人に認めてもらうことは、できない。そもそもこの人はお地蔵様みたいに石頭だ。一度決めたことは、例え何があろうと変えない、そんな人なのだろう。この人は説得しようとするだけ無駄だ。

「じゃあ、私アリス……お姉ちゃんと帰るから、これ、着替えさせて

て

私が言つと、しばらくエイキは悩んだ。懐から何かを取り出そうとして……やめた。

「約束してください。自殺しないと」

「うん」

私はすぐに頷いた。私にだって、策はある。

「約束、しましたよ。信じています」

嘘は、厳罰です。幾度と聞いた言葉は、發せられなかつた。

「……使わないの？」

アリスが、意外そうに聞いた。

「何をですか？」

「淨玻璃の鏡」

エイキは首を振つて、アリスのそばまで歩いた。

「あれは、罪人に使う物です」

「使おうとしてたじやん」

「……はい。悪行ですね、全く。私としたことが、子供の言つことを疑うなどと」

ズキ、と胸が痛んだ。ジクジクと、膿むような痛みが心を襲う。

「では、アリス。澪を頼みますよ」

「わかつてゐるわ。妹、だからね」

嬉しそうにアリスは微笑んだ。その様子を見て、また胸が痛む。

「ああ、それから、博麗靈夢に伝言が」

「何かしら」

「あまり隠し事はないよ」と

「わかつたわ」

アリスは頷くと、私の手を引いて外に出ようとした。

「それでは、澪、アリス。善行を積み、良き人間となるのですよ。特に、澪。あなたはまだ幼い。間違うこともありましょうが……絶望せずに、前へ進むのです。さすれば、いつかは道がひらけましょう」
格言めいた、長い言葉。でもそれは、全部私を思つてのこと。こんなにも気にかけてくれている人を、私は、騙すのか。

「……うん、わかつたよ」

「そうですか。では」

私はアリスと一緒に部屋を出た。長い廊下が続く、変な場所だつた。

「さ、ついてきて。帰つてお祝いしなきゃ」

アリスは嬉しそうに私の手を引いて、歩き始めた。多分、ついていけば外に出れると思う。

「……お祝い?」

「ええ。自殺、思いとどまつてくれたでしょ? そのお祝い

胸が軋んだ。

「そんなの、いちいち祝わなくてても」

「いいえ。家族が死んでしまって、一人きりになつて、その後を追いたい、つて気持ちを振り切るのはとても大変よ。あなたみたいな子供なら、なおさら。

それに、自殺なんてしなくてよかつた、つて思つてくれなきゃ困

るわ

「痛い。胸が痛い。優しい言葉なんてかけないで。私はあなたに嘘をついてる。私、まだ死ぬつもりなのに。まだ、自殺願望は消えてないのに。」

「……？ どうしたの、顔が暗いけど」

「私、行きたいところがあるの」

「痛い。けど、けど。

「どこ？」

「ごめん、アリス。私は、それでもやっぱり、お父さんのそばにいたい。これがきっと最後なんだ。お父さんに見てもうう、お父さん愛してもらう、最後のチャンス。だから、私は。」

「……昨日見た湖」

「ごめん、エイキ。」ごめん、アリス。

体の変化と私

それから四時間ほど、歩いた。もうすっかり夕暮れ時で、空もかなり赤くなっている。湖の水が赤を反射して、すくなく綺麗だった。

「……こんなところに何か用？」

「景色が、見たくて」

……死にたい。けど、アリス達を裏切りたくない。だから私は賭けることにした。

紅魔館の主、レミリア・スカーレット。彼女が私の気配を感じ、ここに使者を送つてきたら死ぬ。そうでなければ、お父さんには六十年後くらいに会いに行こう。

そこまで思つて、自分で自分を笑う。

レミリアの言つた通りになつた。私は今、心の底から死を望んでいる。死にたくなるよう苦痛があるという暗示だとばかり思つていただけに、少し不思議な気持ちだつた。

……レミリア、気づくかな。気づかないかな。

私は綺麗な湖を眺めている。もつと、こんな景色を見ていたい自分がいる。こんな景色をアリスと見てみたい自分が、いた。自分の中では、一つの思いが激しくぶつかっていた。

死にたくない。アリスを、エイキを裏切りたくない。

死にたい。お父さんに会わなきや。会つて、愛してもらわなきや。自分が一人いるかのような錯覚に陥つた。

「……」

チクリ、と手に刺すような痛みが走つた。ゆっくりと手を見ると、

手のひらの中に小さなコウモリがいた。

「アリスお姉ちゃん」

「ん」

「おトイレ」

私はそう言つと、アリスの横を通り抜け、湖のそばにある森に入

る。アリスが見えなくなつたところで、コウモリを手放す。そのコウモリはたくさんに分裂し、いつしか黒い塊になつていた。その黒塊はやがて小さな人の形をとり、やがてはレミリア・スカーレットになつていた。

「こんなにちは、ミホ。わざわざこんなところに出来て、しかもひと氣のないところまで移動してくれた、といつことは……。いいのね？」

賭けの結果は、お父さんに会いに行くことに決まった。

「うん」

「じゃ、行きましょうか」

頷く。バサバサと耳障りな音が私を包む。

「ミオ？ 何の音……っ！」

気付かれたけど、もう遅かつた。私の体はコウモリの集団に持ち上げられ、地面を離れていた。

「レミリア！ 止めなさい！」

「私はただこの子の望みを叶えてあげるだけ。じゃあね」

「望み！？ まさか、ミオ！？」

レミリアと一緒に私は宙を飛んで紅魔館の中へと入つた。レミリアと始めて会つた、謁見室のような部屋だった。腕を引かれ、豪奢な椅子の裏にあつた扉まで連れていかれた。扉を開けると、部屋の中の様子が見えた。

天蓋付きのふわふわもこもことしたキングサイズのベッドが、一つだけあつた。クッションもたくさんベッドの上におりてあり、まるでお姫様が眠る場所のようだつた。

「ここは？」

「私の寝室よ」

レミリアは部屋に私を連れ込むと、扉を閉めて鍵をかけた。ここから出す気はないらしい。私も、出る気はない。ここが私の墓場になるのだ。

改めて部屋を見回すと、ここだけ、壁の色が赤というよりもピン

クに近い色をしていた。なぜかを聞けばきっと、内臓の色だから、などといった可愛げのない回答が返つてくるのだらうけれど。

私は腕を掴まれ、半ば力づくでベッドの上に放り投げられた。ふわりとした感触が、背中全体を包んだ。心地よい感覚に、安心する。

「……食べないの？」

「食べるわよ」

きしりと、ベッドが少し軋んだ。レミリアが、私を見下ろすよう私のことを見ている。その瞳は酷く扇情的だった。……何も感じないが。

……なぜなにも感じないのだろう。私はあらゆる能力を増幅し、少しの攻撃で死ぬのではなかつたのか？

「どうしたの？ 難しい顔して。私だけを見なさい」「す、トレミリアは私の頸に指を当てた。背筋が痺れるような感覚がした。」

「……食べないの？」

「食べるわよ。……色んな意味で、ね」

思わず体を起しじやうとして、肩を押さえつけられた。悪戯をしているときの子供のような顔で、レミコアが首を振った。

「あなたは、女の子」

私は思わず、そんなことを口にしていた。

「あら、耳聴いのね。こくつ？」

「……十歳」

トレミリアはにい、と笑みを深くした。

「まだ、あなたの年頃の子は食べたことなかつたわ。……痛いのは嫌でしょ？ だから、気持けよくしてあげる。ほら、怖がらないで……」

トレミリアはそれから、私の全身を撫でていく。東野にされていることは同じはずなのに、不思議と嫌悪は抱かなかつた。

「……ふふ、頃合いね」

全身を撫で回され、すっかりできあがつてしまつた私に、レミコ

アは淫靡に舌なめずりをした。私の首筋に口を寄せる。

「……レミリア。いいよ」

「……いただきます」

あれ、なんでレミリアがその挨拶を？

そう思つたのとほぼ同時、私の首にレミリアの牙が突き立つてい
た。皮を引き裂き、血管に牙を滑り込ませる。首に生暖かい液体が
大量に流れていることがわかつた。

様々な痛覚神経を刺激しているはずなのに、私は全く痛みを感じ
なかつた。

むしろ。

「……ん」

「「ぐつ……」」「ぐつ……」

むしろ、もつと。全然、痛くない。それどころか。

「……あ」

「じゅる、じゅるる……」

吸われることを、嫌だと思えない。このまま吸い尽くされたいと
さえ思う。この経験したこともないような快楽が手に入るなら、私
は。

「……ん？」

私の血を啜つていたレミリアは、扉の外に目を向けた。波のよう
に押し寄せていた快感が、嘘のように消えた。

「レミリア、飲まないの？」

私の声はあるでないとやつだつた。そんな自分に、嫌気がさす。

「待つて。……来る」

レミリアの妖しく光る赤い瞳は、扉の向いに誰かを見つけたよ
うだつた。その、次の瞬間。

寝室の扉が吹き飛んで、たくさんの人形を従えたアリスが、立つ
ていた。

「ミオはどう？」

視線をキヨロキヨロとさせていたアリスは、素裸にされていた私

の方を見ると、顔を歪ませてレミリアに向かつて叫んだ。

「澪に何をした！」

「ただ、請われるままに血を吸つただけよ。痛くなんてしてないわ。至上の快楽を、一緒に『えてあげたの。見て、この顔……は、変わらないわね。この子の身体、触つてみて？ 全身しつとり濡れてるわよ？ まるで甘い蜜のよう。ふふっ』」

レミリアに撫でられて、私はピクリと体を跳ねさせた。それが、さらにアリスの怒りを加速させた。

「痛い目みたくなかったら、澪を離しなさい」

騎士のような甲冑を着込んだ、アリスよりも大きい人形が、レミリアに向かつて一步進んだ。あれを、アリスが動かしているのか。「この子が、望んだことよ」

「ひやっ」

私の内腿を慈しむように撫でられ、思わず声を上げてしまった。

「……っ。死にたいの？」

「今あなたはどんな気持ちなのかしら。目の前で大切な人が壊されしていく感じ？ それとも、犯されて心身ともにメチャクチャになつた家族を見る感覺？」

「黙れ。何がしたい」

「この子を食べたい」

まるで見せつけるように、レミリアは私の耳たぶに口をつけると、噛みちぎった。耳から血が流れしていくのは感じるが、痛みは感じない。

「……ん？」

しつかり咀嚼したあと、レミリアはそんな風に疑問符を浮かべた。

「それ以上、妹に手を出さないで」

「……食事の邪魔をしないで」

レミリアは、ふわふわとしたスカートの中から、カーデのようなものを取り出した。

「……弾幕勝負？ 勝負？ そんなもので、私の怒りが収まるとでものを取り出した。

「……弾幕勝負？ 勝負？ そんなもので、私の怒りが収まるとでものを取り出した。

も…？」

「譲歩してやるわって言つてんのよ。吸血鬼に、なりたての魔法使いが敵うとでと思つてゐるのかしら」

アリスは腕を指揮者のように動かした。彼女の後ろから、大小様々、古今東西を問わず優秀な武器防具で武装した人形が出てきた。人とよく似ているけど、呼吸音がしないし、血が流れていないことはすぐにわかる。

「……本気、つてわけ？ 咲夜達はどうしたのかしら」

「眠つてもらつてるわ」

レミリアはここで始めて、焦つたような顔をした。

「へえ。やるじゃない」

「ミオを返せ。さあ、あなたにも見せてあげる。私の、力を……を？」

アリスは、最後で不審な声を上げた。脈拍が少し上がつてゐる。何かを恐れ……いや、驚いてる？

「……あ、あなた、み、耳たぶが」

「……え？」

指摘されて、自分の耳たぶを触る。つつきレミリアに齧られたところが、きれいさっぱり再生していた。

「……」

「痛いつ！」

いきなりレミリアは私の拳に噛り付き、そのまま噛み碎いた。なぜか、もう痛みは感じるようになつていて。

レミリアはしばらく咀嚼して、すぐにベッドの上に吐き出した。ぐちやぐちやになつた私の拳がぶちまけられる。

「……アリス、この子は返すわ」

「どういう風の吹きまわし？ それからこの子の拳を食べたこと、どうしてくれたわけ？」

比較的柔らかい装備をしている人形が私のそばまできて、私のことをゆっくりと抱き上げた。アリスのところに運ばれるところには、

食べられた私の拳は再生していた。

「ライオンがライオンを食べないよう、人間が人間を食べないよう、吸血鬼も吸血鬼を食べないわ。それが答えよ」

私は、その答えの意味がわかつてしまつた。

「わ、私、は」

私はきっと、いつも通りの無表情。でも、声には、身体情報には私が怯えているといふことが出でているはずだ。何を言われたのか、わかつてしまつたからこそ、怖かつた。

「ようこそ、吸血鬼の世界へ。ミオ・マーガトロイド」

ユリリアはニヤリと笑つてそう言った。

「……くつ。ミオ、取り敢えず、帰りましょう」

警戒しながら、アリスはゆっくりと下がっていく。

「……あら、あら。逃げられるといいわね、クスクス」

私たちが謁見室のような部屋を出る寸前、そんながらかうような声が聞こえた。

アリスは、何も言わなかつた。

吸血鬼になってしまった。アリスと一緒に暮らしていけるのだろうか？

私が真っ先に心配したのが、そのことだった。アリスの心拍や呼吸数が詳しくわかるというのも怖かった。吸血衝動もある。けど、なにより嫌なのは、アリスに見限られること。生きているのに一人。それは、何よりも恐ろしくて、何よりも嫌なことだった。

そして、そこで始めて、私は気付いたのだ。私は、何をしようとしていたのか。こんなにも、こんなにも必死で助けてくれる家族がいるのに、私はお父さんへの想いを優先させてしまった。その、罪深さを。

「……アリスお姉ちゃん」

「何？」

アリスは私を抱きかかえながら、曲がり角の向こうを確認していた。今、紅魔館から逃げる最中。アリスと私は隠れながら移動を続けていた。ここへ来るときも、隠れて移動してを繰り返し、人形を取り出したのはレミリアの寝室の前だったそうだ。

「アリスお姉ちゃん、私戦う」

なぜだか、今は誰にも負ける気がしなかつた。かつて他人に感じていた恐怖がまるで嘘みたいに、薄れては消えていく。

「……無理しなくていいのよ」

苦々しい様子でアリスは言った。

「お姉ちゃん、ごめん」

「何が」

「約束、破つてしまつて」

アリスは何も言わなかつた。

「お姉ちゃんととの約束も、エイキとの信頼も裏切つて、一人で死のうとした。ごめんなさい。私、お姉ちゃんのこと、全然考えてな

かつた。お父さんのことで、頭がいつぱいになつて、それでアリスは、私の頭に手を乗せた。

「あのお父さんじや、いつぱいになるのも仕方ないわ。それは、わかってる。でもその口振りじや、もう死ぬ気はないんでしょ？」

頷く。もう、自殺はしない。お父さんに会つのはもつと後になる。お父さんは、きっといくら後になつても愛してくれる。そう、地獄で、お父さんからの終わることのない『愛』を。

「どうする？ お姉ちゃん、皆、殺しちゃうの？」

アリスは首を振った。

「いえ、誰一人傷つけないわ」

「……サクヤは倒したんでしょう？」

「まさか」

アリスはニヤリと笑つてそう言つた。全部はつたり、だつたのか。

「今なら大丈夫、行きましょ」

「うん。……それからお姉ちゃん、私一人で歩けるから」

私を抱き上げたまま走り出そうとしてたアリスに私はそう言つた。はやく体を動かしたい。暴れたい。そんな衝動が体の中についた。「そう。わかつたわ。行きましょ、ついて来て」

アリスは一気に走り出した。私も彼女についていき、入り口まで一気に駆け抜けた。

エントランスまで辿り着くと、アリスが足を止めた。そこには、一人のメイドが立っていたからだ。

「お客様。私や美鈴に連絡なしに館に侵入されでは困ります。すみませんが、外に案内させていただきます」

「……よろしく、サクヤ」

私はサクヤに対する恐怖が消えていた。いや、それどころか、彼女に対して乾くような変な気持ちを感じる。

「……お嬢様からは、丁重にお送りしようと仰せつかつておりますので、私はあなたをお送りします」

それはまるで、命令がなければ何かをしてくる、といつ直面であるかのようだつた。

「それはどうも……」

アリスは警戒を解き、普段通りの調子に戻つた。
「しかし、次無断で館に入られた場合……。

「一度と館から出ることとは出来ないでしょう。……とだけ、忠告いたします」

精一杯の脅し。私はサクヤのセリフをそう感じた。怖いどころか、必死さが伝わってきて微笑ましくさえある。

「わかつたわ。胸に刻み込んでおくわ」

「ありがとうございます……」

サクヤは玄関の大扉を開けた。アリスと私はサクヤに一礼をしてから紅魔館から出た。

「……面白かったね」

「え？」

私の感想に、アリスはたじろいだ。

「……ごめん、なんでもない」

「そ、そつ？」

彼女の反応で、自分の抱いた感情が、異常なものだと気付いた。死の危険を感じさせようと必死なサクヤが、面白くて、楽しくて。私は人間ではなくなつたということを、嫌でも実感した。

「おかえりですか、お客様」

「え、ええ」

メイリンは鋭い目つきで私とアリスを睨むようにして見ると、門を開けてくれた。

「次からは、私のところから入ってきてください」「わかつたわ」

アリスは頷くと、半ば駆け足で紅魔館から出た。私もゆっくりとした足取りで、アリスに続く。空を見上げると、月が上がっていた。思つたより長い間レミリアと過ごしていたようだ。

「……ねえ、澪、あなた、目が赤いわよ」

「……ごめん、お姉ちゃん。私吸血鬼になってしまった」

アリスは、なんと言つだらうか。

「歩きながら、話しましょうか」

頷いた。アリスの手を取ろうとして、私は自分が人間ではないことを思い出し、手を下ろした。

その次の瞬間、アリスが私の手を握ってくれた。昨日も歩いた森を、ゆっくりと私たちは歩いている。

「……吸血鬼に、ね」

「うん。でも、迷惑かけそうになつたら出て行くから、嫌わないで。ううん、嫌つてもいい。せめて、殺さないで」

吸血鬼は人間の敵だ。人間の味方であるアリスからしたら、憎い仇も当然である可能性は十分にあるのだ。

「いや、別に嫌いもしないし殺さない……とは、約束できないわ」

「……そうだよね」

まあ、嫌われはしないのだからいいか。

「あなたが私を食べようとしない限り、殺さないわ」

私ははつと、アリスの顔を見た。

「いいの？ ありがと」

よかつた、よかつた！ 私、殺されないんだ。退治されちゃわないんだ……。

「にしても、吸血鬼に、ねえ。どんなことができるか、わかる？」
アリスに言われて、自分の中を探つてみる。けど、体感的には普段通り。

「わからない。ごめん、お姉ちゃん」

「いいのよ。でも、何ができるかくらいは知つておいた方がいいわね……。永遠亭にでも行く？」

私は首を振つた。

「いい。私は、お姉ちゃんの妹なんだから、吸血鬼の力なんて積極的に使いたくない」

「嬉しいこと言つてくれるわね」

アリスはそう言つて笑つてくれた。吸血鬼などといふ化物になつた愚かな私に、こんな微笑みをくれる。

ああ、この人が、私の家族なんだ。身を包む幸福にを噛みしめる。

「……お、お姉、ちゃん」

この流れにまかせて、言つてしまおう。言いたかった一言を。なんて、返してくれるだらうか。お父さんみたいに返されるのだらうか。怖い。アリスに死ねなんて言われたら、どうしよう。でも、きっと、多分。

私は一縷の望みかけて、言つてみた。

「なに、澪？」

「あ、愛、してる」

「……。私もよ、澪」

私はやつと、誰にも首を傾げられなこよつた愛情とこゝもの理解できる。そう感じた。

新しい愛情と私

アリスの家に帰つて、私とアリスは食事を取ることにした。朝に採つた食事と寸分違わぬ食事。

「いただきます」

「いただきます」

朝と違つて、一人合わせて挨拶をする。僅かな違いだつたが、よ

り家族の繋がりのようなものを感じて、嬉しかつた。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

アリスがスープを口に含む前に、話しかける。

「レミリアのところには外来人、いたのかな」

「いたんじゃない？ でもビーヴして？」

少しだけ言うのをためらう。

「レミリアが私を噛むとき、いただきます、って言つたから」

「……」

思つた通り、アリスは快い表情をしなかつた。

「……あなたはご飯になりに行つたのよ」

「うん、ごめんなさい……」

叱られてる。先生以外に叱られるなんて、初めての経験だつた。

怖い、とは感じる。

「……次は、ないわよ。もし次自殺なんてしようものなら、縛り付けてでも改心させてやるからね」

「はい」

家族の縁を切る、なんて言われるかと思つたけど、そんなことはなかつた。だから、嬉しい。叱つてもらえた。悪いことをしたら叱られる。当たり前のことなのに、嬉しかつた。叱られて喜ぶなんて変だとは思つたが、それでも、悪い気はしなかつた。

「レミリアのところの外来人が来た、っていうのはわかつたけど、

エイキのところにはいないのかな?」

アリスはスープを飲みながら、何かを考えている様子だった。しばらく黙つたあと、ゆっくりとアリスは口を開いた。

「あなたの父親を連れていった黒服。あれ、外来人だつて噂よ。思い出す。随分冷たい印象がするから死神だと勝手に思つていたが、外来人だつたのか。

「でも、なんか冷たかったよ?」

「連れて行く相手が相手だし、仕方ないんじゃない?」

「お父さんは、悪い人じやないよ」

「あなたの中ではね」

思わず、違うと叫びそうになつたけど、やめた。すぐにわかつてもらう必要はない。ゆっくり、私とお父さんとの愛情を理解してもらえばいいんだ。

「うう……。わかつた。じゃ、いただきます……」

挨拶はしたのだけど、ついもう一度そう言つて、スープを口に入れる。

……。

「どう?　おいしい?」

「うん。とってもおいしい」

何も味を感じなかつた。砂でも食ひでる氣分になる。味もしないのに舌の上を転がる液体みたいな物質が気持ち悪くて、吐き出しそうになる。それでも、半ば無理に飲み込んだ。

こんなとき、普段表情が変わらないというのは便利だ。何か驚きがあつても隠せるし、美味しいと言つてゐるのに嬉しそうでなくとも疑われない。

「ねえ、お姉ちゃん。吸血鬼の主食つてやつぱり」

一度は騙せたのに、私は疑われるようなことを口走つていた。もう一度と、家族を騙したくない。そんな思いからだつた。

「……血よ。あなたまさか、血が欲しいとか?　さすがに、血は用意してやれないわ。……でも、その代わり、『狩り』を咎めるつも

りも……ないわ」

「大丈夫、そんなに欲しくないから」

ふるふると、首を振った。血が欲しいのは事実。でもそれはまだ本が欲しい、自転車が欲しいのとほとんど変わらない。

でもこの気持ちは、もっと強くなるのだろう。その時私は、どうするのだろう。

「『馳走様』

「ほとんど食べてないじゃない。出された物は全部食べる。この家では、それがルールよ」

「……はい」

家のルールを教えてもらつて、それに従う。それは私がゲスト扱いから家族になつた証左のようで嬉しいのだけど、食べるものが何の味もしないものだつたら、流石に辟易する。

栄養を摂取するために食べるわけではない。味を楽しむために食べるのではない。

ならば、一体この食事になんの意味があるのだろう。

「お姉ちゃん、食べる意味、ってなんだと思う?」

「私は、習慣かな。本当は食べなくてもいいんだけど」

知らなかつた。つまり、お姉ちゃんも人間じゃないのかな。聞いても大丈夫かな、変に思われないかな。

「お姉ちゃん、ちょっとだけ、聞いて欲しいのだけど」

アリスが人間でないなら、きっと、私の悩みもわかつてくれるだろう。そう思つたから、私は打ち明けることにした。

「何? 嫌いだから残すつていうのならダメよ」

「違うの。味を、何も感じないの」

「嘘、ついたのね」

私はすぐに謝つた。

「ごめんなさい」

はあ、とアリスはため息をついた。

「……味付け、薄かつたかしら」

「そういう意味じゃないの。朝は美味しかったのに、なのに」

アリスはまだ、私の悩みを理解してくれなかつた。もつと、言葉

を尽くさないと。

「私、もしかしたら、血以外の味を感じないかもしれない。もしそうだったら、どうしたらしい？」

アリスは傷ついたような表情をしたあと、ゆっくりと口を開いた。

「……レミリアに、聞いてみたら？ もしかしたら、何かわかるかも」

「アリスは、わからないの？」

「ごめんなさいね、とアリスは言つた。

「私、魔法使いで人間とは違う存在だけど、それでも、吸血鬼の体の仕組みとかは知らないわ」

つまり、私はもうアリスの理解の埒外だと。そういうことなのだろうか。

「お姉ちゃん、我不安。私が悪いのはわかってる。でも、不安なの」「……何とも言えないわ。そもそも、あなたがレミリアのところに行かなければ、こんな目に遭わずに済んだのよ」

アリスの言葉に、私は何も言えなかつた。感じるのは失望や、怒り。

「……私、お姉ちゃんを怒らせた」

「そうね」

「……出て行つた方が、いい？」

バン、とアリスが机を思い切り叩いた。私は驚いて肩を跳ねさせた。

「……あなたは、あの父親に歪められたのよ」

でも、次にアリスが言つたのはそんな憐れみに満ちた言葉だつた。

「違う」

「違わない。私はあなたが死のうとしたことも、吸血鬼になつたことも、こんなことで出て行こうとしたことも全部、あいつのせい。だから……絶対にあの父親から解放する」

それは強い口調だつた。何がなんでも達成するといつ意氣込みを感じるほどの、強力な意志。

「私はお父さんに縛られてなんかいない」

「父親にかけられた僅かな言葉に歡喜して、その言葉を軸に今まで積み上げてきたもの全部捨てよつとしてるのよ？ 縛られていなければなんなの？」

「愛」

アリスは首を振った。

「もうあなたの父親はいないの。死んだの！ 父親の影を見て父親を追うのはやめなさい！」

「違う！ 私はお父さんの影なんてみていい！ お父さんは私を死んだんだ！ だから私は！」

アリスの表情はどんどん険しくなつていく。

「どんな事情があつたか知りもしないで、盲目的に父親の言つ」とを信じて！ あなたはあいつの

「あいつなんて言わないで！」

「あいつよ！ 父親としての責務を果たせない人間を、父親だなんて呼べるか！」

私はアリスのように机を叩いた。机が真二つに割れ、アリスの作つてくれたスープが一つとも地面にぶちまけられた。

「お父さんは、お父さんだ！ 何があつても、何をしていても！」

私も、アリスも、そんなことに構わず口論を激化させていく。

「違う！ あいつはあなたを切り捨てた！ あなたに死ねと、後を追えと強制した！ あなたは、愛をくれなかつた上にそんなことを言つ人間を、父と呼ぶの！？」

「当たり前！ 私は四年、お父さんを想い続けたんだ！ 愛してくれるつて信じて！ お父さんのために、お父さんと仲良くなるためだけに捧げた四年を、無駄にしたくない！ 無駄にするわけにはいかない！」

私はお父さんに愛してもううんだ。絶対に。

「あなたは、あいつから返事を聞いたでしょ！？　あいつは、全部知つて、それでもあなたを拒絶したのよ！？」

「地獄に行けば、お父さんは私に触ってくれる！　抱き締めではもうえないのでしれない。でも、私のことを見てくれるんだ！　それは、私にとつては愛なんだ！」

アリスは、言葉を詰まらせた。

「物心ついてから、私にはお父さんにちゃんと見てもらつたことがないの！　だから、見てくれるだけでも、十分にありがたいの、嬉しいの！　だから、私は！」

アリスは、首を振つた。

「あなたのそれは、愛なんかじゃない！　普通の愛をあなた、知らないわけじゃないでしょ！？　さつき言つてたじゃない！　さつき言つてくれたじゃない、愛してるって！　あなたみたいに聰明な子が、虐待と愛情を取り違えるなんて……！」

「……！」

私の頬に涙が流れた。今まで、誰にも話さなかつたし、どんな大人にも勘付かれなかつたのに。閻魔大王でさえ、私のことを勘違いしたのに。

「気付いて、くれた。私は、涙を流して、アリスを見る。

「……お姉ちゃん、私ね」

私は、ゆつくりと話す。私の様子が変わつたことに、アリスは気付いてくれた。

「実はね、本当はね、知つてたんだ」

実は、全部知つていた。

ずっと憧れてた。ずっと、羨ましかつた。普段は、心の中にさえ浮かべないようにしているけど。それでも、私の本心は、私の本当の心は。

「愛つてね、心地いいものだつてね、知つてたんだ」
痛くない、苦しくない、冷たくない、辛くない、嫌じやない。それが、愛情。そんなのは、知つていた。本に、私の知つている愛は

なくて。だからこつしか、私がおかしいといつて気に気が付いた。気付いていたのだ。

「じゃあ、なんで？　なんで、そんなに頑なにお父さんに従うの？」

「愛を知らない振りまでして」

「だつてね、お姉ちゃん。私ね、諦めたくなかったんだ。お父さんから愛情が欲しかったのは、ホント。それだけは、嘘じやない。でもね、『普通の』愛情が欲しかったんだ」

「でも、ダメだった。」

『自分のせいで娘が歪んだ』と思えば反省して愛してくれる。それが、私が賭けた、最後の望みだつた。ほんと、私はダメな子だ。親をだますようなことを考えて。

「そのために、必死で頑張つたんだよ。この動かない表情と他の子より言葉を思いつくこの頭を精一杯使って、お父さんに普通に愛してくれるよう頑張つたんだ」

けれど私の頑張りは、無駄だつた。初めから、成功することができない可能性に私は四年を費やした。

「……それだけ？　それだけで、本当に死のうとしたの？」私はダメなの？　私は、普通の愛情をあなたにあげれるよ。それでも、私じゃダメ？」

私は首を振つた。違う。アリスが悪いんじゃない。

「お父さんから愛してもらわなきゃ、世間一般の『普通の愛情』じゃないんだよ。お父さんがいて、お母さんがいて。どっちか片方だけだつたにしても、最大限の愛をもられて。それが、普通なんだ。父親にも母親にも愛されたことがないなんて、普通じゃない、異常だよ。それに！」

私はアリスの方を見た。アリスは悲しそうに顔を歪めて、今にも泣き出しそうだつた。

「それに、お父さんからの愛が欲しいって、そんなに変な願いかな……？」

高望み、だつたのだろうな。だから、全部失敗したんだ。ああ、

「そうか。

「そうか、そもそも私に普通の愛なんて」

「澪！」

ぎゅっと、抱き締められた。ふわりと柔らかいアリスの服と、服越しに伝わるアリスの体温。

「あなたに普通の愛はもう手に入らないかもしない。でも、私が代わりに、いや、普通以上の愛情をあげる。だから、だから！」
会って、まだ一日なのに。それなのに、どうしてアリスは私の事をこんなにも、こんなにも……。

愛してくれるのだろう。

「……お姉ちゃん」

「もう、愛が手に入らないなんて悲しいこと言わないで。もう、お父さんからの全てが愛だなんて苦しいこと言わないで。ここが、あなたの家だから。ここが、あなたの安心できる場所で、私が、あなたに愛をあげる。だから」

だから、なんだろう。

「だから、あなたも私を愛して。もうこくなつたお父さんと同じくらい、私のことを愛して」

「ああ、本当に、私は何をしているのだろう。こんなにも。

「……ありがとう、お姉ちゃん……！」

それから先は、言葉に出なかつた。数年かぶりに私は幼子のように泣いて、泣いて、泣き通した。アリスを力強く抱き締めて。今までの寂しさを打ち消すかのように。大声で泣いて、再び産まれるかのように。

「……澪、愛してる」

私は、バカだ。

大事なものは、すぐそばにあつたのに。

ふとした異常と私

気が付いたら、私は目が覚めていた。

体を起こし、部屋を見回す。私の隣にはすやすやと気持ち良さそうに眠るアリスがいた。もう少し周りを観察すると、窓が朝の日差しを取り込んでいた。どうも私は泣き疲れて眠ってしまったようだ。アリスに視線を移す。白一色のパジャマに身を包んで眠っている。の方を向いて、横に眠っている。

私がそばにいると言うのに、警戒心をかけらも抱いていないうな、油断しきつた顔だった。

この人が、私の大切な家族だ。
自分に強く言い聞かせる。

「……お姉ちゃん」

耳元で話しかけても、反応はない。もっと、耳元に。すんすんと、匂いを嗅ぐ。甘い匂いがする。香水だろうか？ 昨日アリスは香水をしている雰囲気はなかつたが……。

「お姉ちゃん」

少しだけ、肩を揺する。反応はない。露わになつた首元が、私を惹きつける。

白い、すべすべとした感じの首。

つつつ、と指でなぞつてみる。

「ひやつ」

バツ、と飛び退くように離れた。声は上げた。けど、起きては……

いないみたい。

「お姉ちゃん、朝だよ」

美しいアリス。キレイな首。

血もきつと、おいしい。

頭に浮かんだ思つてはいけないことを、振り払う。私は吸血鬼である以前にアリスの家族なのだ。食糧なんかじゃない、ぜつたいに。

「……う、ううん」

アリスが、目をひくりと動かした。体が自発的に動いた。起きるのか。

「……お姉ちゃん」

「……ん、おはよう澪」

アリスは体を半ば起こし、私の方を見た。しなやかなその格好は、ともすれば淫靡なものに見えた。

「ん、おはようお姉ちゃん」

私はベッドから降りた。アリスから離れたかった。血が欲しかった。

「朝ご飯、どうしましょうか」

「私はいるないよ、お姉ちゃん」

アリスはしばらく黙っていた。私は寝室でアリスの方を見ずに話を続ける。

「いるないって、あなた栄養……。あ、ごめん」

「いいよ。自業自得だし」

私は静かに言った。アリスのことを見てはいけない。アリスはご飯じゃない。アリスは家族。アリスは大切な人。アリスは私の愛する家族。だから、だから、だからダメ。

「……澪、眠くない？」

「あまり」

そういうえば、眠くない。なぜだろうか。吸血鬼は夜に起きるものだとばかり思つていたが。

「……そう。その、血が吸いたかつたら私のことは気にせず、吸いに出かけても、いいわよ」

そんな言葉が出てくるあたり、アリスも人間ではないのだな、と実感する。

「血なんて吸いたくない。私はお姉ちゃんの妹で、バケモノじゃないんだから」

私は振り返つてアリスの方を見た。

体の奥底から湧き上がるような熱い気持ちを感じた。情欲にも近いこの感情を、家族に對して向けている自分が許せなくて、気持ち悪かった。

「お姉ちゃん、やっぱり私ダメだ。私は永遠亭行つてくれる」
きつと、治してくれる。それができなくても、せめてこの熱い思いを消してくれる。

「……わかつたわ。すぐ準備するから、ちよつとだけ待つてね？」

私は首を振つた。

「一人がいい。一人で行く」

アリスの返事も聞かず、私は家を飛び出していく。

「待ちなさい！ その森は！」

だから、その警告は聞こえなかつた。

森の中を駆け抜ける。昨日は全く、何もわからなかつたというのに、方向を見失わずに済んでいる。

もうアリスが走つても追いついてこれないような場所まで来ると、私は走るのをやめ、歩く。

「こどもが、こんなところになんのようだ？」

それからすぐに、森の茂みの右から、大きな鬼が出てきた。赤くて、角が一本生えている。

「ここがどこだか知らないようだな？」

左の方から、青い鬼が出てきた。一つ目の鬼で、角はなかつた。

「……許してください」

まことにからまれた。化物が、こんなところにいるとは。アリスと歩いている時には何もなかつたのに。……そうか、アリスがいたから、こいつらも出てこれなかつたのか。

「だ、め、だ！ 食べてやるうつ！」

赤鬼が思い切り、腕を振るつてきた。とつさに、腕を交差させて防衛行動をとる。来るべき衝撃に備えて、目を閉じる。

腕に、衝撃。でも、それだけ。想像したような、両腕とも吹き飛んで十メートル吹き飛ばされる、とかいうことは全くなくて、ただ

衝撃が来ただけだつた。

「……え？」

「な、なんで、なんでなんともないんだよ！？」

私と、鬼。一人一緒に驚いた。

その次に私は鬼の腕を弾くようにして自分の腕を広げてみた。すると、面白いくらい簡単に、鬼の腕は弾かれる。

「……」

その一連の事象で、私は確信した。

私は強くなつてゐる。人とは比べ物にならないくらい、強く。

「……」

私が鬼たちを見ると、彼らは怯えたように一步下がつた。

「ゆ、許してくれ」

「だめ。いただきます」

人間でないのなら、アリスでないなら。

私に攻撃してきた者全てが、食糧だ。

私は力の限り暴れた。存外、気分がよかつた。

……うん、美味。

「……」

私は青鬼の右腕を千切つて、食べられる大きさにする。一口サイズにすると、口に運んで咀嚼する。血の甘い匂いとなんともいえない至上の味が広がつて、最高においしい。内臓を見る気にはなれないから、まだお腹は裂いてない。いつか残さず食べれるようになればいいけど。

「……ああ」

久しぶりに食事をとつたような気分になつて、思わず声が漏れた。

「へえ、素晴らしいじゃないか」

そんな声が、どこからともなく聞こえた。私は振り返る。誰もない。周りを見回す。誰もいない。

「誰？」

私はそんなことを聞いていた。名乗りを上げて、襲つてきたら食べてやうつ、そんな軽い気持ちだつた。

「澪！ 澪！」

返事を待つていると、後ろから声が聞こえた。アリスの声だ。こつちに向かつてくる。食べるのをやめた私は、鬼一人の胴体しか残つていなかつた死体を森の奥の方へと放つた。茂みに消えて、見えなくなる。

「澪、だいじょ……」

「お姉ちゃん」

アリスはさすがに、固まつていた。血の海になつた地面の中心で、血塗れになつた私がいたのだ。驚くのも、無理はない。

「どうしたの、これ」

「鬼一人に襲われて、許してと言ひてもやめてくれなかつた。攻撃してきたから反撃したら、死んでしまつた」

全く嘘はついていない。だけど、なぜが罪悪感が身を包んだ。

「そ、それで、その、えつと」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。血が吸いたくなつて、お腹も空いてたから……食べてしまつた」

アリスはさらに驚いて、それから一度首を振ると、ゆっくりと私に近づいてきた。

「永遠亭にはまだ行くつもり？」

「うん、もちろん」

私は私のことを知る権利があるし義務がある。そう思つ。

「わかつたわ。ついていつてもいい？」

さつきとは違ひ、私は頷いた。アリスに感じていた渴きを、私は感じなくなつっていた。よかつた。心の底から安堵する。

ただお腹が空いていただけだったんだ。だから、思考回路が変になつていた。そういうことだ、きっとそつ。

「うん、一緒にいこ、お姉ちゃん。おでて、つないでいい？」

「ええ」

しつかりと手を繋いだとして、自分の両手が血に濡れていぬ」と
に気が付いた。

「あ、ごめんお姉ちゃん。手が汚れてるから繋げない」

「うう私が言つと、少しだけ残念そうな顔をして、しかたないわね、
と言つた。

「じゃ、行きましょうか」

「うん」

さつき聞こえてきた不思議な声はなんだつたのだろう。そんな疑
問を私は持つたけれど、アリスには言わなかつた。

私とアリスは永遠亭に向けて足を運んだ。まだ、アリスからの愛
情は感じじる。

鬼を食べても、私を家族だとみてくれる彼女の愛は、普通の愛で
は、ないかもしない。私はそう感じ始めていた。

けど、心地いい。だから、まあいいか。そう思つた。

それから何事もなく歩いて永遠亭に着く頃には、昼前になつてい
た。

訪れた永遠と私

「あなた、結構運悪いのね」

診察室で、私はエイリンにそう言われた。アリスは今待合室で私のことを待つている。

私はここに来て一番最初に事情を包み隠さず言つて、調べて欲しいと頼んだ。エイリンは了承してくれて、それからいろんな検査を受けた。そして、今その結果を聞いているわけだ。かなり時間が経つた。もう日が傾いている。

アリスがいなのは、家族にいらぬ不安を与えぬようにするために、らしいが……。何か、問題でもあつたのだろうか。

「そうですか」

「ええ、最悪」

運、の問題なのだろう。幻想郷にくる前も、何度も攫われ、何度も死にかけた。運が悪いから、このようなところにいるのだろうか。「三日間で、全く別の症状で、三回もウチの診察を受けたのってあなたくらいよ。しかも」

エイリンは私の体を上から下までじっくりと眺めた。

「しかも、種族まで変わるなんてね」

「……」

私は今黙つて話を聞いてるわけだ。

自業自得、吸血鬼になつたのは自分が悪い。だが、好きで吸血鬼になつたわけではない、と叫びたい自分もいる。自分が一人になつたような感覚に、目眩を覚える。

「で、いろんなことをやつてもらつたわけだけど」

光を当てられたり握力計を握つたり、意味のわからない質問に答えさせられたり。本当に、疲れた。これでわかりません、だつたら暴れてやろうか。

……何を私は。自然に暴力を振るうことが頭に入つていて、自分

で自分に恐怖する。それはともすれば、笑える光景なのだろうか。

「結果を言うと、あなたは規格外、よ」

「測るまでもなく弱い、ということ?」

エイリンは首を振った。

「測れないほど強いことよ」

私は、思わず固まつた。私が、強い? なぜ? 普通、噛まれた

吸血鬼は弱いというのが相場なのに。

「あなたは普通の人とは違う体なの」

「……吸血鬼、ですから」

エイリンはまた首を振つた。いや、まあ、エイリンが能力のこと

を言つてているのはわかるのだが、それでも一応、知らないふりをし

ないと。

「違うのよ。あなたには攻撃や支援を増幅する力があるの

「そうなんですか」

普段通りに答える。エイリンは私に続きを話す。

「だからあなたは、レミリアから注がれた『吸血鬼としての力』を增幅できるだけ增幅させて、その結果、真祖もかくや、というほど

の力を持つに至つたわ」

「しん、そ?」

知らない単語だった。どんな意味を持つのだろうか。

「そう。吸血鬼の中の吸血鬼。人々の恐怖をそのまま形にしたかの

ような力を持つ、まさしくバケモノ。それが、真祖」

私は、頭が殴られたような衝撃を感じた。バケモノ。私が、人から恐れられる、怪物。創造はしていたが、そんなものに、私はなつてしまつたのか。

「……レミリアも、真祖?」

「本人は真祖の直系を主張してるけどね」

つまりは、違うということだ。私はレミリアよりも強くなつたの

だろうか。

「それからあなたは、吸血鬼の弱点の殆どをもつてないから

「え？」

「真祖は本当にバケモノだからね。太陽の光なんてちょっと熱いくらいにしか思わないし、水の中だってちょっと嫌、くらいにしか感じないわ」

日光も大丈夫で、水の中も平氣？ なんだ、それは。弱点のない吸血鬼なんて、バケモノそのもの……なのか。

「治らない？」

エイリンは黙つて首を横に振つた。

「あなたの場合、吸血鬼としての力や吸血鬼の血を排除しても、僅かに残つたそれらを極限まで増幅させるから、かなり強力なものをつかわないダメなの。そして、その強力な手術や薬は、幼いあなたには耐えられないわ。吸血鬼じゃなくなつた瞬間死ぬ、なんて嫌でしょ？」

「……そんな」

「『めんなさい』

……これが、医者が匙を投げる、というものか。初めて経験したが、こんな経験一度としてしたくなかった。こんな絶望を味わうのか。

「……でも、吸血衝動を抑える薬くらいは処方できるわ」

「どんな薬？」

「血を吸いたい、つて気持ちを少なくしてくれる薬、よ。でも、毎日三回、飲み忘れたら我を忘れるくらい飢えや渴きを感じるのだけど……」

「じゃあ、いらない」

もし飲み忘れて、アリスに襲いかかってしまつたら？ そうなつたら、私は家族をまた失うことになる。そんなことになるくらいなら、いくら苦しくても頑張つて耐えた方がいい。

それに、吸血衝動を抑えたところで、私がバケモノであることは変わらないのだ。

「ありがとうございました」

私はエイリンに礼を言つと、診察室を出た。

診察室外ではレイセンが立っていた。ずっと待っていたのだろうか？ノーマは、どこだろう。殺された……ということはないだろう。ここの人々がそんな酷いことをするとは思えない。

「アリスはこっちの部屋にいるよ。いい、澪ちゃん」

そう言って、案内してくれる。少し長めの廊下をしばらく歩いていると、かぐや姫とすれ違つた。

「あら、この前の」

「こんにちは、姫様」

私は挨拶をした。綺麗な、本当に美しい人。もつとずっと、見ていたい。

「永遠が欲しくてきたの？」

「え？いや、そんなことは」

「ふふふ、あなた見たところ日本人でしょ。ダメよ、遠慮しちゃ」

そう言ってかぐや姫は袂をまさぐつて、何かの薬瓶を取り出して私にくれた。

「永遠が欲しくなつたら、この薬を飲みなさい。それだけで、永遠が手に入るわ」

私は手の中にある薬瓶を見つめる。これが、永遠。これを飲むだけで、私は死なずに、母と同じにならずに済む。でも、お父さんとも会えなくなる。

……どうしようか。

「……姫様、ありがとうございます」

とりあえず、もつていることにした。

「そんなかしこまらなくてもいいのよ？私はただの居候、帝に求婚された姫、なんて過去のことよ」

そう言って姫様は優しく微笑んでくれた。

「……そう、ですか」

憧れ、というものは人によつては苦痛を与える。だから、口にはしなかつた。

「それじゃあね。永遠を手に入れたら、とりあえず私のところに来なさいな。永遠の生き方というものを教えてあげるから」

「そう言つと姫様は私達とは違つ方向へと行つてしまつた。

「……綺麗な人だね、本当に」

「顔だけはね」

「どういう意味だろう。憧れはその人の人となりを知らないから抱けるもの、というのをどこかの本で読んだ。憧れを失望に変えたくない私は、レイセンに深く聞かなかつた。

レイセンは一つの部屋の前で止まると、扉を開けた。

「終わりましたよ、アリス」

中では、退屈そうに足をふらふらさせていたアリスと、全身を包帯に包まれた人間がいた。

「終わったの？ そう。じゃ、行きましょうか、澪」

「……お姉ちゃん、その人は？」

アリスは怪我人に対してお父さんが私に向けたような冷たい目を向けた。

「東野よ」

「……」

私は部屋の中に急いで入つて、アリスと包帯だらけの男との間に入つて、両手を広げた。

「お姉ちゃんに手を出さないで」

でも、心の奥にいる私は、手を出して欲しいと言つていた。そうすれば、誰にも咎められることなく血が吸えるから。

違う。私はアリスを、守りたいんだ。だから、こいつしているんだ。

「……澪」

アリスが、私を呼ぶ。

「手を出させはしない、東野」

まだ、恐怖は消えない。ここにきた最初の日におもむちやにされかけたことが、まだ頭にこびりついている。気持ち悪くて、吐き気がする。こんな、こんな満身創痍の人間にでさえ怖いだなんて。

「……」

私は、ふと思う。でも、最初の日と、今は違う。この恐怖を消す方法を、私は知っている。しかも、その方法は簡単だ。

「……東野。あの時の復讐、してもいい？」

私は静かに言つ。両手を下ろして、手を、物を掴む時の形にする。

「澪」

アリスの声が聞こえる。……。

思いとどまることができた。東野をバラバラにして、その肉を食らう衝動は消えてくれた。でも。ただで赦しはしない。

「あのとき、私は気持ち悪かった。何度も噛もうかと思ったくらいに。私の言葉を力ケラも信じず、独りよがりな行動を続けた。あの時私の心に刻まれた恐怖を、あなたにも刻み返してあげようか」東野は首を振つて否定する。声は出ないようだ。よほど、丹念に燃やされたのだろう。

でも、許さない。こいつが私にしたよつて、私もこいつに恐怖を刻む。

「たとえ神や閻魔が許しても……私はあなたを許さない。この、強姦魔」

吐き捨てるごとに、アリスの手を引いて部屋の外に出る。

「それじゃ、レイセン。私は帰る。ハイリンに、ようじへ言つておいて」

「え、ちょっと」

一方的に別れを告げると、私はアリスを連れて外に出た。アリスを連れて、私は歩く。

「……ずいぶん、気が大きくなつたじゃない」

竹林に入ったところで、アリスが私に言つた。

「……ごめんなさい」

「責めてるわけじゃ、ないんだけどね。まあ、いいわ。とりあえず、家に帰りましょうか」

私は頷いた。アリスと手を繋いで、私は帰路についた。

「……ねえ、お姉ちゃん

「ん？」

私は手に持っている薬を、アリスに見せる。透明な、水のような液体だった。でも粘度がとても高く、まるで水あめのようだった。

「なんのお薬？」

「かぐや姫がくれた、永遠が手に入る薬、だつて」

アリスは難しい顔をした。そんなアリスに、私は言ひ。

「……でも、きっと私からかわれてるんだよ。死なずにいれるだなんて、ありえないもの」

「吸血鬼だって、あなたの世界ではありえないもののはずよ？」

私は黙つた。手の中にある薬を見つめる。これを飲めば、死なずにいれる。のだろう。

「……何を迷うの？」

「これを飲めば、お父さんに会えなくなる」

アリスはため息をついた。

「ま、気持ちはわかるけどね。飲んでほしいかな」

私はアリスの方を見た。アリスの表情からは、何を考えているのか読めない。

「どうして、そう思うの？」

「あなたが死ななくなれば、あなたの死に様を見ずに済むわ」「やつぱり、見たくないよね」

人の死に様なんて、見れたものじゃない。昨日のことのように思い返せるほど、母の死に顔は凄惨だった。

「……どうしよう」

「ま、しつかり悩みなさい」

飲む、飲まない。いくら悩んでも、答えは見えなかつた。

死にたい理由はお父さんに会いたいから。死にたくない理由は母のようになりたくないから。どちらにせよ、両親が絡んでいることに、苦笑すら浮かびそうだつた。私の表情は、相変わらず変わらなければいけど。

「……アリスは、どうしてほしい？」

「さつき言つたじゃない」

「私が死なないと、嬉しい？」

アリスは頷いた。新しい、この世で最も大切な人が、頷いてくれた。でも、でも、お父さんと会えなくなるのは、困る。どうする。

そこで、思いつく。

「ねえ、アリス」

「ん？ 決めたの？」

「幻想郷で、できることってなに？」

「ん？ ……そうね、すぐには思いつかないわ」

「生き返らせてることって、できるかな」

アリスは、首を振らなかつた。頷きも、しなかつたけど。その反応で、私は確信する。簡単ではないだろう。けど、人を生き返せることはできる。

「……質問の意図を、聞いてもいいかしら」

「決まつてゐる。お父さんを、生き返せむ」

アリスは苦い顔をした。

「いくら時間がかかるても、いつか！」

私は決心すると、薬瓶のふたを開けて、薬を飲む。

言葉にしたくないほど残虐な匂いがした。もし味を感じる体だったら、どんな味がするのだろう。

とにかく、私は飲み切つた。味を知らないよかつた、と心の底から思つた。

「……澪。あなたは、まだ」

「大丈夫だよ。お父さんの蘇生は気長にやるから。それよりも、これでずっと家族だね、お姉ちゃん」

私はぎゅつと、アリスの腕を抱きしめた。

「……なんだかこそばゆいわね」

「嫌だつた？」

「不快だつたら振り捨つてるわ」

不快じゃない、と言われて嬉しくなる。ふと、思い出す。

「あ、そうだ。かぐや姫のところに行つてもいい?」

「どうして?」

かぐや姫に言われたことを思い出したのだ。

「永遠の生き方を教えてくれるんだって」

「ふうん」

アリスは立ち止まって、私の顔を見た。

「今から?」

「……だめ?」

アリスは首を振ると永遠亭の方へと足を向けた。私も、アリスについて歩く。

「もう、あなたは永遠なのね。少し、感慨深いわ」

アリスは僅かに微笑んだ。

「アリスは、永遠なの?」

「魔法使いだしね。それに近くはあるわ」

「ということは、アリスに先立たれることはないのだろう。きっと。」

「……澪」

「何?」

「私の亡骸は、花畠に埋めて」

私は、俯いて地面を見る。

「そんな話、しないで」

「……ごめんなさいね」

謝つてはくれたけど、さつきの遺言じみた言葉は本心なのだろう。

「……アリス、死ないでね」

「努力するわ。全力でね」

そう言つてくれる事が、うれしかった。

それから私たちは、永遠亭につくまで無言で歩いた。

「あれ、アリスに澪ちゃん。どうしたの？」

永遠亭につくと、ノーマを連れたレイセンが出迎えてくれた。ノーマは出合った時と変わらず黙っていたが、その顔は少し明るかつた。

「姫様は？」

「え？ ……まさか、本当にあれ飲んだの？」

なんだろう、その言い方は。そうか、私は騙されたのだろう。かぐや姫の少しの戯れ。それに付き合わされただけ。悲しくなつたが、よくよく思い返してみれば、そう簡単に永遠が手に入るわけがない。子供を騙すなんて趣味が悪いとは思うけど、楽しいのは事実だろう。

「うん」

「何考えてるの？ アリス、なんで止めなかつたの？」

「いや、だつて」

レイセンの勢いに、アリスはたじろぐ。

「だつて、だつてなに？ アリス、こんな子供に永遠を背負わせるの！？」

永遠を、背負わせる？ 何を言つてこいるのだらう。永遠は素晴らしいものではないのか？

「そんなこと言われても」

「あなた仮にも澪の姉名乗つてるんでしょ！？ なら、止めなさいよ！」

レイセンが叫んでいると、彼女の後ろから姫様がやつてきた。

「何事？ 騒がしいわね」

「姫様。あの薬、飲みました」

そういうと、かぐや姫は手で口を覆つて、上品に笑つた。ああ、私はからかわれたのか。まあ、この人に遊ばれるのなら別にいいか。

「それはそれは。では、じつにいらっしゃいな

私は靴を脱いで、永遠亭に上がる。レイセンに止められそうにな
るけど、かわしてかぐや姫のそばまでいく。

「ふふふ、あなたの目、まだ疑ってるわね」

「すみません」

かぐや姫は首を振った。綺麗な黒髪が舞う。

「いいえ。疑うな、というほうが無理よ。だから、信じさせてあげ
ないとね」

すつと、私は細長い指に絡め取られるように抱き寄せられた。か
ぐや姫の柔らかい匂いがする。ものすごく、安心する。私はかぐや
姫の顔を見上げる。にっこりと微笑んだかぐや姫は本当に、うつと
りするほど魅力的だつた。

「本当にあの薬を飲んだのね？ 嘘だけはつかないで」

私は頷く。ほっと、かぐや姫は胸を撫で下ろした。その手は一度
と袂にいき、何かを握り込んだような形で私の胸まで運ばれた。

「騙されたかどうか、不安でしょ？ その不安、消してあげる
ぞづくり、と、私の胸で音が鳴つた。

「……！」

私は腕を振るつて、かぐや姫の右手を弾いた。すると、かぐや姫
の腕が切り落とされ、永遠亭の床に大量の血を撒き散らした。私
の胸からも、見るからに致死量だとわかる量の血が流れている。胸に
は、大きなナイフが突き刺さっていた。

「姫様！」

「澪！」

アリスは私に、レイセンはかぐや姫に向かつて駆け出した。

「大丈夫、澪！」

「……」

声を出せない。苦しい。殺される……？

「ふ、ふふふ。どこからそんな力が？」

「私は……吸血鬼……」

「あら。それはそれは。不滅の吸血鬼なんて、素敵ね」

かぐや姫がレイセンを右手で押しのけ、私の方へときた。私もアリスの前に出て、両手を広げてアリスをかばう。

「姫様、私で遊ぶなら構いませんが、アリスには何もしないでください」

「怯えなくても大丈夫、アリスには何もしないわ」

につっこりと微笑んだまま、かぐや姫は私のそばまで来て、私の胸のナイフを抜いた。

「ぐつ……」

私は胸を抑えて、うずくまる。

アリスが、私とかぐや姫の間に割って入った。

「どういうつもりかしら、死なずの姫。うちの妹傷物にして」

「ふふふ、見てみなさい、アリス。ざつくり刺さってるわね。どう見ても心臓にも刺さったわね。ちなみにこれは銀製品。さすがの吸血鬼でも、これは効くはずよ。真祖だったとしても、じばらくは穴があきっぱなしになるわ」

私はアリスの足の間からかぐや姫の掲げるナイフを見た。長いナイフの半ばまで血で濡れていた。

「最初なら、このくらいかしら。ほら、どきなさい」

「何を」

ぐい、と半ば無理やりアリスをじけると、私の肩をつかんで上体を起こした。始終笑顔のままのがぐや姫。美しいけど、恐ろしかった。

「どう? これが不老不死よ」

つ、とかぐや姫は私の胸をなぞつた。くすぐつたいけど、痛くはない。かぐや姫の手は両手ともちゃんとあつたし、私の胸も完全な状態だった。

「……私、死んだかと思った」

「これからは死なないわよ。いくら死にたくてもね」

そう笑うと、かぐや姫は私にナイフを握らせた。

「こきなり刺してごめんなさいね。でも、これが一番なの。さ、ど

うぞ」「うぞ

そういうと、かぐや姫は両手を広げた。じついう意味だろ。

「どうしたの？お返しよ。刺してもいいわよ」

「え、いや、そんな」

私はナイフを捨てた。あら、と言つた表情をかぐや姫はした。

「……あのね。輝夜。この子が刺せるわけないじゃない。というか刺させるものですか」

私のすぐそばまで来ると、アリスはナイフを拾つてレイセンに渡した。

「子供にこんなのかせるんじゃないわよ。教育に悪いわ」

「ふふふ、それは『ごめんなさい』ね」

そう言つと、かぐや姫は私に向かつて丁寧に頭を下げた。

「『ごめんなさい』」

「え、う、うん。気にしないでください」

私がそういうと、かぐや姫は私を抱きしめた。荒々しいけど、暖かみのある抱き締め方だった。

「嬉しい！ホント、あなたを選んで正解だったわ！永遠によろ

しくね、澪。これからあなたと私は、永遠の親友よ！」

強引な人だ、と思った。なんていうか、イメージと違う。

「え、ええ。よろしくお願ひします」

「だめ！敬語なんてダメよ、澪。友達に敬語なんて使う？」

私は首を振った。

「でしょ！？だ、か、ら！あなたも私にタメ口！わかった？」

「は、はい」

「……うん」

私がそう言つと、かぐや姫、カグヤはぱあっと明るく笑つた。

「うんうん、それでいいわ！」

強引。イメージと違う。でも、私はこの人となれば友達になれるそつだと思った。さつきまでは殿上人だった人が、自分のいるところま

で降りてきてくれたような、そんな感じがした。

「……殆ど別人じゃない」

後ろで、アリスがため息をついて言った。

「姫様、親しい人には甘えるタイプですから……」

「ふうん。全く、妬けるわね」

アリスは苛立たしそうに言った。

「じゃ、澪。約束どおりレクチャーよ。死なずの体で氣を付けなきゃいけないところはまたたひとつ」「何？」

「簡単。普段と変わらない生活をすることよ」

……それは、なんの秘訣なのだろうか。

「ほら、私ちょっとした実験もかねて一日一度自殺する生活を百年続けたことがあるけど、あの時の私は本気で狂つてたわ。普段通りの生活に戻したら心も戻つていった。生活は心に影響するわ。だから、生活には気を付けてね」

「うん、わかった」

私の返事にカグヤはまた笑った。

「わかつてくれてありがとー！　ねえねえ、もつとお話ししましょうよ！」

「ね、ねえ、カグヤ。私、ちょっと疲れちゃった

私がそう返すと、カグヤは私を見た。

「あら？……それもそうね。刺されたことなんてないだろうし、ましてや死ぬような目に遭つたことなんてないだろうしねえ」「

「死ぬような目に何度も遭つた。でも、その度に疲れてその度に

眠つた」

私の言葉に、カグヤは苦い顔をした。

「あら。「じめんなさいね。傷に触つたかしら」

「今はもう大丈夫」

そう言って、私の方からカグヤを抱きしめた。すぐに抱きしめ返してくれる。

「あらあら、本当に可愛らしい友達ができる、私は幸せものだわ」「私も、こんな綺麗な人が友達で嬉しい」

「ふふふ、ありがと」

そうしてしばらく私達は抱き合つて、どちらともなく離れた。

「私、今日は帰るね。またゆっくり時間がとれるときここに来る」

「嬉しい。待ってるわ」

私はアリスの方を見た。

「いこ、お姉ちゃん」

「……ええ」

私はアリスの手を握つて、玄関まで行く。靴を履いて永遠亭を出ると、カグヤが見送りに来てくれた。

「それじゃ、気をつけてね！ また遊びに来てね！」

私は手を振つて返事をした。

「姫様、廊下の片付け、一緒にお願ひしますね

「え、鈴仙やつてくれないの？」

「なんで姫様が故意に、汚す必要もないのに汚した片付けを一人でやらなきゃいけないのでですか？ 甘やかすなど師匠から仰せつかつているんですよ」

「ええー？ 鈴仙のいじわる！」

「いじわるで結構です。では、行きましょうか」「はーい」

そんな微笑ましい会話を聞きながら、私は永遠亭をあとにした。

「カグヤ、思つたより楽しい人だつたね」

「刺されたのよ？」

私は頸に手を当てた。

「まあ、死んでないし」

「その理論でいくならあなたこれから先何されても許すことになるわよ？」

たしかに、普段通りの生活を続けると言つたカグヤの言葉に従つなら、怒るべきなのだろう。

「……でも、やつぱりいいよ。カグヤだけは、特別」

「ホント、あんた不老不死になつたのね。実感するわ」

……少し、棘があるようを感じた。でも、それも無理はない、か。

心配してくれたのを袖にしたようなものだから。

「大丈夫、アリス。私、もしあれがカグヤ以外の人間だつたら、許さなかつたから」

「私でも？」

私は首を振つた。

「アリスに殺されるなら、まあいいか、つて思う」

アリスは不思議そうな顔をした。

「なんでいいのよ？」

「だつてさ、私にとつてアリスは、大切な、大切な家族なの。そんな家族に殺意を抱かせるくらい怒らせるような私なんて死ぬべきだと思う。もし何か理由があつて殺されるなら、きっと、相当切羽詰まつているんだと思う。家族のために死ねるなら、本望だよ」

はあ、とアリスはため息をついた。

「あんた、そういう子だつたわね。全く、本当に変だわ」

さつきと違つて、柔らかい言い方だつた。

「吸血鬼で不老不死。これで普通だと言う方が異常だと思う」「違ひないわね」

アリスは笑つてくれた。昨日ケンカしたことが嘘かのよう。

「アリス、昨日は、ごめん」

「ん、何が？」

「テーブル、壊して」

そう言つと、アリスはうーん、と額に汗を流した。

「ま、ちょっとは困るけど、代わりになるのは家の周りに生えてるし、人形も……いえ、違うわね」

一度言い直すと、アリスは私を見て言つた。

「あなたが、代わりのテーブル作つてちょうだい？」

仲直りの印、

よ

そう言つてくれたことが、私の心に残つた。

ああ、私はアリスと家族なんだ。

私は家族がいる幸せを噛み締めた。

ちょっとした転機と私

次の日。私は朝から森に出て準備運動をしていた。小学生をやつていたころに覚えたラジオ体操をして、一本の大きな木の前に立つ。

「お姉ちゃん。これくらいの大きさでいい？」

私が指をさした木は、直徑一メートルくらいの太さで、かなり上まで伸びていた。方々に伸びているかは木材としてつかえるかどうかはわからないけど……。

「ま、いいんじゃない？ 別に、合板でもいいんだからもつと切りやすいのでもいいのよ？」

私の少し後ろでは、小さな人形を四体、周りに浮かせたアリスが立っていた。

運搬用の人形だそうで、あの小さな体で大きなものを持てるそうだ。

「じゃ、始める」

私は宣言すると、木の硬そうな皮を思い切り殴った。木の皮がめくれ、吹き飛ぶ。ぐしゃりという音がして、例えようもない激痛が拳に走った。

「…………っ！？」

私は拳を抑えてうずくまる。

「ちょっと濶大丈夫！？ だから人形で切るって言つたじゃない！」

アリスが駆けつけってくれて、私を覗き込んでくる。私の拳は砕け、指が方々に歪んでいた。

「あ、あのね。いくら吸血鬼で不老不死だと言つても、いきなり無茶苦茶できるようになるわけじゃないのよ？ あなたは変わらず私の妹なんだから、自分の体を大切に……」

「治つた」

すっかり元通りになつた拳を握りこむと、少しだけ抉れた木にめ

がけて腕を振り上げ……。

「……やっぱり怖い。痛いのは嫌。アリス、頼んでいい？　運ぶのは私がやるから」

手を下ろして、木から離れる。

「もう。最初からそう言えばよかつたのに」

「自分の力を試したかった」

「その調子で人に勝負仕掛けないでね？　幻想郷には幻想郷の勝負ルールがあるんだから」

物凄く大きい、木を伐採する用のノコギリを持つた人形をアリスは召喚し、木に配置させた。木の反対側にもう一体の人形を配置させると、そのノコギリのもう一つの取つ手を持たせ、引かせる。ギコ、ギコ、と小気味のいい音と共に、木の粉があたりに舞う。

……あれが人の胴体で、飛ぶ粉が血飛沫だつたら、もつと綺麗だろうな。悲鳴も聞こえて、きっと素敵。

頭に湧いた残酷な想像を、頭を振つて否定する。な、何を私は。アリスはこっちまできて、そばにあつた大きめの岩に座る。視線は、ノコギリを動かす人形に向いている。

「ルール？　どんな？」

「三つから四つの攻撃の手順を決めたカードを作つて、対戦相手に宣言。カード全部使い終わつて倒し切れなかつたら、負けよ」

「へえ」

面白いルールだな、と思つた。

「相手が死ぬまでやるの？」

「まさか。被弾数で勝敗を分けるのよ。だから、多くの人は攻撃の手数を増やすスペルカードを作るわ」

「……スペルカード」

私はその単語を反芻する。

「そうよ。あなたも作る？　作り方なら、教えてあげるから」

私は首を振つた。

「いい。私、戦いを知つたら抑えが効かなくなるかもしけないから」

私の言葉に、アリスは意外そうな顔をした。

「あら。 そうかしら。 最後まで冷静に戦うと思つのだけど」「冷静なまま、極限まで戦いを楽しむと思つ。 それは、戦いに酔つて戦闘に狂うのとほとんど同じ」

「……まあ、 そうかもね」

アリスは納得した様子ではなかつた。 本音でないのが、わかつたのだろうか。

「実を语つと、 我を忘れそうだから嫌」

「ああ、 納得。 ま、 いきなり吸血鬼になつて、 しかも不老不死。 過ぎた力つて持て余しちゃうよね」

まるで経験があるかのような口ぶりだつた。

「経験、 あるの?」

「一度だけ、 ね! ま、 私も弾幕勝負、 好きな方だしね。 戦闘自体は、 好き。 他人の命がかかつてるのは、 嫌だけどね」

意外な言葉だつた。 優しいアリスから、 戦闘が好きだなんて言葉を聞くなんて思わなかつた。

「ふうん、 そうなんだ。 私も、 一度戦えばアリスにみたいに思えるかな」

「さあ、 わかんないわ。 フランみたいにならないとも限らないし」

「……フラン?」

知らない名前だつた。 そもそも名前なのだろうか。 慣用句的な使い方をしているとも限らないし。

「レミリアの妹よ。 閉じ込められてたからか、 それとも生来のもののかはしらないけど、 ぶつ壊れてるけどね」

つまり、 アリスは私が戦闘で壊れないかどうかを心配してゐるわけ、 なのだろうか。

「それにしても、 ここに日本であなた、 変わつたわね

「そうだね」

吸血鬼になつたのが一日前だなんて信じられない。 しかも、 その

次の日に、 私は永遠に生きることになつた。

「で、永遠で、吸血鬼になつた心地はどう?」

「ん……」

私は言つべきか言つまいか迷つ。「」とある「」とに残酷な想像をしてしまうのは、なぜだろうか。

吸血鬼だからなのか、それとも私が元々持つてゐるものなのか。
「……ちょっと、変な感じ」

「そうでしょうね。でも、もつと何かないの?」

私は首を振る。何もない、と思つ。

「ふうん、そう。そろそろ、ずつと思つてたんだけどね」「なあに?」

アリスが言つのに合わせて、私は返事をする。

「あなた、お父さんのことになると別人よね」

「……そうかな」

私はそう言つしかなかつた。自分の中では、他の自分と違つとは思つていなかつたからだ。

「あなたは、お父さんに對してだけは、年齢通りよ。なぜかしら?」
年齢通り、か。私の年齢は、十歳。たしかに私の普段は少し変ではあるかもしねりない。

「そんなのわからない。私は、私

「そうよね。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスがそう言つたとほぼ同時、大木が大きな音を立てて倒れた。

「……運ぶ」

「ありがと。じゃ、あなたは根の方を持つてくれる?」

アリスの人形四体が木を持ち上げ、私もそれを手伝う。人形について、アリスの家まで向かう。

「今日は……どうしようかしら」

アリスが歩きながら悩んでいると、一羽のハトが飛んできた。頭が赤く塗られていて、他のハトとは違いアリスが手をあげると、自然にそこに止まつた。

ハトの足には、何か紙のようなものが結わえ付けられていた。

アリスはそれをほどき、広げた。

「……マリサが結構やつたみたい」

「へえ」

「マヨイガ、じい、地靈殿、天狗の山……他にもいろいろ行つてゐるわね」

定時連絡、か。そういえばアリスとマリサは外来人について他の権力者達に教える為に各地を回つてゐるんだった。

「ねえ、みんなに伝えたの？」

「ん？」

「その、レイムが言つたことを」

アリスは頷いた。

「ま、あなたが氣絶してたり眠つたりしてゐる間にね。……テーブル作つたらいつたん博麗神社に向かいましょうか」

アリスの決定に、私は頷いた。

「……重くない？」

「全然」

持ちながら、自分でも驚いていた。まさかこれほど大きな木を空気のように感じるなんて。

「ほんと、強くなつたわね。もう襲われても対処できるわね」

私は頷く。是非、襲つて欲しい。そうすれば、なんの氣兼ねなく血を吸えるから。

「ねえ、この森つて危険なの？」

昨日一人で歩いていきなり襲われたことを思い出し、聞いて見た、「まあね。生身の人間が単身で入つたら一時間と生きられないって言われるくらいだから」

すごい。この森なら、食糧には困らないかも。

「まあ、妖怪もバカじやないから私みたいにあからさまに能力持つてゐる人間にまで攻撃してこないわ」

ということは。私も、そのあからさまに、という人種にはいるのだろうか。入らなければいいのに。

「ま。いいじゃん、そんなこと。で、ついたわよ」

アリスの家の前には、天狗がいた。黒い翼に赤い小さな六角帽子、そして一本足の高下駄。その天狗は女人の人で、年齢は十六歳くらいだろうか。

「あら、射命丸じやない。ちょっとどぞいてくれる?」

「あいや、お久しぶりです、アリスさん」

挨拶はしたけど、雰囲気はあからさまに適当だった。シャメイマルは私の方を見ると、そばまできた。

「こんにちは、お嬢さん。お名前、教えてくれますか?」

「ミオ・マーガトロイド」

「偽名はいいから、本名教えてくださいな」

「これが本名」

「あやや」

なんだろう、この人は。メモ帳片手に、何をするつもりだろうか。

「じゃあ、幻想郷に来た感想は?」

「なぜ、そのようなことを聞くの」

取材だと、彼女は言つた。取材? 新聞記者だらうか。

「取材はお断りさせていただきます」

新聞は、きらい。テレビのニュースも、きらい。

「まあまあ、そう言わずに。感想は?」

「この人、強引。カグヤと違う強引具合。私は、この人が苦手。怖いところ」

「……なぜそう思ったのか、聞かせてもうつてもいいですか?」
私は唇に人差し指を当てた。

「秘密」

キヨトンと、シャメイマルは目を瞬かせた。にやりと笑うと、メモ帳にペンを走らせた。

「ありがとうございます。では、最後の質問です。あなたの能力は?」

不思議なことを聞いてきた。なぜ、この世界見てもひ弱な少女に

しか見えない私に、そんなことを？

「ない」

「ない」とはないでしょ？」

「なぜ？」

私はアリスの方を見た。不快そうに顔を歪めている。「ご存じないようなので伝えておきますと、ここ最近、幻想郷にきた全ての外来人に特殊な能力を持つていていますね」

「……東野も？」

シャメイマルは、首を傾げた。

「東野？」

「……なんでもない。ノーマも？」

今度は、頷いた。二口二口とした様子でメモ帳をめくつた。

「ノーマ君はですね、『生き続ける程度の能力』を持っていますね。何をされても、何があっても絶対に死がない。不老不死とも言います。まあ、不幸があつて、ノーマ君は口を開ざしてしまったようですが」

メモ帳に書いてあることをそのまま読みあげるような口調だった。不幸なこと。それは、なんだろう。嫌な予感がする。その中身は、知りたくない。

「ちなみに、不幸というのは」

「射命丸。相手を考えなさい」

耳を塞いだ私を慮つてか、アリスがぴしゃりと言つてくれた。

「あや、これは失礼をば。では話を戻しますが、あなたも外来人なのでですから、何か力があるはずだ、と踏んだわけです」

「私は何の力も持つてない子供」

私が言うと、シャメイマルは呵々大笑した。

「何をバカな。あなたの手に持つてるのはなんですか？」

私は木から手を離した。それでも変わらず、木はアリスの人形に持ち上げられている。シャメイマルは驚いたような顔をした。そこでさす私は言つ。

「何の力も、私は持つてない」

「……ふむ。わかりました。いつかまた。それでは、失礼します」

次の瞬間、豪風が吹きすさび、私は思わず目を閉じた。次に目を開けるともう鳥天狗の姿はなかつた。

「急に離してごめん」

「中々いい判断だったわよ」

アリスはそう褒めてくれた。

「あの人は？」

アリスは人形をあやつり、大木を地面に下ろした。ノコギリを持つた人形を配置すると、まとまつた形に切らせ始める。

「射命丸文。新聞記者よ。幻想郷で一番速い天狗よ」

「ここで、一番」

「そんなすごい人だつたんだ。

「まあ、でもあなたも思ったと思うけど、口クな奴じゃないから」

「私はなるほど、と思った。あんな人も、ここにいるんだ。

「でさ、さつきの話聞いてどう思った？」

「能力のこと？」

アリスは頷いた。私はエイリンから能力のことを聞かされている。けれど、アリスはそれを知らない。隠そうとしてくれたことを無にするわけにもいかないだろう。

「ないんじやないかな。そもそも私、吸血鬼に、不老不死。十分特殊」

まあね、とアリスは苦笑した。ゴトリ、と音がした。木が切り終わつてちょうどいち大きさに揃えられた。これからテーブルの形に削っていくのだろうけど、アリスは人形達を操作しなかつた。しばらく悩むと、頷いた。

「……ま、テーブルはあとでいつか。ちょっと聞きたいことがあるから、とりあえず靈夢のところ行くわよ」

アリスは人形達にノコギリを捨てさせ、私の脇の下まで移動させた。また運んでもらうのか。してもらつてばかりは、居心地が悪い。

……けど、飛ぶ時ばかりは、運んでもらわないといけないのも、事実。

「じゃ、急いでるから飛んで行くわよ」

何度か体験した気味の悪い浮遊感と共に、私の体は浮き上がった。幻想郷を見下ろしながら、かなりの速度で移動する。それから博麗神社に降り立つたのは、すぐだった。

最初にここに来た時、私は世界で一人きりで、アリスやマリサは何かを狙っていると本気で思っていた。

でも今は、アリスはお父さんと同じくらい大切な家族だ。

「いらっしゃい、澪、アリス」

境内を竹ぼうきで掃除していたレイムは私とアリスを交互に見て言った。

神社の鳥居から歩いて来た私達とレイムとの距離は十メートルくらい。それでも、レイムの声はよく通った。

私はアリスの後ろに隠れた。なぜか、レイムに対する恐怖が消えなかつた。

「……おかまいなく。聞きたいことを聞いたら帰るわ

「そう。何？」

「外来人のことなんだけど」

「何かしら」

アリスはゆっくりと、切り出した。

「外来人に皆特殊な力があるって、どうじつけとかしら」

「調査中よ」

嘘だ、ということがなぜかわかつた。レイムは何かを知つてゐても理由があつて、言えない。どんな理由で言えないのだろう。

「……そう。わかつたわ。あとそれから、映姫から伝言預かつてるわ

「？」

「あまり隠し事はないように、だつてさ」

「そうアリスが言つと、レイムは苦い顔をした。

「……そうね、わかつたわ」

レイムがそう言つたとき、私は後ろに気配を感じて後ろを振り向いた。物凄い速さで、マリサが飛んで來た。境内に着地すると、砂

埃を上げながら減速し、アリスとレイムの間ぐらこの場所で止まつた。

「マリサ」

「おう！ 元気にしてたか澪！ ん？ お前、目が……」

幕から降りたマリサは、真っ先に私のことを見た。

「じめん、マリサ。私、私……」

「気にすんな！ あたしは気にしてないし、言いたくなけりや言わなくてもいいんだぜ！」

ぽん、ぽん、とマリサが私の肩を優しく叩いてくれた。凄く安心する。

「……ありがと」

「おう、どういたしまして、だぜ」

マリサはそう私に言つて、レイムの方に向き直つた。

「レイム」

「……何よ」

レイムは、マリサの視線から目をそらした。

「聞きたいことが、ある」

妙に真剣な表情で、マリサが聞いた。その様子に観念したかのように

レイムはため息をついた。

「……中、行きましょうか」

「そうだな。澪は、ここ……」

「私も行く」

マリサは、アリスの方を見た。

「ま、聞きたいっていうんなら、聞かせてあげれば？」

「いいのか？ その、やっぱり子供にや辛い話だし……」

アリスは首を振った。

「そんなの、覚悟してるでしょ。澪は、ちゃんとわかってるわ

アリスの確信に満ちた表情で、二人とも頭に疑問符を浮かべていた。

「見ないうちに随分仲良くなつたなあ

た。

「マリサの疑問に、私達は顔を見合させて答えた。

「なんたって、家族だもの」

「ね」

「ふうん、とマリサは頷いた。

「ま、アリスがそこまで言つたなら、いつか。じゃ、行こうぜ靈夢」

「……ええ」

マリサに背中を押され、靈夢は神社の中にある部屋まで行つた。私達も、彼女に続く。縁側のようなところから靴を脱いで上がる。アリスとマリサ、レイムはこの前の前にちやぶ台を囲んで座つた。この前と違うのは、私もその輪の中にいるということ。

「お茶、用意しようか」

席を立とうとしたレイムを、マリサが手で制した。

「……レイム。单刀直入に聞かせてもらひ。……外来人が力づくで元の世界に帰るとしているのは、本当か？」

レイムはしばらく黙つて、それから、深く、辛そうな表情で頷いた。

「力づく、で？　どうこうこと？」

「私は初耳よ。説明お願いできるかしら」

アリスが不満顔で言った。蚊帳の外だったのが気に食わないのだろ。見たところアリスとレイム、マリサは仲が良さそうだし。

「前々から、特殊な力を持つてる外来人が帰りたがつて暴発しそうな動きはあつたのよ。でも、特殊な力を持つてる外来人なんて滅多にいなかつたから、幻想郷全土に及ぶほどの影響力はなかつた。一人が暴れ太くらいいなら、瞬殺できるし」

レイムが言い切ることに、私は空恐ろしいものを感じた。

「最近、もはや異常なまでに、特殊な能力を持つた外来人が増えてきて、その動きはさらに活発になつた。それだけじゃなく

レイムが言つたところを、マリサが繋げた。

「仲間を増やしてゐんだろ？」

レイムは頷いた。

「その連中は、外来人全員を仲間にして、自分達の意見が外来人の総意であると主張したいのよ。まあ、そう言うのを異変として殲滅するのも悪かないんだけど、そんなことすりや人里の人から恐れられちゃうしなあ」

レイムの口ぶりは、恐れられてしまうことだけを懸念しているようだった。勝てる前提、殲滅できる前提で話を進めていて、しかもそれをアリスとマリサが疑問に思わないということが、怖かつた。レイムは、ものすごく強いのだろう。私なんか息をする間もなく殺せるくらいに。

「……でね、そいつらの問題点は、従わない外来人に危害を加えること、なのよね」

「どういうこと?」

私は思わず、声を上げた。発言するつもりは、なかつたのだが。私が言つても、レイムは顔色を変えなかつた。

「ま、あなたには大事な話よね。

そいつら、『解放団』を名乗ってるんだけど、解放団に従わない外来人には酷いことしてる、ってもっぱらの噂よ。永遠亭つて知ってるかしら?」

私は頷いた。

「そこにノーマット子がいたのは?」

それにも、頷いた。

「その子、ここにきた初日に解放団に誘われて……ね」

言葉を失うほど目の前に遭わされた? 不幸があつたって、元の世界でじやなくて、この世界でだつたのか。

「私はまだ誘われてない」

私がそう言うと、レイムはうーん、と悩み始めた。

「たぶん、向こうがあなたのことを感知していないわけはないと思うわ。……でも、あなたこっちにきてからあんまり一人で行動しないでしょ?」

頷く。完全に一人になつたときなんて、一度か二度だ。そこで、

思い出す。

「そういえば、あの時、鬼一人を食べた時、声が聞こえた。あれが、解放団の？」

「解放団の連中、私達幻想郷の人間を目の敵にしてるから、顔を合わせたくないんでしょ。だから、一人になつたら誘われるかもね」
顔を合わせたくないから、アリスべったりの私は誘われなかつた、ということか。そして、離れたから私は勧誘されかけた。私は噛み潰して理解した。

「で、レイム。トップの名前と能力、割れてんのか？」

「ええ。御陵臣、『他人に感情の芽を植え付ける程度の能力』よ

「何よそれ」

アリスが不思議そうな顔をして聞いた。

「言葉通りよ。そいつは小さな感情の芽を他人に『与える』ことができるので」

「大したことないじゃん」

私はアリスの服の裾を引っ張つて、注意をこちらに向けた。アリスがこっちを向いたところで、私は首を振つた。

「お姉ちゃん、感情つていうのはとても大事なものだよ」

「なんことわかつてるわよ。だからあんたあんなに苦しんだんじようが」

お父さんのことと言つているのだろうか。

「うん。もしその人が、幻想郷にいる人たちに対する敵意を植え付けたら？　あるいは、郷愁を植え付けたら？」

私の言葉に、アリスは納得したような顔をした。

「そいつがリーダーやつてる理由がわかつたわ。つたく、厄介な」

「へえ、賢いじゃねえか、澪」

ガシガシと音がしそうな手つきでマリサは私の頭を撫でた。

「ありがと、マリサ」

「にしても、お姉ちゃん、ねえ。似あつてるぜ、アリス」

マリサはにかつと笑つてアリスにいった。アリスは照れ臭そうに

顔を逸らした。

「……馬鹿言つてんじゃないわよ、もつ」

二人の様子に、レイムが呆れ返つていつた。

「はいはい、いちやつかないで、話続けるわよ。正直、いざとなつたら殲滅できると言つても、解放団は厄介よ。それに、解放団がそろそろ一勢力としての力を確保しそうなのは、間違いないわ」「そんなにいるの？」

アリスの問いに、レイムが頷いた。

「射命丸が情報源だから正しいのかどうか不安だけど、幻想郷にいる外来人の七割から八割が、解放団所属、らしいわ」

……相当数に登るのではないだろうか。確かに、レイムの話では外人にはかなり多く、しかも間引きに近いことをするほど、外来人が幻想郷に来る機会も多い。その内の、七割。

「結界を閉じるのも、後回しにせざるを得ない状況よ

「ん？ それはなんでだ？」

マリサは首を傾げた。レイムはしばらく黙つて……何かを考える様子を見せた後、口を開いた。

「結界を閉じたことで解放団が武力に訴えてきたら、やつらを殲滅しても批判が噴出するわ。さすがに、信仰心が離れていくのはこまるしね」

そういうえばここ神社だった。私はレイムの話を聞いて改めて思い出した。話が政治的すぎて、忘れていた。故郷の神社もこんな話を……するわけないな。

「ま、そりやそうだよな。で、解放団になんか対策あんのか？」

レイムは苦々しげに首を振つた。

「向こうは強硬姿勢を崩さないし、こつちはこつちで交渉のカードもつてないしね」

「本当に何もないのかしら。探せばあるんじゃない？」
レイムは指を額に当てて思案を始めた。

「……一定周期で外来人を外の世界に返す、というがギリギリのラ

イン、かしら。しかも返せるのも特殊能力を持つてない外来人に限られるし……」

私は思わず立ち上がった。

「どうしたの？ お手洗い？」

「今、なんて」

私の質問に、レイムは何かに気づいて、目をそらした。

「なんて」

「……特殊な能力を持つた外来人は、元の世界に返せないわ。外の世界を幻想郷からの帰還者に壊させるわけにはいかないのよ」

「じゃあ、私は？」

私の声は震えていたかもしれない。まさか、まさか。

「……微弱な、本当に弱々しい能力なら、帰してもいいことになるけど……」

「……私は、不老不死で吸血鬼」

レイムとマリサは目を見開いた。

「……この四日間で、何があったの？」

「色々あつたのよ」

アリスは衝撃を受ける私をよそに、そんなことを言った。

「ごめんなさい、澪。あなたを元の世界に、返すわけにはいけない。不滅の吸血鬼なんていう絶対者になり得る存在を……外の世界には出せないわ」

私は、悲しいのだろうか。それとも、化け物と判断されたのが嫌だつたのだろうか。わからなくなつた。

「……私、永遠にここにいるんだね」

帰れない。それは、先生にも、学校のクラスメイトにも会えないということであり、そして、四年間集め続けたお父さんからの、あ……お金が、本当に無駄になつたことを意味していた。

「……いい。お父さんは、この世界にいるのだから」

「お、ならないじゃねえか！ 家族一緒に！」

「その父親、半悪靈で澪のこと虐待してた上に憎んで、死ねとか

いう人よ

「……ごめん、澪」

アリスの冷たい言い草が私の心に突き刺さった。

「いいよ。私がお父さんを愛してるのは変わらないから。もちろん、アリスのことも大好きだし愛してるよ」

私は誤解されないように、アリスに言った。お父さんのことはまだ愛してる。でも、アリスだって愛してる。一人に家族の愛を感じるのは、異常なことではないはずだ。マリサとレイムは、私の言葉に苦い顔をしていたけど。

「……ありがと。澪、やっぱり、元の世界に帰りたい？」

私は、頷かなかつた。ここに来た時帰りたかつたのは、お父さんがいると思っていたから。お父さんがこの世界にいるのなら、正直言つて帰る意味はかなり薄れる。

けど、それでも、あの家に帰りたい、という気持ちはある。解放団に入つてここにいる人たちと敵対しても帰りたいかといえば、違うけど。

「あんまり」

「そう……」

アリスがほつと胸を撫で下ろしてくれたことが、妙に嬉しく感じた。何気ないことで、愛されてると感じれる。

「……まあ、それなら、何より。澪、今からでも遅くないから、神社にいなさい。守つてあげる」

私はレイムの提案を首を振つて否定した。

「私、吸血鬼。それに、レイムに守つてくれなくともアリスが守つてくれる」

私は座つて、アリスの腕に抱きついた。そもそもなぜレイムがこんなことを言つのかはわからない。

「……やっぱ。じゃあ、少なくとも、解放団には入らないでね、お願ひだから」

「わかった」

私は頷いた。もし誘われても、絶対に入りたくない。レイムやマリサ、アリス、エイキにエイリンにカグヤ。こんなに沢山の人に優しくしてもらつたのに、その人たちと戦うなんて嫌だ。

「いい返事ね。それから、ちょっと出ててくれる？」

レイムが、私にそんなことを言つた。

「どうして？」

「これから話すことは、あなたに聞かせたくないの」「覚悟はある」

どんな醜悪な情報だって、私は受け入れる。

そんな覚悟があるというのに、レイムは首を振つた。

「ダメよ。あなたのことに關してなんだから」

「……自分のことを知るのは、ダメ？」

レイムは首を振つた。

「じゃあ」

「お願い。聞かないで」

真剣な表情だった。何の話をするのだろう。気には、なる。

「私を、退治するかどうか？」

「あなたを退治なんて、誰もできないわ。だから安心して」

私はその言葉を聞いて、立ち上がつた。

「わかった。じゃあ、外で待つてる」

私は縁側まで行くと、靴を履いて外に出た。ふと何かにもたれかかりたい気分になつて、何か背中を預けられるような物がないか探す。少し遠かつたが、鳥居があつたので、私はそれにもたれかかることにした。

鳥居まで行くと、鳥居にもたれかかつて三人が話している姿を遠目から眺める。三人とも、何を話しているんだろう。

「……星空澪、だね」

「誰」

後ろから聞こえた声に、私は聞いた。鳥居の後ろ、私の反対側にいるのはわかつた。匂いからして、人間だつた。男性の声だけど、

濁つたような変な声だった。ボイスチェンジャーでも使っているのだろうか。

「君は我々の希望だ。吸血鬼にして、永遠。そして、外来人。最大級の戦力になる」

「解放団か」

私の返事に、鳥居の後ろにいる人は感心したような声をあげた。
「我々をご存知だったか。何より敵がそばにいたから、誘うのが遅かつた。済まなかつたね」

「……あなた、御陵臣？」

まさか、ここに誘われた？ 能力を使われたのか？ だから、こうして何かに背中を預けていると妙に安心するのだろうか。
「ご明察。聰明なお嬢さんだ。ならば、私がここに来た理由もわかつてくれるかな」

「私を勧誘しに来た」

そのとおり、と解放団のリーダー、御陵臣は嬉しそうに言った。

「君には最大級の待遇を用意してある。我々の力になつてくれるね？」

「断る」

私は断言した。誘われても、断ると約束したのだ。それに、この人はまだ私を信用していない。だから。

「そうか。残念だよ」

ピン、と小さな音がした。首に、違和感と、痛み。息がしにくくなつて、苦しくなつてくる。

「……な、何を」

「君には改心してもらうよ。いやあ、君は不老不死だからね。他の人みたいに殺さないよう手加減する必要がないっていうのが楽だよ」
ギリギリ、と私の首が締め上げられる。かつて、母に殺されかけた時のこと思い出した。あの時は、死ねば終わりだったが、今は違う。死にはしない。ならば、またアリスに会える。ならば、大丈夫。

「暴れられても困るから、ね」

首が鳥居に押し付けられるような感覚がする。意識が薄れてくる。話している三人を見る。まだ気付いていないみたい。叫ぶこともできなかつたし、遠目からじやきっと、鳥居にもたれてるようになしか見えないだろ?。

「その首、落とさせてもらひよ」

ブツン、と自分の首の皮が切れる音を聞いた。痛みが強くなつて、血がとめどなくあふれて、自分の血で溺れそうになる。息ができない。意識が遠ざかる。

「トーン、という何かが落ちる音と同時に、私は意識を失つた。

苦痛と私

次に目が覚めた時、私は地獄にいた。少なくとも、私にとつてはそうだった。地下室のような、コンクリートでできた大きな部屋で私は目覚めた。

「お目覚めかい、お姫様」

「……」

私の目の前には、顔だけは好青年に見える男の人がいた。服装は現代風な、チャラチャラと無駄に装飾された服。この男は、鳥居にいた人間と同じ匂いがする。おそらくこいつが、御陵臣。

周りを見ると男や女、たくさん的人が入り混じって私を取り囲んでいた。私は壁に背を向け、足と手を縛られ、鎖で壁と繋がっている。まるで当然とも言うように、私は裸に剥かれていた。

扉は私のいる壁の反対側にあつたが、逃げられない私には意味がないものだった。どういうわけか全身に力が入らない。

「逃げようとしても無駄だよ。かなーりキツめの薬打ったからね」「外道」

私がそう言うと、男は壁に大量にかけられている拷問道具の内の一つ、大きなヤスリを持つと、それで私の顔を一撫でした。

耐え難い痛みが顔面に走り、思わず叫びそうになった。

ヤスリには私の顔の皮がへばりついていたが、すぐに私の顔は元通りに治った。

「へえ、すごいね。叫ばないんだ。大抵の人は今ので仲間にになりますっていうんだけど」「人でなし」

思い切りお腹を蹴られた。息が詰まつて、何度も咳き込む。

「痛い？……ねえ、澪」

ぐい、と私の顎を掴まれた。力強くで横に顎を外された。顎を押さえたくとも、手が縛られているのでそれすらもできない。

「仲間になるつて言つて。そうすれば、こんな辛い思いをせずに済むんだよ?」

顎も、すぐに元に戻る。痛みも消え失せる。

「『ミミと同化するなんて虫睡が走る」

御陵臣は、大きなノロギリを持つと、私のお腹に当てて引き始める。形容し難い、文字通り引き裂かれるような痛みと共に、血飛沫が御陵臣の顔や前面にかかる。反射的に体を丸めようとするとけれど、その回避行動さえも痛みを私にもたらした。内臓がぼたぼたと落ち、自分で自分の体が気持ち悪いと感じた。上半身と下半身が完全に別れるまで切られる頃には、麻痺して痛みを感じなくなっていた。

「もしかして、痛くない? あれ、おかしいな? 吸血鬼が痛みを感じないなんて聞いたことないんだけど……。顔色も変わつてないしなあ」

その言葉の途中で、私の体は繋がり、完全な姿になつていた。

「ううん、じゃあ恥辱はどうかな」

ぞきりと、心臓が跳ねた音がした。

どうする。いくらなんでも、拷問の一環として経験するのは止めんこつむりたい。……しかし、やめてもらひつては仲間にならなければならぬ。

レイムにマリサ、そしてアリスト約束したのだ。約束を破るわけにはいかない。

「いや、いくらなんでも壊れてもうつては困るんだからなあ」

そう呟くように御陵臣は言つて、今度は斧を掴んで胸を縦に割られた。全身が縛られたような感覚がしたあと、息ができなくなる。ごり、ごりと体に入った斧が動くたび、狂いそうになるほど激痛が私を襲つ。

「もがく、つてことは痛いんだよね。すごい、ここまでされて眉一つ動かさないなんて、よっぽどだ。痛いのに、我慢してたんでしょ? 中々できることじゃない」

斧を引き抜くと、今度は私の手を掴んだ。爪の先に、何かを刺し

こまれた。全身をよじって、痛みに耐える。

「次はどんなのがいいだろ？ 普段できないのがいいなあ」

「拷問、狂が」

せめてもの抵抗に、私はそう吐き捨てた。

御陵臣はにつこりと笑った。その手には、大きな杭が握られ、もう片方の手には大きなハンマーがあつた。

「何本刺さるか、実験してみよう」

心臓に杭の先端があてがわれる。杭は急ごしらえなのか、あまり先端が尖つていなかつた。ハンマーが振るわれ、胸の中心に衝撃が来る。私の体は小さく跳ねた。痛いのに、避けられない。苦しいのに、逃げられない。

「あれ、刺さらないな」

その次の衝撃と痛みは、今までのとは一線を画していた。皮を裂き、肉を潰し、胸の骨を砕き、私の体に侵入してくる。

「がつ……や、やめ」

「お、やつと声をあげたね。じゃ、どんどん行くよ」

何度も何度も、ハンマーが振るわれ、私の体に杭が入り込んでくる。痛みから逃れたくて、私は体を必死で動かす。無駄だとわかつていても、そうせずにはいられなかつた。

「おー、心臓に杭を打たれても生きてるって、不幸だねえ」

私は何も言えなかつた。息ができない。

「じゃ、次は両手両足、いつてみようか。それが終わつたら目、両目が終わつたら口の中に杭を打ち込んで、最後は全身に打ち込んであげる」

私は足首に杭の先端を感じ、足を動かして逃れようとする。御陵臣が私の足を掴んで、押さえ込んだ。足に体重を感じ、足が動かなくなる。今度は太腿に、杭の先端を感じた。

「今なら、頷くだけで仲間にあげる。ほひ、頷きなよ」

私は首を何度も振つた。

「ふうん。勇気あるね」

それから私は全身に杭を打ち込まれた。

身動きをとらなくても、反射で体が動き、そのせいで痛みを感じて反射が起っこり、という螺旋に囚われた。しだいに痛みに狂い、壊れようとしていた。

私とは一体なんなのか、そもそもこの痛みは存在するのか、全て夢ではないのか、夢であつてほしい。こんな痛み、ここに来る前ならば感じずに済んだのに、心臓に杭を打たれた時点で何も感じなくなっているはずなのに、なぜ私はいまだに痛みを、苦しみを感じているのだろう。

どれくらいの時が過ぎただろうか、少しづつ、痛みを感じる場所が少なくなってきた。麻痺したのだろうか、と思つたが、違う。杭が抜かれているのだ。荒々しい手つきで抜いてくれる。目に刺さつた杭が抜かれると、すぐに視界が戻った。最後に、心臓の杭が抜かれ、私は苦痛から解放された。

「どうだった？ 一時間ほど放つておいたんだけど」

私の顔を覗き込んだ人間がアリスやマリサ、レイムではないと知つて、私は絶望に襲われた。

「……あなたは、鬼畜生よりも、最低」

「さらなる痛みをご所望らしいね」

それから私は、何をされたのだったか。私は変わらず縛られ、繫がれたままだが、対する御陵臣は全身を真っ赤に染め上げていた。もちろん、全て私の血だ。妙な倦怠感と、絶望が私の心を支配していた。

「しぶといねえ。さすがに、疲れちゃったよ

「……」

声を出すのも、氣だい。

「さ、最後だよ。君が頑固なのがいけないんだよ。素直に仲間になつて、我々の英雄になつてくれたらよかつたのに」
ゆつくりと、御陵臣は私の体を撫で始めた。今まで与えられ続けた刺激と百八十度違う性質のものに、私の体は歓喜した。

「……いい反応だね」

「下衆」

私はどうあつてもされるがままでいるしかないというのが、悔しかつた。一体私はどれほどの傷を心に刻まれればよいのだろう。

東野と御陵臣が、頭の中で重なる。

「……やめて」

「へえ、何されるかわかるんだ。意外にませてるね」「許して」

「なんだ、最初からこいつちから責めればよかつたんだ。やめてほしければ、仲間になつて」

私は、頷こうとした。けど、頭の中に、アリスの優しい笑みが浮かんだ。カグヤに抱きしめられた感覚を思い出す。アリスとカグヤ二人とは、たとえ脅されたからといつても敵になりたくない。

「ならないの？」

「……うん。私、あなたの仲間にならない。だから、好きにして」覚悟は、決まった。これから何をされても、かまわない。何日、何週間、何ヶ月、何年かかるうがきっといつか、アリスやカグヤが助けてくれる。その時、きっと一人は慰めてくれる。優しく抱きしめて、優しく言葉をかけてくれる。だから。

「へえ、本当にいいの？」

「私は、あなたには屈しない。好きなだけ、好きなことをすればいい」

「じゃ、遠慮なく」

私は、これから幾度となく辱められるだろう。でも、大丈夫。アリスがきっと、助けてくれる。

「ふふふ、いただきます」

私の唇と、御陵臣の口が合わさるうとしたとき、壁の奥にあった扉が跳ね飛ばされるような勢いで開いた。

それに合わせて、御陵臣が扉の方を見た。

私は、一筋涙を流した。

アリスが、助けに来てくれたからだった。

「ゴミ共。妹は返してもらう」

アリスは私と御陵臣の方へと走つて來た。

「あんたが、澪を！」

「おつと」

彼女の周りには、人形が何十体と浮いている。人形達の手には、武器が握られていたが、綺麗なままだった。

「じゃあね、澪。我々は、諦めないよ。何度も勧誘するよ。それと、お口にチャック、忘れないでね」

御陵臣は私から離れると、霞のように消え失せた。一体、どうやつて。

「お姉ちゃん、あいつが……」

私の手枷、足枷を外している最中のアリスに、私は言おつとしたところで、口を開ざした。

それにしても、なんであんなに逃げ足が早いのだろ？。

「あいつ、どこいったかわかる？」

「わからない。お姉ちゃん、誰か殺した？」

アリスは首を振った。

「無抵抗で通してくれるもんだから、躊躇つちゃった。御陵も仕留めそこなって、ごめんね」

「いいよ。何もされなかつたから」

私は嘘をついた。心配をかけたくないからだ。

「で、でも、この部屋……」

「全部、私のじゃない。私、ずっとほかの人かいじめられるのを見せられていた。次が、私の番だつた」

全くのたらめ。お願い、信じて。

「そう、間に合つてよかつた。とりあえず、神社に戻るわよ

私は胸をなでおろした。よかつた、信じてくれた。

アリスは私を優しく抱き上げた。

「どうして？」

「解放団のことについての話し合いで、あなたも参加して欲しいの
それくらいなら、別にいくらでも参加してもいい。痛みを感じな
いなら、それで。

「私に何もない？ 私、何も言わなかつたよ、私、仲間になつて
もいいよ。信じて」

私は隠すつもりだつた本心を、勝手に打ち明けていた。

大切なアリスに恐怖を感じるほど、私は痛みというものに怯えて
いた。

……アリスに心配をかけたくなかったのに。こんなこと言えれば、
優しいアリスが心配しないわけがないのに。

「何言つてるの！？ 私があなたに何かするとでも思つてるの？」

……まさか、さつきの、全部、嘘だつたの？

「え、そ、それは……」

「澪」

アリスに凄まれ、私はつい、うなずいてしまつた。

「もう一度と、そんな嘘つかないで。私、あなたを傷つけたくない
の。だから、ちゃんと教えて。ちゃんとサインを私に出して。そう
でないと、間違つてしまつから。

……それに、そんな風になるまで痛めつけられるくらいだつたら、
仲間になつてもよかつたのに。裏切つたらよかつたのよ

「たとえ嘘でも、裏切る前提でも、アリスと敵になりたくなかった」
私の答えに、アリスは。

「もう、本当にあなたは……。頑張つたね。偉いわ。でも、次から
は、すぐに仲間になるつていいなさいよ。そうすれば少なくとも、
危害を加えられることはないんだから」
そう言つて、労つてくれた。

「ねえ、お姉ちゃん

「何？」

私はアリスの腕の中で、縋り付くようにアリスを抱きしめた。

「疲れちゃつた。眠つていい？」

「 もうるんよ。好きなだけ休みなれー 」

許可をもらつと、私は目を閉じ、眠りについた。

安心は感じている。けれど、さつきまでの痛みと苦しみは、すぐ

に思い出せるほど鮮明に刻み込まれていた。

再び目を開けると、私は神社で寝かされていた。布団にくるまつて寝ていれるのが妙に安心した。私のことを、レイムが覗き込んでいた。

「起きたわよ」

レイムは周囲にそう言った。誰かいるのだろうか。そう思つて体を起こすと、私は驚いて、一瞬体の動きを止めた。

レイム、マリサ、アリスがいて、カグヤとエイリン、エイキ、レミリアとサクヤと、他にも数人、たくさんの人私が私を取り囲んでいた。何をされるのだろうか。

「……怯えなくてもいいわ。ここにいるのは、あなたの味方よ」
レイムにそう言われても、安心できなかつた。なんでレミリアがここに？

「靈夢、あまり澪を疲れさせてはいけないわ、早く始めましょ」
カグヤがレイムにそう言った。カグヤの仕草、口調はお姫様モードで、とても優雅だつた。

「そうね。じゃ、解放団対策会議を始めるわ。まず、被害状況。アリス……は、澪が一人ね。で、マリサはどうだつた？」

レイムの質問に、マリサは手をあげて答えた。

「あたしんところは外来人がいらないんぜ口だぜ。ま、行く先々で被害に遭つたやつはいたけどな」

そう、とレイムは言つた。やはり、さつきマリサがレイムに聞きましたのは、解放団に痛めつけられた人を見たから、だろうか。

「じゃ、次カグヤ」

マリサの隣を指してレイムが言つた。カグヤは後ろに侍るようにな

座っているエイリンに目配せをすると、エイリンが手をあげた。

「永遠亭も被害はごく少数。けれど、解放団の人に助けを求められることはあります」

「具体的には？」

「逃げたいから、助けてくれと言つてきました。ある程度の監視の元、匿っています」

「エイリンの報告に、レイムはしばらく何かを考えた。

「内情を探ろうとする動きはある？」

「ありません」

「そう。じゃ次閻魔」

「映姫という名前があるのですが……」

「そう文句を言いながら、エイキは手を上げて、他の人と同じように報告を始めた。

「裁判所、被害少數。詳しい人数はあがつていませんが、友達がいなくなつたと相談を受けた死神が数人いました」「解放団に攫われたってこと？」

エイキは首を振った。

「断言はできません。しかし、生還した外来人が解放団所属になつていたことを考えれば……」

エイキは錫の先端を顎に当てる悩み始めた。

「ねえ、その帰ってきた外来人は、どうしたの？」

「どうした、とは？」

私の問いに、エイキは不思議そうに聞き返してきた。

「だから、敵じゃないかと確かめなかつたの？」

「……澪。彼らが解放団にほだされたとして、帰ってきて、解放団になつたと伝えますか？」

「でも、本當になりたくないなら、何されても我慢するのが」「あなただけよ」

レイムに口を挟まれた。私はエイキから視線をレイムに移した。
「何されても我慢する覚悟なんて、そういうできるものじゃないわ。それから、発言するなら手を上げて」

「……はい」

私はしゅんとなつてそう言った。

「まあ、こんどその外来人に話を聞きにいきましょうか。じゃ、次
レミリア」

はい、と返事をしたのはレミリアに仕える人間、サクヤだつた。
この中で今唯一立っているのだが、それはやはり威圧感を演出した
いからだろうか。

「紅魔館、被害ありません」

「……。そう、じゃ次、さとり」

指を指されて手を上げたのは、紫の髪に私みたいな、感情を抜いた
ような表情をする女人だつた。赤い太めの紐に繋がつた目玉を
アクセサリーみたいにしてつけている。奇妙だけど、あれはまさか
本物なの、だろうか。

知らない人だつたけど、挨拶はあとにしようと思った。今は、こ
の会議になぜ私が参加させられているかも含めて、色々な事をよく
考えなければならないから。

「地霊殿、被害多数。外来人と暮らしていた多くの鬼が外来人の失
踪を訴えている」

……鬼。私は昨日を思い出した。吸血鬼になつた次の日に初めて
食べたお肉は、鬼だつた。生で食べたのに美味しいと感じた自分を、
今更ながらに恐れる。

「やつぱり、人が多い場所だと被害も多いわね。次、紫」

はーい、とまるで子供のように返事をしたのは十代に見えるキレ
イな女性だつた。ここにいる人はみんな綺麗だけど、一番めぐら
に綺麗。一番は、もちろんカグヤ。

「うちはね、被害ゼロよ。でも解放団が直接ちよつかいかけてくる
わ」

「ありがと。次、慧音」

手を上げたのは、青白い髪をした、不思議な帽子をかぶつた女人
人だつた。二十代後半くらいだろうか。この中では年長者の部類に
はいるのでないだろうか。

「人里の被害は甚だ。寺子屋の子供達も一クラス分程度いなくな

つているし、人里に行くたび、誰が消えた、誰々がいなくなつたという話を聞く。誰が解放団のメンバーかわからない故、対策も取りづらくてな。数にすれば百をゆうに超える

ケイネという人の報告に、この場にいる私以外の人は痛ましげにうなつた。

「想像はしてたけど、やっぱり人里が一番か……。ありがと、慧音。天子、次お願ひ」

手を上げたのは、普通の女子高生に見える女人の人だつた。青い髪という特異点を除けば極普通で、学校に通つても違和感はないだろう。その丹精な顔は、怒りに満ちていた。

「天界、被害一。靈夢、いつ解放団を潰すの？ 私も手伝うわ」

その表情と雰囲気から何かを読み取つたのか、レイムは静かに頷いた。

「わかつてゐるわ。でも、もう少しだけ待つて。最後、早苗よろしく
「はい！」

元気良く挨拶したのは、緑の髪の女人の人だつた。レイムのようなく脇と肩を露出した特殊な巫女服に身を包んだ、変な巫女さんだつた。

「被害数、把握しきれません」

「それほど多いの？」

サナエは首を振つた。

「参拝者が随分減つたのですが、その人たちが解放団に入つたからなのかただ信仰がなくなつたか判別がつかなくて……」

「……そう。ありがとう、早苗」

ここにいる全員が報告し終わると、レイムは静かに口を開いた。
「解放団は、正直私にとっては、ただ馬鹿が騒いでるようになしか映らない」

衝撃を受けた私を、レイムがじつと見つめた。

「……けど、特殊な力を持つたせいで帰れなくなつた、幻想郷に住まわざるを得ない人達にとっては、解放団は救いに映るかもしれない。あるいは、恐怖の対象か。謀反するのは勝手だけど、関係のな

い、力のない人間にまで手を出すのはいけないことよ
だから、とレイムは私に向かつて言った。

「あなたに協力してほしいの」

「どんな力を貸せばいいの？」

私は即答した。アリスの友達の力にならないという選択肢なんて、私は持つてない。それに、解放団には、入りたくない。あんなところ、殺されても行きたくない。

「情報が欲しいの。顔とか、覚えてない？」

「顔？ 顔って、誰の？ もしかして、御陵臣？ 話していいの？ 話したら今度こそ、壊れるまで痛めつけられるのではないだろうか。さつきは最後には仲間になるといえば苦痛は終わつた。でももし私が話したことがばれて、捕まつて、しまつたら……。」

「……靈夢、質問やめて」

「え、なんで？」

紫色の髪したさとりという人が、レイムに言った。

「ここの子、御陵臣に怯えてる」

「普段通りじゃない」

「それでも、心の中は不安と恐怖でいっぱい。こんな子に余計な負担を与えるべきではない」

さとりがそう言つと、レイムは唸つて、それから頷いた。

「わかったわ。ごめんね、澪。辛い思いさせて」

大丈夫、と私は首を振つた。私は視線をさとりに向けた。なぜ、この人は話してもいい私の感情を読んだのだろう。

「……」

さとりは唇に指を当てた。言わなくてもいい、口をつぐんでいてもいいというサインなのだろうか。

私が疑問に思つていると、さとりは頷いた。

「不思議な人だ。」

「で、対策会議というのはわかるが何を話すのだ？」

手を上げて、ケイネが言った。不思議そうに私を見ていたレイム

は、彼女の方に顔を向ける。

「正直な話をすると、解放団の厄介なところは、その性質上力づくで全滅させりやいいつてものじやないつてところよ」

マリサが手を上げた。

「なんでだ？」

「解放団のアジトが仮にあつたとして。そこにいる人間の誰が脅されて嫌々入った人間で、自分から進んで解放団に参加したかわかる？」

マリサは首を振った。

皆が手をこまねいでいるのは、だからなのか。誰が悪人で、誰がそうでないかを判断できないから、強行手段に出ることができない。「ほうつておく、というのもありじゃない？」

そう言つたのは、レミリアだった。不敵な笑みを浮かべて、ニヤニヤと楽しそうだった。

「……あのね、レミリア」

「奴らの理念上、最後の最後には武力による直接手段に訴えてくるわ。その時向かってくる奴を皆殺しにすれば、最後に残るのはビクビク怯えて動けない、無理矢理解放団に入れられた人達、ってこと」レミリアは本気でそんなことを言つている……のだろうな。人間のことを食糧か何かにしか思つていない。私もいつか、あんな風になるのだろうか。ああにだけは、なりたくない。

「トップが前線に出てきて、最終手段に訴えてくるまでの人的被害を無視できるんなら、それもありかもね。そんなの無理よ」

じゃあ、とケイネが手を上げた。

「いつのこと帰すということはどうだ？ 元凶を外の世界に出せば、この世界でもう解放団は存在しなくなる

「それはダメよ」

「特殊能力を持つてるからか？ そんなもの、特例にすれば……」レイムは首を振つて強く否定した。

「十歳の女の子に酷いことできる特殊能力持ちがいる集団を外に出

せるわけないでしょ。無力な外来人なら別に帰してもいいけど、それじゃ向こう納得しないでしょ」

「うむむ、とケイネは唸つた。

「あまり褒められた手段ではありませんがトップかその側近を殺害、ないしは捕縛すれば自壊するのでは？」

エイリンの提案にもレイムは首を振つた。

「私もそれがいいと思つたんだけどね。でもトップ殺して、部下が暴発する形で戦争が起こつたら、無辜の解放団の人まで命の危険を感じて武器をとる可能性があるわ。そうなつたらそれこそ、解放団ＶＳ幻想郷の構図が最悪の形で完成するわ。だから、最終的に戦争になるとしても、最初の引き金は向こうに引かせないと」

話がだんだん、私の理解の範疇を超えていく。いくら人より勉強したとはいえ、政治の話などかけらもわからない。

「だが、引き金を引かせるまで待てば人的被害は今よりなお増加します。事態は可及的速やかに解決しなければならないのですよ？」

エイリンが鋭い口調で言つた。

「じゃあどうしろってのよ」

「……そうですね、いつそのこと結界を閉じて、修復後、少しづつ帰していく、というのはどうでしょ？」

「それじゃトップが納得しないでしょ」

次にエイリンが言つた言葉は、私の常識を大きく外れていた。

「全員もれなく帰すと約束するのです」

「そんなのできるわけが」

「無辜の解放団を優先的に帰し、帰しても問題のない特殊能力持ちを帰す。最後に残るのは、強力な力を持った、首謀者達のみ。あとは、殲滅するだけです」

「却下です！」

立ち上がり叫んだのは、エイキだった。エイリンは涼しい顔で、彼女を見る。

「なぜ？」

「私の前でよく堂々と驕し討ちを宣言できましたね！ そんな非道な真似はできません！」

「しかし、全ての問題が収束します」

本当だろ？ そんなことをして、誰も文句を言わないのだろうか。

「ダメよ、エイリン」

「なぜですか、紫」

今まで一言もしゃべらなかつたユカリが、初めて話し合に參加した。

「それ、結界を閉じれる前提で話進めてるでしょ」

「閉じられないのですか？ あらゆる境界をいじる」との妖怪であるあなたと、博麗の巫女が揃つているのに？」

ユカリは「くんと頷いた。この人、妖怪だったのか。

「それがねえ。今の幻想郷、少年漫画みたいに能力同士がぶつかり合つ、とっても混沌とした世界になつてるのでよ」

「なぜ？」

「なぜかは、調査中よ。でも、こんなおチビさんがワケのわからない力を持つくらい、能力の幅は増えてきているの」

ユカリの言い方は、私の能力がまるでいい物のよつた感じだった。

「……澪が？」

そう思つたのは、私だけではなかつたようだ。エイリンが頼狂な声を上げて、私を見た。

「そ。ま、この子の力はこの四日で成長して、完全な物になつたからねえ。『力を増幅し、その後耐性を得る程度の能力』、なんて素敵なんでしょう」

？ 私は、あらゆる攻撃に弱いのではなかつたのか？

「……まさか」

「さすがエイリン気付くの早いわね。そう、本来ならこの子は攻撃に限らず、受けた特殊能力を増幅してしまい、ちょっと妹紅に燃やされただけで灰になるような子供。でも、この子の力には先があつ

たのね。

一定まで力を増幅したあとは、その力に對する完全な耐性を得るのよ。だから、一度妹紅に燃やされて灰になつたあと、蘇つてからもう一度燃やされても、熱いとも感じないはずよ

……そんな。そんな力が、私に。

「ま、話戻すと、こんな感じの能力を持つた人間が何人もいてね。相乗効果で結界が閉じれないのよ」

ユカリの言葉に、ここにいる全員が、何かを一様に考え始めた。「……解放団の件については、正直もつと情報がほしいわ」レイムが、私の方を見て言った。さつきも言ったことだった。もう、私は理解した。

「私が行く」

「こう私から言つてほしかつたのだ。きつとそつ。でもいい。私は、アリスの友達の力になれるなら。

「……そう、ありがとう」

「反対」

アリスとカグヤが、強い口調で言った。

「なぜかしら」

ユカリが、じとりとした視線を一人に向けた。

「こんな子に偵察任務なんて荷が重すぎるわ。もしされたらそれこそおかしくなるまで痛めつけられるわ。助けた時だってあんなに怯えてたのに」

「そうよ。それに、私の友達が危険な目に遭うなんて許せないわ」

ユカリはやれやれとでもいうように首を振った。

「吸血鬼で、しかも不老不死。これほどの人材、放つておけるわけないでしょ?」

「いいえ。いくらなんでも分別はつけるべきよ

「やらなきゃ何の罪もない人が死ぬのよ?」

ユカリがさらに言った。

「澪だつて、なんの罪もない子供よ」

「並行線ね」

すつと、ユカリは立ち上がりてみんなから背を向け、縁側からどこかへ行こうとした。

「どこ行くの紫

「勝手にやらせてもらひわ」

「解放団への独断先行はしない。それが約束できるなら」

ユカリは頷いた。ユカリの進行方向の空間が裂け、別の空間に彼女は行つた。スキマができたような、そんな感じの穴だつた。スキマにユカリが入りきると、それが閉じて、ユカリはすっかり消えてしまつた。

「つたく、あのスキマ妖怪。勝手なんだから」

「スキマ妖怪？」

レイムの呟きを、私は聞き逃さなかつた。

「ええ、そうよ。空間の境界を弄つてできるスキマを、あいつは自由に操れるの。あいつとあいつの下僕が神出鬼没なのはあれがあるからよ」

神出鬼没、自由奔放。私のイメージする妖怪そのものだつた。

「では、私も好きにさせてもらひわね。行くわよ咲夜」

レミリアは立ち上がりて後ろのサクヤに呼びかけた。深く礼をしたサクヤは、どこからか大きな傘を取り出してさした。

「じゃあね、皆」

サクヤから傘を受け取ると、ゆっくりとした足取りで神社から出て行つた。

「……はあ。皆も、解散。お疲れ様」

レイムの一言で、この場にいるものから緊張が消えた。あれだけ話したのに、何も決まらなかつた。

会議は踊る、されど進まず。この言葉、誰が言つたんだろう。すゞぐ、的確だ。

ひとりと私

会議が終わって、私は気分転換に外に出ていた。縁側に素足を投げ出し、ぱらぱらとさせる。すぐに皆を呼べる場所で、私はアリス達の会話を聞いていた。やっぱり、まだ解放団のことを話している。

「辛い？」

声をかけられて、驚いて振り返った。紫色の髪をした女性、さとりがいた。

「ううん」

「そう……。お名前は？」

「……私は、ミオ・マー・ガトロイドと言います」

「私は、古明地さとり」

さとり。なんだろ？、どこかで聞いた名前。

私がそう思つていると、さとりの赤い玉玉のアクセサリーがぎょろりと私の方を見た。

動いた？

「驚かせてごめんなさい。私は、サトリ……人の心が読める」

そうだったんだ。すごい。さつき混乱していた私に助け舟を出してくれたのは、そのおかげだったのか。

「あなた、もう自己犠牲はやめたほうがいい」

「自己犠牲なんてしてない」

私がそう言うと、さとりはため息をついて、私の隣に座った。背丈は私と同じくらいなのに、纏っている雰囲気がまるで違った。「あなたは気付いていないけれど、あなたのその盲目的な愛情は、自己犠牲に他ならない」

「……それでもいい。アリスが、お父さんが喜んでくれるなら、ほん、とさとりが私の頭に手を置いて、優しく撫でてくれた。

「……その気持ちだけで、アリスは喜ぶわ」

「行動に移さなきや意味ない」

さとりは静かに首を振った。

「いいのよ。アリスも靈夢も魔理沙も輝夜も、心の底からあなたの安全を願つてた」

でも、レイムは。

「レイムは、敵の情報を話して欲しかつただけ。けして、あなたに解放団のスペイをして欲しかつたわけじゃないの」

そうだったのか。レイムは、私に死地へ向かつて欲しかつたわけでは、ないのか。よかつた……。

「やっぱり、不安よね」

私は首を振つた。

すると、抱き寄せられた。

「いいのよ。泣いてもいいし、辛かつたら辛いって言つても。言わなきや、わかつてくれないわ」

わかつてほしいんじゃない。わかつてもらわなくてもいい。私は大切な人に、嫌われたくない。もう一度と、捨てられたくない。殺されたくない。

「……不安つていうのはね、誰でも感じることよ。何も変なことじやない。私だつて、アリスだつて、靈夢だつて、魔理沙だつて、紫やレミリアだつて不安なのよ」

……そんな、馬鹿な。皆、強いはずで、弱いのは私だけなのではないのか？

「強さと、不安を感じることとは、別よ」

せりにぎゅっと、抱き締められた。

……私は、何度この温もりに、他人の暖かさに救われているのだる。マリサに、アリスに、そしてさとり。

代わりに私は何をあげただろう。何もしていない。何もできていまい。

「しなくていいの。ここにいるところことが、大切なのよ」

「違う」

さとりの言葉を私は否定した。

「私は何かアリスに、皆にお返しがしたいの」

「今でなくてもいいわ」

「したいと思つた時にしなきや。アリスは永遠じゃないんだから」

「私は死なないけれど、アリスは違う。母みたいに、お父さんみたいに、死んでしまうんだ。もう、私は誰の死も見たくないのに。

「優しい子ね。でも、その気持ちだけで十分なの」

「私はさらに、強く抱きしめられた。本当に、そうなのかな。

「……さとり、みんな、私のこと嫌つてない？　私のこと、役立たずつて思つてない？」

私が聞くと、さとりは神社の中で話す五人を見た。すると、さとりは薄く微笑んだ。

「ふふふ、素晴らしいわね。ここに来て日も浅いのに……。もう、家族と親友がいる。私には、できないわ」

「そんなことはない。さとりは、私の大切な人。私のことを気遣つてくれた、優しい人。

「ありがとう、澪」

「どういたしまして、と言つて私はさとりから離れた。

あの憎たらしい匂いが近づいてきたのが、わかつたからだ。

風が舞い、木の葉が集まる。私の前に柱のように集まつた木の葉が散ると、そこには御陵臣がいた。

「何の用」

「勧誘。我々の仲間になつてくれないかな。こんな心を盗み見るような奴と一緒にいると、大切な事全部ばれちゃうよ？」

「心がさすぐれだつ。私の……友達、に。友達に、なんてことを。

「なんでこんなところにいるの？　ふざけるのもやめて。私は、あなたの仲間にはならない

「君は、外来人だろ？　虐げられて、帰れなくなくて嫌じやないのかい？　我々につけば帰れるんだよ？」

「御陵臣の言い方に、私は怒りを感じずにはいられなかつた。

「私の帰る場所は、お父さんのいる地獄かアリスの腕の中だけだ。

消え失せろ

私の言葉に、さとりはぎょっとしたよつこ、田を見張らせた。私も怖いのだ。少しでも、強く見せないと。

「……酷い言い草だね。君、本当に来ないの？」

私は頷いた。

「そう。じゃあ、言葉での説得はこれでおしまい。次からは、体に語りかけてみるよ。楽しみにしててね」

そう言つて、御陵臣は消えた。色素が抜け落ちて、透明になつていくような消え方だつた。なぜ、こんなところに、みんながいる前で危険を冒すような真似を……。

「……さとり」

「大丈夫、守つてあげる」

さとりは立ち上がり、神社の中にいる人を呼んだ。ゾロゾロと慌ただしい様子で皆がこちらに来た。

「御陵が来たつて！？ 大丈夫澪！？」

レイムが私の左隣に座つた。色々、ペタペタと触つて私の無事を確認した。

「澪、なんで叫ばなかつたの？ また攫われちゃつたらどうするつもりだつたのよ、もう」

アリスが私の右隣に座つた。ぎゅっと右手を握つてくれた。もう一度と離すまいとしているかのようだつた。

「ちょっとぐらりい捻つてやればよかつたのにな。澪、強くなつたんだろう？」

そう言つてマリサが私の頭に顎を乗せ、背中から抱きしめてくれた。包まれるような感覚がして、ほつとする。

「全く。言つたでしよう、澪。普段通りの行動を心がけなさい、と。普通の女子はかつて自分を痛めつけた人間を見れば悲鳴をあげるなりなんなりするはずですよ」

マリサの隣にお姫様らしく座つて、私の肩に手を置いた。

「やはりあなたは自己犠牲が過ぎます。もつと年長者を頼りなさい

私の後ろで、エイキがそんなことを言つた。

皆に私は愛されている。本の中でしか見たことのなかつた、理想的の形がここにあつて、私は身に余るほどの幸せを感じていた。

「……皆、ありがとう。私、大丈夫だよ」

嘘でもなければ強がりでもない、素直な気持ちで、私はそう言つた。

そう、何があつても大丈夫。私は、みんなに守つてもらえる。御陵臣に攫われて、私が私でなくなつて、壊れてしまつたとしても、この人達がいれば治してもらえる。私が私を取り戻すまで待つてくれる。

そんな安心感が、私を満たしていた。私は……幸せだ。
「私、知つてること全部話すね。役に立たないと思つけど、みんなの力になれば、いい」

私は皆に囲まれながら、言葉を紡いでいく。私が言われたこと、されたこと、御陵臣の特徴や、話し方。知つていること全てを、止まる事なく話していく。

話し終わつて、私は皆に言つた。

「これで、全部」

「……想像以上にイツてるわね、そいつ」

レイムが静かにそんなことを言つた。他の人も、その評に異を唱えることはしなかつた。

「私は、澪の保護を優先したいわ」

「私も」

アリスが言つて、カグヤが同意した。

「確かに、これ以上澪に心理的、身体的負担は酷と言つものです」「エイキがレイムとアリスを交互に見ながら言つた。

「人が保護する、というのはどうでしょうか」

「永遠亭はどうして選択肢に入つてないのかしら?」

エイキはカグヤの言葉に驚いたように少し眉を動かした。

「……いつもは、我関せずを貫くあなたがどうして澪に限つて?」

「友達を守るの?」、別の理由がいるかしり?」

エイキは小さく、友達、と呟いた。

「そういうことなら、永遠亭、アリスの自宅、神社の三箇所で交互に澪を保護しましょう。道中は三人が責任を持つて守るよつ」

「ちょっと、と言つたのはレイムだつた。

「なんでそんなわざわざめんどいことしなきやいけないの?」
「いいじゃない」

どうしてレイムは私をそばに置こうとするのだろう。最初は僅かな疑問だったけど、今はかなり大きなものとなつてゐる。思い切つて聞いてみようか。いや、やめておけ。藪をつついて蛇が出てくるのは嫌だ。

「一つの場所にいろと言われたら、こゝへひきびきの氣がなくとも、この子は閉じ込められたと思つでしょ?」

「閉じ込めたりなんか」

「わかつています、靈夢。しかし、窮屈に感じてこの子が飛び出しうむむ、とレイムは唸つた。

「……わかつた。じゃ、今日明日はここで、ね。次にアリスの家、最後に永遠亭。これで決定。文句ない?」

アリスとカグヤは順番に気に食わないのか渋い顔をしていたけど、頷いた。

「よし、じゃあ今度こそ解散。澪は明後日アリスの家に行くわよ」

レイムの言葉に、私は首を振つた。

「行くんじゃないよ。アリスの家には、『帰る』の」

私がそう言つと、レイムはきょとんとした顔になつた。

「……そうね。帰るのね。わかつたわ。……そろそろ、お夕飯ね」
レイムの言い方は、まるで催促しているかのようだつた。

「私は帰る」

真っ先にさとりがそつこつて、どこかへと歩き出した。

「……私も帰るわ。澪、いい子でね」

「うん」

私が頷くと、アリスは私に微笑みかけて、空を飛んで帰ってしまった。

「では、私たちも」

「そうね。これから不自由かもしれないけど、安心して。絶対に、守るからね」

カグヤはお姫様の仮面をかぶつたまま、私にそう言ひて歩いて帰つていった。

「……皆、澪にお熱だな。羨ましいねえ」

マリサが茶化すように言ひた。私の隣に移動して、私の肩にもたれかかるように体重を預けてくる。でも、本気でもたれかかっているわけではない。マリサの体重が、心地いい。

「……羨ましい?」

「おお。皆に守つてもらえて、幸せもんだよ、澪は

私が、幸せ者。

「そんなこと、言われなくつても知つてる。私、今すぐ満たされてるから」

そうか、とマリサは言つて、縁側から境内に下りた。ビニカルともなく簾を取り出すと、一気に飛び上がつた。

「達者でな、澪! 遊びはまた明日教えてやるよー。とびっきり楽しい遊びをな! 楽しみにしてろよ!」

私は上空にいるマリサに頷いた。

私が頷いたのを見届けると、私はレイムと一緒にになつた。ちよつと怖い。

レイムは立ち上がると、神社のせらにて奥に向かつた。

「……ほら、行きましょ。そろそろ日が落ちるわ

言われるまま、私は神社の中に向かつた。

衝動と私

私が連れてこられたのは、生活スペース兼寝室の、六畳くらいの小さな部屋だつた。レイムはさつきまで私達がいた部屋からちやぶ台をもつてくると、私の前に置いた。私の反対側に座らうとして、止まる。

「何か飲む？」

私は首を振つた。レイムは腰を下ろすと、私に向き直つて口を開いた。

「「こはん、いるかしり」

「いらない」

私は首を振つた。

レイムは手を私の方に差し出した。白い、美しい肌が見える。レイムの表情は、何かを試しているかのようだつた。

「血は、いるかしら」

「……。あ……。い、いらない」

私は必死になつて首を振つた。レイムが手を引っ込める。
「ほんとあなたすごいわね。普通、なりたては吸血衝動我慢できな
いわよ？」

「その、もう食べた、から」

何を？ と言つた顔をレイムはした。

「昨日、私は襲つてきた鬼を、食べた」

意外な顔を、レイムはした。

「へえ、あなた、戦えるんだ」

「で、でも！ それは人間じゃなくて、しかもわかりやすいくらい
弱かつたから……」

そう、昨日私が食べた鬼は、レミリアや東野に感じたような恐怖
は全く感じなかつた。だから、戦えた。弱者にしか力を震えない、
弱くて愚かな私。

「……ま、別に敵と戦え、なんて言わないから。ちゃんと、守つてあげる」

どうして、この人は、ここの人達は、守つてくれるんだろう。

「どうしたの？……何か、聞きたいことでもあるの？」

「あ、あの、怒らないで聞いて。どうして、守つてくれるの？」

レイムは、私の質問に、苦い顔をした。不意を突かれた様子はなく、予想はしていたけどされたたくない質問、だつたようだ。

「……まあ、その。これ以上は、聞かない方がいいわよ？」

「それでもいい」

もうこれ以上悪いことなんて、そうやつ……。

「あなたはね……その、壊滅的に運が悪くて……。その、正直言つて底が見えないくらい」

……まさか、私の運の悪さにお墨付きがつく日が来るとは思わなかつた。

「……やつ」

「そ、そんなに落ち込まないで！　だ、大丈夫よ、私が、いえ、私達が守つてあげるから」

あわあわと可愛らしく慌てるレイム。この人はきっと、私に同情したんだ。あまりにも酷い運勢と運命を持つ私があまりにも哀れで、つい、肩入れしてしまつていて。……は。

笑い話だ。

「私、これからどうなるの？」

でも、好意を向けてくれる理由がわかつて、すゞくほつとした。わからないことは、怖いから。たとえそれがどれほど凄惨なものだつたとしても、知らない、わからないよりもいい。

「……その、どういう意味で？」

「いっぱいあるけど……とりあえず、レイム達の間で、私をどうするつもりなのか知りたい」

これは、答えてくれるだろうか。

「……は？」

「監禁とか幽閉とか」

疑問の声を発したレイムに、私はそう答えた。するとレイムは呆れたようにためいきをついた。

「あんたねえ。警戒しすぎ

「……でも」

でも、ここに来る前は、警戒心を強くして、警戒しても、その隙を縫うようにして、私は攫われたりしたのだ。

「まあ、あなたの運ならこれまでの人生も、辛かつたでしょうね」

「警戒を緩めた私が悪い」

「子供は、警戒しなくとも大人が守ってくれるものなの。本来はねつまり、私は本来とは違う子供だということだ。なぜか、ショックだ。

「レイムは、優しい人」

「照れるわね」

「マリサも、アリスも、エイキもエイリンもモコウもカグヤもコマチもレイセンもみんなみんな、優しい人達。……私、こんなに優しくしてもらつていいいのかな」

不安はいつまで経つても消えない。幸せを感じて、喜びを感じて。でもこうして何気ない時間を過ごしていると、ふと思うのだ。私は、これほどの優しさや幸福に見合つだけの人間だろうか。母からの心中を拒否し、お父さんの後も追えず、情報を話すことすら躊躇し、鬼を喰らつた人ならざる私が、幸せなんて手にしていいのだろうか。「生物はすべからく、幸せを求めるべきだし幸せになる権利があるのよ」

「私を除いて」

「違うわ」

レイムは私の目をしっかりと見つめた。

「卑屈になりすぎよ。大丈夫。あなたは幸せになつてもいいのよ」

その言葉は、私の心に少しづつ、浸透していくた。

「……ありがと」

私は立ち上がり、レイムの隣に座った。恐る、恐る。レイムに腕を絡める。

「……い、今まで避けてごめんなさい。で、でも、大好き、だよ」

私はつつかえながらも自分の気持ちを伝えた。

「……ふふふ、私、子供には絶対好かれないものだと思つてたわ」
そう言って、レイムは私の頭に手を乗せて、撫でてくれた。

うん、幸せ。この幸せは、感じていてもいいことなんだ。私はそう思つた。もう何も怖いことなんてない。このあとにはずっと幸せが続く。私は、そう思つた。

さつき私がレイムに何を言われたか、なんてことは綺麗さっぱり忘れて。

夜、私はレイムと布団を並べて眠つていた。あれからレイムは食事をとつて、それから夜になるまで些細なことを話して、そして、布団を敷いて床に就いたのだった。すぐに眠れたのだが、妙な胸騒ぎがして目覚めた。

だが、よく考えれば私は吸血鬼。夜に起きるのは普通のことなのだ。

血が滾る感じがする。視覚も、聴覚も嗅覚も、昼間より鋭い。それに、今なら真後ろから攻撃されても反応して、こちらに攻撃が届く前に反撃できる気さえする。

なんだ、夜つてこんなに安心するものだつたのか。知らなかつた。外に出ようとして……やめた。今の私は抑えが効かない。今はおそらく、敵が来たら殺し、人が来たら襲う、想像のままの吸血鬼なのだから。

隣で眠つているレイムに視線を移す。昼間着ていた巫女服を少し変えた、特殊な服を着て寝ている。

首が露わになつていて、その白い珠のようなきらめく肌は、まるで魔力が込められているかのように、私の視線を釘付けにした。「こくり。

「……」

私はあわてて首を振った。違う。違う。私に優しくしてくれたレイムを食べるなんてしちゃだめ。絶対に。

おいしそう。

ダメ、違う。

私は自分が一人になつたかのような錯覚を覚えた。
食べよう。押さえつけて、首に牙を埋めて、血を啜りつ。痛くな
んてしない。だから。

違う。そんな、恩を仇で返すような真似はダメ。

きっとおいしい。鬼の時の数倍、それこそ今まで食べたどの料理
よりもおいしい。だから食べよう。

違う、レイムは「はんじやない」。

ちょっと血をもらいうだけ。

ちょっとでもダメ。

渴いた。

それでもだめ。渴こいと飢えようと手からびよつと、この人を食
べるのだけは嫌だ。

「……どうしたの？」

「レイム」

起きてくれて嬉しい私がいて、ほっとする。

起きて残念がる私がいる。いて、自分に失望する。

「……眠れない」

「ん。吸血鬼だもんね。私の寝床のそばにいた、ってことは血を吸
いたかつた？」

私は首を……。

頷け。そうすればもしかしたら吸わせてくれるかも。

否定しなければ。レイムに心配や心労をかけるべきではない。

「かなり辛い？」

「うん」

いつもして悩むんなら、私の意識なんてないほうが多い。

「……狩りに出かける?」

私は首を振った。

「行かない。私はそこまで落ちぶれない」

そうは言つてみたが、私の全身がレイムの血液を求めていた。違う。人間の血が欲しいだけ。レイムの血を欲しているわけではないはずだ。

「ほんと、我慢強いのね」

「レイム、あり、が、と」

ブツリと、一瞬だけ意識が飛んだ。気がついたら、レイムの首筋に噛み付きかけていた。レイムにのしかかり、口を大きく開いてレイムの首筋に、噛むその寸前まで迫っていた。

「……澪」

「ち、違うの」

私はレイムから飛び退き、全身を使って否定する。

「私、気がついたら……」

「……わかった。自分を見失うのね?」

頷いた。

「でも、私を吸いたくはないのね?」

これにも、頷いた。

「どうする?」

「……私を、縛つて。お願ひしていい?」

私はそうきいた。

「本当にいいの?」

「あなたを噛むよりは遙かにいい」

レイムはため息をつくと頷いて、ふすまを開けてどこかへ行ってしまった。しばらくすると、大きな縄を持ってきた。私が全力で暴れても切れそうにない太い縄だった。

「これくらいでいい?」

「うん、ありがと」

じゃ、と言つてレイムは私のそばまで来て、私を縛つていく。私

を寝かせ、作業に入った。まず、両手。その後、両足。御陵臣にされたことと同じ。御陵臣とレイムを重ねそうになつて、頭の中で否定する。

「レイム、もっと厳重に」

「ん？ 変な注文するのね。わかつたわ」

そう言って、レイムは私の両膝と両肘を縛った。もうひらくに身じろぎもえできぬ。

「ありがと、レイム。これで私、何があつてもレイムを襲わずに済む」

はあ、とレイムはため息をついた。

「あなたは嬉しいかもしないけど、こいつは子供縛った上にその子にお礼言われて戸惑つてんの。だから、何も気にせずもつ寝なさい」

そのキツ田の言い方が、まるで家族に向かって『いうような言い方だつたのが、妙に嬉しい。』

「うん。お休みなさい」

私はそう言つと、目を開じた。

四日田の生活があわやうとしていた。

異様な気配と私

五日目の朝。私は身動きがとれない状態で目が覚めた。
どういうことだらうか。

何かあったのか。

想像する。何があるだらう。レイムが私を縛る理由。

「……おはよう」

私を見下ろすように、レイムが私を覗き込んでそつ言つた。彼女の顔はどこか申し訳無さそうだった。

「レイム、おはよう。どうして私縛られてるの？」

「覚えてないの？」

頷いた。すると、レイムは難しい顔をした。

「……まあ、あなたが縛つてって言つたのよ

「私が？」

何故私がそんなことを？ わからない、が……。

「私、壊れちゃったの？」

「そういうことではないのよ。でもねえ」

レイムはそういうながら、私の縄を解いていく。よほど緩かったのか、ちょっととレイムが手を動かすだけですぐに解けた。

「はい、お疲れ様。朝ごはんいるかしら」

「いらない」

私は立ち上がった。レイムの言う通りなら一晩中縛られ続けていたはずなのに、僅かな痛みも感じなかつた。どんどん、人から離れていく自分が嫌だつた。もう一昨日に鬼を食べてから何も口にしていないというのに、まるでお腹が空かない。食べなくても生きていけることを喜ぶべきなのだらうか。

「何か食べなさいよ」

「何の味も感じない物を食べたくない」

美味しいものを感じないのはいいのだが、美味しい物を美味

しいと感じない、というのはショックだ。結局、今の私は泥水を飲むのとジコースを飲むのと、味覚の点では全く変わらないのだ。その事実がなぜか、食べることへの虚無感に繋がっていた。

「……ま、無理にとは言わないけど。私は朝食摂るけど、その間あなた何する？」

何をしよう。外に出れば解放団に攫われて、またあの苦痛を味わなればならない。今日一日、ここにいなければならぬのだ。家主の許可なしにうろつくわけにもいかないし……。

「……レイムと一緒にいる」

私はレイムの手を掴んで、そう言った。

「そ、そ、う。でも私と一緒にいてもつまんないわよ？」

「色々聞きたいことがある」

せつかくながら、色々と質問してみよ。全部答えてくれるなんて、思わないけど。

「そう。じゃ、今から私朝食の準備するわね」

「手伝う」

「でも……こ、え、ありがと」

レイムはそう言って、台所に向かった。小さな、一人暮らし用の台所で、入口のふすまにはちゃぶ台が立てかけてあった。

「ちゃぶ台、持つて行つてくれる？ それだけしてくれたら十分よ」

「そう」

私は紙みたに軽いちゃぶ台を片手で持ち上げると、昨日レイムが夕食を食べた、外が見える部屋まで持つて運んだ。ここは縁側から外に続いていて、昨日会議をしたところでもある。

部屋の中央にちゃぶ台を置くと、私は座った。

しばらく目を閉じて匂いを嗅ぐ。大豆の匂いがしていた。お味噌汁、だろ？ なんだか、すくなく懐かしい気がする。ここに来る前までは毎日作つてたのに。

もし、お父さんが私と一緒に暮らしてくれるよになつたとき、毎日美味しいお味噌汁を作つてあげれるよう、頑張つて練習してい

たのだ。

まあ、結局、全て徒労だつたわけだが。

……お父さん。

「どうしたの、俯いて」

「お父さんのこと考えてた」

レイムがあ盆に一人分の朝食を持って部屋に入ってきた。

「ふうん」

レイムはちゃぶ台に朝食を置くと、箸をとつて食べ始めた。お味噌汁に、サンマの塩焼きに、ごはん。さすが神社、質素な生活を心がけているんだ。

「あなたのお父さん、いい話聞かないわね」

「……知ってるの？」

「アリスとエイキから聞いたわ」

あの二人、意外とおしゃべりなのかな。いや、レイムはきっと偉い人なんだ。昨日の会議仕切つてたし、なんだか雰囲気が威風堂々としている。

「ねえ、レイムって偉い人なの？」

私がそう聞くと、レイムは不思議そうな顔をした。

「気になるの？」

「うん。昨日、エイキとカグヤ、それにレミリアも参加してた会議を取り仕切つてたし」

私がそう言うと、レイムは溜息をついた。

「偉くはないわ。ただ、幻想郷の外と内を分け隔てる、結界を制御してるのでだけよ」

そしてその結界は、この世界にとつて重要なもののだろう。レイムが上の人ならば、の話だが。

「レイム、すごーい」

「博麗ならばできて当然よ」

その言い方が、妙に引っかかった。まるで、そう、結界を守る」とは義務であるかこような言い方だった。

「澪、あなたはお父さんと会いたい？」

頷いた。

「自分からは、会いに行けないけど」

私はもう死にたくても死ねない体になつたのだ。だから、地獄にいくことはできない。

「だけど、今度は、私がお父さんを呼ぶの」

しつかり、宣言した。いつか、いくら年月がかかつたとしても、お父さんを呼び戻す。

「すごい決意ね。大変よ？」

「知ってる。でも、だから」

私は静かに言った。

「……ふつと。わかつたわ。変なこと聞いてごめんなさい」

レイムはほんを食べ終わると、手を合わせた。そのあと、私のすぐそばまで来て、私の隣に座つた。

「聞きたいことあるつて言つてたけど、なあに？」

優しく、聞いてくれる。

「……レイム、幻想郷って、何？」

私の質問に、レイムは苦笑しながら悩んだ。

「そうね。違う世界、とも言えるし同じ世界だと言つてもあるわ」

私は首をかしげた。どうこう」とだらつか。

「気になる？ よね」

私は頷いた。この世界のこと、もつともつと知りたい。知ればきっと、きっと何かわかるかい。

「そうね。ここは、山の中なのよ。紫が張つてる結界と、博麗が貼つてる大結界の二つが、あるのね。それが、幻想郷とそうでないとこうを分けてるの」

「へえ」

つまり、厳密に言えばこの世界と元の世界とはつながつているのか。そして、山の中だから、マリサやアリスに幻想郷の全体を見せてもらつたとき、海が見えなかつたのか。

「でも、普通は入ることができないし、一度入つたら出る」とがで
きないの」

「なんだ。

「でも、例外があつて……。それが、何の力も持つてなくて、迷い
込んだ外来人」

力を持つている外来人は、変わらず帰れないのだろうな。

「ふうん。解放団の人達は、その例外の幅を広げろ、って言つてる
の？」

私が言つと、レイムは頷いた。

「だいたいそんな感じ」

「でも、ホントかな」

レイムは少しキツイ目をした。

「私の言つこと、信じられない？」

「違うの。御陵臣が私を虐めてる最中、物凄く楽しそうだったから、
もしかしたら……」

私の言葉を、レイムが引き継いだ。

「もしかしたら全部嘘で、他人で遊ぶための方にしか過ぎないか
も、つて？」

「うん。他人を屈服させて、支配したいのかもしれない」

「ううむ、とレイムは唸つた。

「ありえる。けど、でもそれじゃあ……」

「被害に遭つた人が可哀想すぎる。そうレイムは言つた。

「……なんとかして止める？」

「居場所もわからぬのにビビりやつて追うのよ

本当に知らないのかな。

「私のこと、助けられたでしょ？」

「まあ、レミリアにあなたの匂いを追つてもらえたから。結局それ
も遅かつたけどね」

「そう言って、レイムはため息をついた。

「にしても、結界の開閉はこっちにしかできないのは……確定で。

足搔いても仕方ないのはわかってる……のにも、関わりず。

幻想郷の人間よりも、外来の方が被害が多いのは……もしかして、……ってことはあるかも知れない」

私はじつと、レイムが考え終るを待った。待てども待てどもレイムは答えすつきりとした答えを出せなようだった。

「……もしかして、ね」

そういうて、レイムは立ち上がつた。

「何が？」

「やつら、目的は別にあるのかも」

「そうだったら、どうするの？」

「とりあえず、事情を詳しく調べましょ。取り敢えず人里へ行きましょう。急いでるから飛んで行くわよ」

そう言つて、レイムは縁側から外に飛び上がつた。私がほうけていると、レイムが不思議そうに私を見た。

「何やつてるの？」

「私、飛べないの」

そんなこと言わなくともわかってくれるものだと思つていた。

「あなた吸血鬼でしょ？ ほら、自分に翼があるとイメージしてみて」

言われた通りイメージして見る。あんまり吸血鬼の力は使いたくないけど、このままだと置いていかれそuddたから、自分で飛ぶことにする。

私の背中の皮を突き破つて、新しい器官が生えるのを想像する。一つ羽ばたけば飛び上がり、もう一つ羽ばたけば前に進む、そんな簡単な翼を思い描く。

出でくれない。それなら、もつとリアルに想像する。

私の肩甲骨に流れている血液が、血管を突き破つて肉と骨の間を流れる。その血が集まつて、小さな塊を作る。

ちょっと詳しく想像すると、その通りになった。

その塊は成長し、私の背中を突き破る。背中から噴水のように血

が出てくる。

「うわっ」

レイムが小さく声を上げ、目を背けた。氣に留めず、創造を続ける。その血液はやがて大きな翼の骨格になる。染み出るよつに骨格に膜ができる、やがて神經が繋がり、私の背中には大きな、血に濡れた翼が生えていた。軽く羽ばたいて、血を払う動作をする。実際は、血を吸収しているのだけど。

周りを見る。大丈夫、汚していない。私は私の力を、完璧に制御できている。

「……できた」

一度羽ばたいて、飛び上がる。自分で飛ぶ空は、存外素晴らしいものだった。日光を受け止めている翼には、焼け付くような嫌な感覚がするが、問題なく動かせる。バサリ、バサリと何度も翼を動かして滞空する。

「もう少しそ、視覚的に優しめにお願いね、次から

「わかった」

私は青い顔をしているレイムにそう答えた。

「じゃ、行きましょうか」

レイムはそう言って、まるで滑るように浮いて進む。私は初めての空中を手探りで、ただレイムについていくことだけを考えて進む。必死にバタバタと動かして明後日のほうに進んでしまったり、ゆっくりすぎて置いていかれそうになつたり。必死の思いでついて行つたせいで、私が人里に降り立つたときには、すっかり疲れきっていた。

「はい、人里に到着！」

「ここが、人里」

嬉しそうに両手を広げて私に紹介してくれたレイムに、私はそう答えた。

表情は変わらないけど、私が発した声は酷く疲弊の色が出ていた。ほとんど無意識的に翼をしまうと、ゆっくりとした足取りでレイム

の所まで歩く。

「……人があまりいない」

「そうね」

私が見回して、ざっと観察してみた限り、ここは商店が多く立ち並ぶ、本来なら活気付いている場所なのだ。まだ朝も早いし、朝食の材料を買いに来た人がいてもおかしくないのに、誰もいない。看板が屋根の上にあるのに誰もいない店もあった。

私は近くにあつた商店の中に入る。

「ちょっと、澪？」

レイムが不思議そうにして言った。私は目で大丈夫、と伝えると、奥に進んでいく。ここはどうやら金物屋みたいだ。食器からナイフ、包丁まで幅広く取り扱っている。

「ん、いらっしゃい。おじょうちゃん、何を探してるのかな？」

店の中をうろうろとしていると、店の奥から職人気質のおじさんが出でた。角刈りの頭にねじり鉢巻きという、いかにも、という風体がわかりやすい。

「色々と。ここ、人里？」

「ん？…………ああ、そうだけど。それがどうしたんだい？」

私はガラスのケースに入れられた、日本刀に目を留めた。

「……人が少ないな、と思つて」

それから、外にいるレイムを見る。レイムは不思議そうにしていたけど、私の言葉を聞くと妙に納得した風な顔をした。

「ああ、おじょうちゃん、知らないのか？」

「何を？」

私は日本刀をさらによく観察する。金物屋つて、こんなものも取り扱っているのか。知らなかつた。

「最近人攫いが多くてな。用がない人は外に出ないよつとしてるの

さ

「……誰がやつたか、とかわかる？」

さあな、とおじさんは肩をすくませた。

「興味あるのかい、おじょ「うちやん」

「まあ……私は、弱いから。攫われたくないくて」

「違うつて。それだよ、それ」

私が見ていた日本刀を指さしておじさんが言つた。私は日本刀を見つめたまま、口を開いた。

「これ、良く切れる?」

「まあな。でも、売れないぜ」

「……どうして」

そう私が言つと、おじさんは私の後ろに回つた。少しだけ警戒する。

「これは、武器だからな。おじょ「うちやんが握るもんじゃねえ」

「自分の身は、自分で守らないと」

私がそう言つと、おじさんは笑つた。

「ははは、いい心がけだな。だが、ま、今は大人に守つてもらえ」

私は後ろを振り向いた。彼は、一いつ口ひと人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「……わかつた。助言ありがとう」

「おう、気にすんな」

私はお礼を言つと、レイムの所までいく。おじさんがついてきた。

「おじょ「うちやん、ちゃんと家に帰れるか? つて、レイムちゃん。最近見てないけど、元気にしてるかい?」

おじさんの口調は軽かつたけど、物凄く親しみのある言ひ方だった。

「ええ。まあ、おかげさまで。冷やかして悪かつたわね」

「ああ、いやいや。俺も久しぶりに人と話せてよかつたから、別にいいよ。それに、このおじょ「うちやんが欲しがつたものがものだからな」

私は、欲しがつてなんてないけど。……でも、一番気になつたのは事実。

「ふうん。……最近、出でないの? 源さん散歩が好きつて言つて

たじやない」

ゲンつていうんだ、このおじさん。

「まあな。でも、人攫いが多いのに出るわけにもなあ。うちも娘がいるし、守つてやらねえと」

そう言つて、ゲンさんは腕組みをした。その腕は筋肉で膨れ上がりついて、すぐ強く強そう。

「ちゃんと守つてあげてね。やっぱり、攫われている人って多いの？」

レイムの質問に、ゲンさんは頷いて、難しそうな顔をした。

「三件隣の佐藤んとこと、隣の八百屋の居候が一人、いなくなつちまた。それから寺子屋に通つてたガキ共も何人か」

私はゲンさんが指さした方向をひとつひとつ見していく。三件隣の家は見えなかつたけど、隣の八百屋さんは、店を完全に締め切つている。ショック、だつたのだろうか。

「かなり多いね」

「ああ。迷いこんだガキを引き取つて、我が子のように可愛がつてた連中、かなりショック受けてるな。……なあ、レイムちゃん。なんか知つてるか？」

レイムは首を振つた。

「『めんなさい、今調べてる最中なの』

「そりが……。協力できることがあつたらいつつてくれ

ありがとう、とレイムは返した。

「源さん、色々とありがとう。また今度、フォークでも買つてくるわ

「おう。ありがとよ」

レイムは飛び上がつて、遙か空中に行つてしまつた。……私、この人の前で飛ばなければならないのだろうか。

「おじょうちゃん、レイムに連れて行ってもらわなくていいのか？」

「……自分で飛べる」

翼が生える感覚は、覚えている。さつきほど詳しくイメージしな

くとも、翼は生えた。けど、どうしても天使のようなキレイな羽は思い描くことができなくて、まるで悪魔のよつた翼が私の背中にある。

「……おじょうちゃん」

「ありがとう、色々と。それじゃ」

驚くおじさんにお礼を言いつと、私も飛び上がり、レイムの隣に滞空する。

「中々上手く飛べるようになつたじゃない。あなた、飲み込み早いのね」

「……うん」

呆然と私を見つめるゲンさんを、私は見ている。彼は一体、今何を考えているのだろう。

「どこへ行くの？」

「寺子屋」

「てらこや？ それはなんだろう。

移動を始めたレイムに私はついていく。さつきよりは安定して飛べるようになつたが、それでも疲れが酷いのは変わらなかつた。人里から少しだけ離れた場所に、その小さな学校のような建物があつた。玄関から何から木造だけど、私が通つていたような小学校によく似ていた。

「……てらこやつて、学校？」

「え？ ……ああ、そういえば、説明してなかつたわね。そうよ。外の世界で言う学校が、慧音がやつてる寺子屋よ」

ああ、思い出した。寺子屋か。

すたりと軽やかに校庭に降り立つたレイムに私は続いた。速度の調整が上手くいかなくて、足が地面に激突し、激痛が走る。しばらく立ち上がりにくいくらいの痛みが続く。けど、ある一瞬を境に痛みが嘘のように消えていく。

「……大丈夫？」

「大丈夫」

私は翼をしまって、立ち上がった。玄関を開けて寺子屋に入ったレイムに続いて、私も入る。

ひと昔前の旧校舎、というのが私の、この寺子屋に対する印象だつた。全体的に古めかしい。

「慧音、いる？」

レイムがそう言つと、すぐそばにあつた扉がカラリと開き、青い髪をした女性、ケイネが頭を出した。小箱のような帽子が愛らしく。

「レイムか。入ってくれ」

「いいの？ 授業中じやあ……」

「……」

ケイネは首を振つて、私たちを教室の中へ促した。
レイムと私はゆっくりと教室に入る。

「……は？」

「嘘」

私とレイムは、絶句した。広い和室の中にたくさん並んでいる机に座つているのは、かつて私を攻撃してきた氷精、チルノだけだつた。

「……おお～。ミオだ。久しぶり。この前は『めんね』

「いや、別にいいけど」

私はチルノの前に立つ。心底申し訳なさそうな顔をしていた彼女は、私がそう言うと安心したように明るくなつた。

「そうか！ なあ、ミオ、今度は普通に遊ぼう！ 鬼ごっこじよつ、鬼ごっこ！」

「いや、私は遊びにきたわけではないから……」

私は喜ぶチルノにそう言つた。残念そうにする顔が胸に残る。

「……そ、そ、うか」

「他の子は？ いないの？」

わかり切つてている質問を、私はした。

「うん。みんな、どこかへ行っちゃつた。連れ去られて、それから

……」

「そう」

何人が、連れ去られたのだろう。どう考へても、おかしい。なんで何の力もない子供をこんなに攫う?

「酷いわね、慧音」

「ああ。もう寺子屋も閉めようかと思つてる」

後ろで、そんな話し声が聞こえた。私もチルノも、二人の会話を聞いていた。チルノも、気になるのだろうか。

「やっぱり、多い?」

「異様なほどな。外来人でない子供もいなくなつてているのだ。レイム、どういうことだ? 奴らは外来人を引き込んでいるのではないのか?わからないなら、対処を急いで欲しい。私も、手伝えることなら、なんでもするから」

レイムはケイネの言葉を聞いて、困ったような顔をした。

「ありがとう。私も、死力を尽くすわ」

そうか、とケイネは言った。それから、私たちの方を向いた。

「.....澪ちゃん、だつたな」

「うん」

「絶対に、一人になっちゃダメだぞ」

それは、切実な願いだった。もう一人も犠牲者を出したくない。そんな、強い思いを感じた。

「約束する」

私は頷いた。そして同時に、確信する。御陵臣は悪い人間で、滅ぶべき悪なのだと。

「チルノ、お前もできるだけ誰かといふようにな

「慧音と一緒にいる!」

チルノの何気ない言葉に、ケイネは思わず、といった風に涙ぐんだ。嬉しいのだろうな。そして、悲しいのだろう。もうこの子しか生徒がない、現状が。

「.....詳しい情報は、後で書にまとめて持つていく。だから、それまでは」

「わかつたわ。慧音、協力ありがと」

そう言つて、レイムは教室から出て行つた。

「私も行くね。また遊ぼうね、チルノ」

「うん！」

私はチルノとも約束して、レイムに続いて部屋を出た。寺子屋の外に出た私たちは、お互に顔を見合わせた。

「次は、どこ？」

「……そうね。一田アリスの家にあなたを送りましょうか」

「足手まとい？」

レイムは頷いた。

「だから、アリスに守つてもらひなさい」

「……。わかつた」

私は弱い。レイムと一緒に戦うなんて、できるわけがないのだ。
無理をして、捕まつたりなんてしたら意味がない。

「ごめんね。色々と連れ回して」

「大丈夫」

私はそう言いつと翼を生やし、飛び上がつた。レイムも続いて飛んでくる。

「だいぶ空にも慣れたかしら」

「うん」

私が答えると、レイムは頷いてから移動し始める。かなりの速度が出ているので、私も必死で追いつこうと翼をはためかす。距離は大体五メートルぐらい。時々レイムがこちらを向いて、安全を確認しつつ、進んでいく。きらりと、魔法の森の地面が少し光ったような気がした。

景色がどんどんと変わっていき、あともう少しで魔法の森だと、と思つた次の瞬間、拳くらいの大きさの何かが視認も難しいくらいの速度で飛んできてる……。

「あつ」

私は、撃ち落とされた。

狂信の源と私

「きやつ」

私は何の抵抗もできずに地面に叩き落とされた。地面に激突する瞬間、思わず手をついてしまい両手がひしゃげてしまった。何をされたのだろう。

私は上空を見上げる。レイムがこちらへ向かってきていた。よかつた。助かる。

私の周りは、深い森になっていた。アリスのいる森だろう。アリストの家からも近いなら、大丈夫。

そう思っていると、私の両足首が誰かに掴まれた。

私は足の方を見た。

おぞましい笑顔を浮かべた、東野と田が合った。

「……あ、あなたは」

「ふは、ふははは」

ずるずると引き摺られ、私は遠くの草むらに隠された。それから両手が治り始めた。すぐに完治したけれど、足首を掴まれていたら身動きがとれない。レイムが降り立つた方に顔を向ける。

レイムが、私がついさっきまでいた地面に降り立つた。周りを調べても、周りの草むらを見て私を見つけることはできなかつた。すぐそばまでレイムがやってきたところで、私は声を上げようとした。喉を切られて何も言えなくなる。そうして私が黙つていのちに、レイムは別の場所へと行つてしまつた。レイムが、遠い。

私は振り向いて、東野を見る。ナイフを持つて、へらへらと気味の悪い笑顔を浮かべていた。私の足首へとナイフをあてがうと、にいつ、とさらりと笑みが深くなる。

「……やめて」

私が小声でそう言つると同時に、私はアキレス腱を十字型に刻まれていた。言葉にできないような痛みと共に、足首から先に力が入ら

なくなる。

レイム、助けて。

私はレイムが行つた方を見てそう思った。私の願いは届かず、レイムは私のいる反対側の森の奥へと消えていった。私はさらにすると引き摺られた。

抵抗、しないと。

そう思つて手を動かそうとしたとき、私は両手を掴まれてまとめあげられた。

「ダメですよ、東野。ちゃんと両手両足、使えなくしないと」

御陵臣だった。神出鬼没にも、ほどがある。なぜなんの気配も感じさせず、一瞬で現れることができる？

「すまんな。だが、別にいいではないか」

「……やれやれ」

私はまるで捕らえられた猪のような、四肢をまとめ上げられた格好で運ばれた。あるていど森を進んで行くと、小さな小屋があつた。もう使われていないような古い小屋で、東野達が小屋に近付くと、中から人が出てきた。小さな男の子で、目はうつろ。私を見ると、少しだけ驚いたような表情をした。

「……」

彼は、ノーマだった。永遠亭にいた時よりも、その顔は沈み、暗かつた。

「ふふふ」

私は小屋に連れ込まれた。

小屋の中は、凄惨たる状況だった。

人がたくさんいる。それは皆異様な表情をしていて、嬉々とした様子で、手術台のような台の上に縛り付けられた子供を様々な方法で痛めつけていた。中には、もう動かなくなっているのにまだ攻撃され正在する可哀想な子も見られた。

「い、こ、は」

私の声は震えていた。ここはまるで、拷問室のようだつた。壁に

はたくさんのお拷問道具が並び、小屋中から身を裂くような悲鳴がいくつも聞こえる。

「仲間になつて最初にする儀式さ」

御陵臣がこともなげに答えた。私も、空いてる手術台に縛り付けられる。大の字に寝かされ、ピクリとも動けない。特別製らしく、私の力でも引きちぎる事ができなかつた。

「こんなことしたら、仲間になるのをやめる人がいるはず」

私の問いに、御陵臣は首を振つた。

「わかつてないね。仲間を纏めるのに必要なのは共通の意識さ。幻想郷から出ようと/orする意識と、そして、子供を痛めつけたときの記憶。この二つが、我々の結束をより強固なものにしてくれる」前者はともかく、後者は足抜け防止、なのだろうか。

「私はこんなことしない。死んでも」

「君もやつてみればわかるよ。他人は、おもちゃなんだって」

吐き気がする。なんなんだ、この人間は。レミリアだつて、もう少し人間に敬意を払つていいだうに。

「取り敢えず、君にはそれ相応の対応を決めているよ

「……？」

御陵臣が合図をすると、右から左から、男や女、たくさんの人私が取り囲んだ。私の視界は人で埋め尽くされる。

「君は我々のことを一部でもしゃべったからね。特別に、時間制にしてあげる。半日ほどしたら、また仲間になるかどうか聞いてあげる。それまで、地獄にいるといいよ」

私は周りにいる人を見た。皆、壊れたような笑顔を浮かべていた。こんな狂つた状況に感化されてしまったのだろうか。それとも、生來の物なのだろうか。あるいは、御陵臣に洗脳されたか。

私にとって重要なのは、彼らの手の中にある、様々な道具。

「……やめて。私は、あなた達に何もないから。お願ひ、許して返事代わりに、誰かに目を抉られた。例えようもない、神経が引き千切られるような鋭い痛みが頭全体に広がる。

「ふ、ふふ」

私をいじめて、誰かが笑つた。

あ、そなんだ。私は、おもちゃになるんだ。ただ弄ばれるだけの、愛玩人形。ちょっと用途は、違うけど。

それから私は、レイムの助けをひたすら待ちながら、抵抗らしい抵抗もできずされるがままにされた。

半日が経つたらしく、私のことを御陵臣が見ていた。頭がぼうつとする。何があつてこうなつてしまつたんだっけ。

「……仲間になる気は、ある？」

……仲間になれば、痛みはなくなるのだろうか。これほどの苦痛を、感じずにいられるのだろうか。

「私、は

仲間になる。そう言おうとした時、私の脳裏にアリスやレイム、私が出会つた幻想郷の人々が頭に浮かんだ。あの入達は、仲間になつてもいいと言つた。

けど。

「な、ら……な、い」

途切れ途切れに、私は言つた。

「……そう。じゃあ、また明日。明日は一日中虐めてあげる。ほら、あそこに放り込んでいて」

私は解放され、六人がかりで運ばれる。私はもはや抵抗する気力がわからなかつた。

私が呆けていると、全身に鈍い痛みを感じた。どこかの部屋に放りこまれたということがわかつた。がしゃんと音がしたあと、鍵の閉まる音がした。私はそんなものに構わず、周りを見る。

「……こ、こは」

周囲にいるのは全て、捉えられ、儀式に使われ、使い終わつた子供だつた。もうボロボロで、生きている子もいるが、虫の息だつた。いや、違う。すでに死んでいるような子供達だつた。

「い、生きる、の？」

私は生きている子の内の一人のそばに這いつゝみると、声をかけた。

「……あ、みは？」

息も絶え絶え、呼吸も苦しそうだったけど確かに生きている。両手両足もがれて、内臓をさらけ出しているところに、生きている。それは却つて、残酷なことのように思えた。

「ら、楽にしてあげよひ、か？」

「……お願い」

だから私は、普段なら言わないことを言つていった。私はその子の目を見る。視線に力を込める。

だんだん、その子の目がとろんとしてくる。虹彩の色はどんどんと薄れしていく。

「……樂に、してあげる」

「ありがとう、『jyoi』ます……マスター」

これは、罪だ。子供を魅了し、その肉を喰らう。これら、樂にしてあげたいからと言つても、やつてはいけない」とは、やつてはいけないのに。

「……」

私は無言で、彼の首に齧りついた。痛くならないように、一気に全身の血を抜く。初めての、吸血。たとえよりもない気持ちよさを感じる。喉がうるおい、腹が膨れるような感じがする。力がみなぎつてくる。

そして、この子の記憶や感情、そういうつたものまで私に流れ込んできた。

「……ありが、と」

千からびて死ぬ寸前、この子はそんなことを言つた。

名前も知らない、こんな吸血鬼にお礼を、言つ。よねび、苦しかったのだろう。訪れるものが死だとしても、最期の瞬間くらいは安らかに。やう思つてのことだったが、間違つては、いなかつたようだ。

私は他にも中途半端に生きてしまっている子を探すと、許可をもらつてから樂にしてあげる。部屋を一周するころには、十人程度の血液を私は吸い付くしていた。

「……みんな」

私はゆっくりと立ち上がる。血を吸う瞬間、あの子達の気持ちが、感じていたことが流れ込んできた。辛くて悲しくて苦しくておぞましいものだつたけど、私は受け止める。

そして私は、あることを決めた。

「澪つ！」

それとほぼ同時、レイムとアリスが部屋に雪崩れ込むようにして入ってきた。それから部屋の中の私を見つけると、近づいてくる。なぜか、二人とも警戒しながらだつた。

「私は大丈夫。解放団の連中は？」

レイムは首を振つた。

「一目散に逃げるもんだから、中々ね」

レイムも、非情にはなれないのだろう。どうせ、解放団の連中はレイムたちが来たら武器を捨てて逃げたのだろう。

誰が武器を放り捨てて、抵抗もせずにひたすら逃走する人間を後ろから攻撃できるだろうか。

……それをしたのが、解放団か。

「次からは、私も解放団と戦う」

私がそう言うと、二人は静かに首を振つた。

「いいのよ。あなたは、休んでも」

「戦う」

私は両手を広げてそういうた。私の手は、血に濡れていた。私の血ではない。周りにいる犠牲者達の、文字通りの血涙。

「この子達の仇を取ると、約束した」

レイム達は不思議そうな顔をした。

「……この子、達？ 澪、もしかしてここ、誰かいたの？」

「見えないの？」

私は「んな」くつくりと見えるのに、一人は少しも見えないのだろうか。

「ええ。全く」

この光景が、見えない。それは、きっと幸せなことだ。きっと、喜ばしいことだ。みんなもきっと、こんな残酷な姿の自分を、見られたくないだろう。

「……そう。じゃ、行こう」

私は一人の手を引いて外に出た。灯りがついている拷問部屋が目に入る。私が縛り付けられていた手術台には、おびただしいほどの血が周りに飛び散っていた。臓物もいくつか見える。

半日間、私は何をされていたのだろう。よく覚えていない。思い出さなくともいいことだ。

「……ここで何があったの？」

アリスが聞いてきた。私は真実を言おうとして、声が出なかつた。脳裏に、まるで呪いのように御陵臣が言った言葉が蘇る。

『君は一部でもしやべつたからね』

私が、これ以上何かを話せば、私は、何をされるのだろう。半日記憶が消えたというだけでも恐ろしいのに、それ以上の恐怖と苦痛が与えられるのか。

……そんのは、嫌だ。

「ごめん。言いたくない」

でも、嘘はつきたくない。だから私は、そう答えるに留めた。

「ど、どうして？」

「何をされたか覚えていない。私は大丈夫」

ひたすら戸惑う一人を無視して、私は外に出る。外は夜だつた。私が攫われた時と変わらない森。だけど、昼間よりよっぽど安心できた。遠く、遠くまで見通すことができる。

私は空を見上げる。雲一つない星空に、まばゆく輝く満月があつた。

夜とは、じのよつに美しいものだったか。

「澪、どうしたかったの？」

アリスが慌てたように追いかけてきた。

「なんでもないよ、お姉ちゃん。帰ろう。私、疲れちゃった」
ノーマも小屋にはいなかつた。きっと解放団の仲間になつたんだ
うづ。あのおぞましい儀式に彼が参加しているなど考えたくもなか
つたが、それは致し方あるまい。私だって、アリスたちと出会つて
いなければ……。

「で、でも、永遠亭に行つてみてもわなくてもいいの？」

「いい。何をされたかなんて、知りたくない」

私は隣まで歩いてきたアリスの手を握つた。暖かい。

「澪の手、冷たい」

「怖かったのかな」「覚えてないけど。

「……辛い？」

「さあ。今私は、普段通り」

いや、普段よりよっぽど鋭い。今なら、なんでもできるような気
がする。吸血したいと言つ気持ちもまた、強かつた。みんなの血を
吸つたばかりだといふのに。今この衝動は、飢えというのとは違
う気がする。そう、アイスクリームやおやつがほしいといふのと似
た気持ちだった。

「帰ろう」

なんだかだるい。なんだかこの世界そのものが、くだらない事の
ように思える。もつと重要なものは、こことは違う、元の世界とも
違う、私がまだ見たこともない世界にあるかのように思える。

……疲れるのかな、私。半日弄ばれていたのだ、記憶はなくと
も、身体は覚えているだう。

このままだと、疲れを解消するためにアリスがレイムを食べてし
まうかも。手を握つたまま歩き出したアリスに対して、ふと衝動が
訪れる。

「お姉ちゃん。今私は、吸血鬼。ダメ。近付かないで」

私はアリスの手を振り払つて、後ろにいたレイムに向かつた。

「レイム、私どうすれば？」

「どうしたいの？」

「どうすればいいだらう。どう伝えれば良いだらう。

わからなかつた。

「……わ、わからない。ごめん、ごめん。私、どうすればいいのか

わからなかつた。

「まあ、方法がないわけではないけど」

「なんだろう。知りたい。

「レミリアのところで眠る、っていうのは？」

私は、レイムを見た。それから、アリスの方を見た。アリスは、頷いても首を振つてもくれなかつた。

「お姉ちゃんは、どうして欲しい？」

私は聞いた。不安だつた。まるでためらないなくレミリアのところへいけと言われたら、それはもう一緒に暮らせないとの証左である。そんなのは、嫌だ。もう家族と一緒に暮らせないのは嫌だ。

「あなたは、どうしたい？」

「私、お姉ちゃんと一緒がいい。アリスの、家族だから」

私は普段通りの口調でそういつた。でも、内心は泣いていたのかもしれない。

「……わかつたわ。じゃ、帰りましょうか」

「いいの？……じゃない、うん。私、絶対に、我慢するから。もしダメだったら、その時は私を磔にしてでも止めて。私、お姉ちゃんの血を吸いたくない。家族だから」

渋々だけど、アリスは頷いた。私は心の底から安心する。痛いのは怖い。苦しいのは嫌だ。でもそれ以上に、家族を苦しめるのはもつと嫌だ。

「……アリス」

「何かしらレイム」

帰ろうと森を歩き出した私達を、レイムがひき止めた。アリスに

顔を寄せ、ぼそぼそと耳打ちをした。

「私がそれやるの？」

「あなたしかいないの」

「あんたねえ。もつと何か言い方つてもんがあるでしょうが。相手考えなさいよ。嫌われて飛び出したらどうすんのよ?」

「大丈夫。澪はちゃんとわかつてくれるわ」

一人は小声で話しているつもりなのだろうか。筒抜けだ。でも、重要なことは知らずに済んだ。よかつた、よかつた。

「いこ、お姉ちゃん」

「……わかつたわ」

慌ててアリスは近づいて、手を握ろうとする。私はそれを無意識的に振り払おうとして、アリスに掴まれた。

ピクリと、全身が跳ねたように痙攣した。それは一瞬のことアリスにはきづかれなかつたけど、確かに、私は今体のコントロールを失つた。

なぜ?

「……帰りましょつか

「うん」

仕方なく私はアリスと手を繋いで帰ることにした。アリスの血の匂いが鼻について、襲いかかるのをこらえるので必死だつた。血を、血をと求める体を心だけで抑え込んで、私は家までの道を歩く。家に帰るころには、私の心はすっかり疲れきっていた。

私は、いつたいどうなつてしまつたのだろうか。

秘めた不安と私

帰つてから一言二言会話を交わすと、私とアリスは一人並んで、ベッドで横になつた。手を繋いで、アリスのぬくもりを感じながら、目を閉じる。アリスと母とを重ねないよう注意しながら、安らげるよう体から力を抜いて行く。

「……ねえ、澪」

「なあに、お姉ちゃん」

「……本当に、覚えてないの？」

私は黙つた。覚えていない、ことはない。でも、確たるものはない。夢かもしれないし、幻かもしれない。ともすれば、あの子達の記憶かもしれない。

「目を抉られたことは、覚えてる

もちろん今は全く痛まないし、ちゃんと見えてもいる。だけど、あのとき私が感じたのは間違いなく、抉られた時の痛みだった。

「……目を。痛かったわね」

「他にも、いろんなことをされた……と、思う。覚えてないけど」
半日、私は捕まつていて、何をされたのだろう。あの手術台に撒かれていた血液は、異常なレベルだった。何をされたのだろう。「バラバラにされたのかな。碎かれた？ もしかしたら、もっと酷いことをされたかもしれない」

もしそれが本当ならば、私の中に、その記憶があるということだ。
おぞましい。忌まわしい。

「大丈夫よ。私がいるわ」

アリスが、不安に思つた私を抱きしめようと手を伸ばしてくれた。ほのかない匂いが広がつて、意識が飛びそうになる。吸血鬼としての私が、アリスを喰らえと言つてている。違うのに。アリスだけは、違うのに。

「……お姉ちゃん、私に食べられたらそれ以上近付かな

いで

私は若干冷たく言った。それでもしなければきっと、優しいアリスは無理にでも抱きしめてくれそうだったから。アリスは手を引っこめてくれた。私は少しだけ離れる。

「優しいのね、澪は」

「優しくなんてない」

それから、思いついて私はアリスに提案した。

「お姉ちゃん、明日永遠亭に行こう

「やっぱり、見て欲しい？」

私は首を振った。

「ノーマが、小屋にいたから」

アリスは複雑な表情をした。

「きっと脅されたんだと思う。助けないと」

私は確信を持ってそう言つた。

「……でも」

「約束したんだ、あの子達と」

私は色んな約束をした。血を吸う時、私に願いと思いを託して死んだあの子達との約束。全部守る。全部果たす。そう決めたのだ。

「……あの子達って？」

「また、明るいうちに調べに行こう。そうすれば、全部わかるから」

私の言つている意味も、御陵臣がどれほど悪かることも。

「……わかつた。じゃ、明日、ね」

「うん、明日」

それからアリスは、しばらくすると眠つた。安らかな寝息と、安心しきつた表情は、私を信頼している証だらうか。

アリスとは反対に、私は眠れなかつた。吸血鬼は夜起きるものだと聞いていたけど、それは太陽の光が苦手だからという理由だと思っていた。だから、太陽が平気な私は昼間起きることも可能だと思つていた。けど、夜がこれほど心地いいのなら、昼間起きる意味が

な「ように」も思えてしまつ。

「……」

今は。今は、眠ろう。あと数ヶ月後ぐらうには夜に行動するようになつたとしても、今は眠ろう。普段通り、いつも通り。

私はゆっくりと眠りに就いた。

夢の中で私は虐殺をしていた。大人、子供、男や女関係なく、ひたすら、一つの場所に集まつた人間を一方的に殺し、その肉を悠々と喰らい、その血液を優雅にすする。最高の快楽と至上の興奮が私を包んでいた。悲鳴と肉が弾け、骨が砕ける音を聞きながら、私は思う。殺戮はこれほど楽しいとは。これほど、他者を虐げるのが気持ちいいことだとは。

一人の男が目に入る。顔は見えない。どんな人間かもわからない。でも、そいつが目に入った。だから、私は気まぐれで、そいつを特に念入りにいたぶることにした。深い意味はない、ただの、暇つぶし。

まず弱い吸血鬼にして、簡単には死なないようにする。私の命令には逆らえない。でも、自由意志は残す。家族もこの場所にいるようだ。

はははと笑いながら、私は彼に酷いことをしていく。

両親を殺せと命じた。嫌々ながら、泣き叫びながら手をかけた。娘を痛めつけろと命じた。何度も何度も娘に謝りながら、私の命令を遂行する。殺してくれと娘が懇願するようになると、私は彼女の首にかじりつき、激痛と共に血をssする。完食しきつてから私は、彼を少しづつ削つて行く。少しづつ、消耗させていく。

かつて私がされたように。私に命じられ、彼が家族にしたように。「許して」

私は命乞いを無視して、彼を殺した。バラバラにして、ぐちゃぐちゃにして、私が楽しみ終わつたときには、彼はもう肉の塊になつていた。返り血に汚れた服がうざつたらしくて、私は自分の服を自

分で破り捨て、そこらじゅうに散らばる血を集め、服を作った。私
の一部になつた服は、返り血を吸収する性能がる。

私は笑いながら、肉をかきわけ、心臓を探す。

肉の中を探つていたはずなのに、傷に怯え、痛みを恐れる私と目
が合つた。そこで、気付く。

私がこいつすることは、御陵臣と同じになるといふこと。
いや、本来は違つ。つまり御陵臣が、私と同じ化け物なのだ。
人を殺す、最上級の化け物。それが、私。そして、御陵臣なのだと。

私は目を覚ました、外を見ると、まだまだ暗い。隣のアリスを見
ると、まだ眠つてゐる。私も、まだ寝ておひつ。再び目を開じると、
私は眠つた。また同じような夢を見た。

.....。

「.....おはよ」

私は眠い目をこすりながら起きた。隣にはアリスがいるのだから、
寝坊はできない。アリスは体を起こすと、私の方を見た。

「おはよう。嫌な夢見なかつた？」

「うん」

私はいい夢なんて見ていないのだが、あの夢は吸血鬼的には幸せ
な夢だろうから、頷いておいた。説明するのが面倒だというのもあ
る。これ以上心配をかけたくない、といつのが真相であるような気
もする。

でも、よかつた、夢で。あんな残酷なこと、したくない。あんな
酷いことをやるくらいだつたら死んだほうがいい。死ねないけど。

「お姉ちゃん、準備したら行こう」

私はベッドから降りてそう言つた。

「わかつたわ。じゃ、服着替えるから

そう言って、アリスは部屋から出て行った。私も服を着替えようか。

あれ、そういうえば、私どうして服を着ているのだろう。ぐぢやぐぢやにされたはずなのに、服が無事？ 不思議に思つて、服に触る。昨日は気付かなかつたけど、服はしつとりと濡れていた。寝汗をかいた……というわけではなさそうだ。なんだろうか。

……それとも、全部私の妄想なのだろうか。昨日のあの痛みや苦しみは全部夢で、そんな夢を見たから私はこんなに寝汗をかいている。

面白い妄想だ。

「準備できたわ。行きましょうか」

さつぱりとした様子のアリスが部屋に来ると、私はベッドから降りてアリスのそばに行く。

「歩いて行こうね、お姉ちゃん」

もう空は飛びたくない。あんな田に遭うなら、多少遅くなつてもいいから地面を歩きたい。

「ええ、それはそのつもりだけど……」

「昨日は、飛んでて狙撃されたから」

誰がやつたんだろう。御陵臣は感情の芽を植え付ける程度しか力がなかつたはずだ。ということは、他の人が？

一体どれだけの人が、どれほど強い力を持っているのだろう。

「……そうなの。『ごめん』

アリスの謝罪が、妙に心に響いた。

「いい。行こう」

私はアリスと手をつなぎ、永遠亭までの道のりを幸せに過ごした。

吸血衝動を我慢するのが、少し辛かつたけど。

永遠亭の前にたどり着くと、エイリンが立っていた。

ちょっとだけ驚く。けど、敵ではないことがわかっているので少しは楽だ。

「……エイリン？ なんで？」

「姫様に言われたのよ」

「わかりやすい理由だ。でも、なぜだろう。

「どうして？ 輝夜になんかあつた？」

「ノーマがいなくなつたのよ。他の外来人が攫われないよう、私は見張りやつてるの」

エイリンが思々しそうに答えた。解放団の手は、こんなとこにも伸びている。早く、止めないと。

「エイリン、カグヤに会いたい」

「わかつたわ。麗仙がいるから、彼女についていきなさい」

エイリンはそう言うと快く迎え入れてくれた。

「アリスはここで待つて」

アリスは虚を突かれたような顔をした。

「いいの？」

「不死同士、秘密の話がある」

カグヤには、ノーマの事を伝えるのと別に、相談したいことがあるのだ。一人になるわけではないのだから、大丈夫だろう。

「……わかつたわ。くれぐれも、気をつけてね。いざとなつたら、ちゃんと仲間になるのよ」

私は頷くと、永遠亭に入った。玄関には、レイセンが待つていた。私は靴を脱いで廊下に上がった。

「いらっしゃいませ。姫様がお待ちですよ」

彼女は私にぺこりと頭を下げる、手を引いて私を案内した。レイセンの顔を見ると、キヨロキヨロと周りを警戒していた。ただの廊下。けど、今は解放団が潜んでいるかも知れない場所だった。

カグヤのいる部屋の前まで来ると、レイセンは頭を下げた。

「姫様。澪をお連れ致しました」

「はい。今行きます」

それからすぐに、襖がすらりと開いて、着物を着たカグヤが出てきた。相変わらず、絶世の美しさだ。

「あら、澪だけ？ ま、いいや。レイセン、堅苦しい」とさせでご

めんね？せつかくだし、お姫様！」としてみたかったんだ～」「じつにしては徹底しているとは思つ。

カグヤの言葉に、レイセンは息をついて、肩の力を抜いた。

「まったく。そうななりきりと書いてくださいよ。色々肩肘張つちやつたじやないですか」

「いいじやない、たまには緊張も」

まあそなんですけどね、と小ちくレイセンは言つた。

「じゃ、私はこれで。澪ちゃん、帰るときは呼んでね」

「うん」

そう言つてレイセンは廊下を行き、ある扉の中に入つて行つた。それを見ていると、急に手を引かれ、体が引っ張られた。意識せず、目を硬く閉じていた。体が強張る。得体のしれない恐怖が全身を包む。

「……どうしたの？」

「か、カグヤ」

私は、恐る恐る目を開けてカグヤを見た。

「……お部屋、入つてもいい？」

「もちろんよ。いらつしやい」

私はカグヤに手を引かれ、部屋に連れ込まれた。違う。連れて行つてもらつた。

部屋の中はお姫様なカグヤのイメージと違い、「ごく普通の、人が生活するための部屋だつた。押入れがあつて、「タツ……今は布団がないからただのテーブルになつているものがあつて、適度に散らかつて……。なんだか、落ち着く。

私はテーブルのすぐそばにある、座布団が敷いてある場所に座つた。カグヤが私を気遣うように手を押さえ、優しげな、心配そうな顔をした。

「気軽に友達の家に、といつ雰囲気ではないけど……どうしたの？」

「私、ノーマを見た」

カグヤが、目を見開いた。

「どこで？」

「魔法の森の奥にあつた拷問小屋の中」
私は自然とそんな単語を言つていた。カグヤは不思議そうな顔をした。

「拷問小屋？ そんなのあつたかしら」

「解放団が使つてた、今は使われていない小屋だつた。私が攫われたとき、ノーマがいた」

カグヤは色んなことに驚いた。それから、私の頭を優しく撫でてくれる。

「攫われたの？ 大丈夫？」

「何をされたのか覚えていない。多分、記憶に蓋をしているんだと思う

ゆつくりと、私は言う。

「もし、この蓋が外れたとき、記憶が蘇つたらどうなるか、わからなくて怖い。カグヤ、こんなことカグヤにしか相談できないの。ねえ、この恐怖から逃れるにはどうすればいいの？」

アリスには、心配をかける。レイムにも、同じ。なぜか、カグヤには心配をかけても大丈夫なように感じた。受け止めると、感じた。同じ、不老不死だからだろうか。

「毎日死んで、死ぬことに慣れればこの気持ちが消えるの？」

私の問いに、カグヤは首を振った。

「私はあなたのように、捕まっていたぶられたことがないからわからないけど、その方法では、解決しないわ。記憶を思い出すことが怖くなるかもしね。けど、そうなつたとき、あなたは今のがあなたとはかけ離れたものになつてているのよ？」

ゆつくりと、髪を梳くように撫でてくれる。なんだか、心地がいい。

「あなたが感じてる恐怖つて、あなたを、私やアリス、皆が大好きあなたを捻じ曲げてでもして消したいの？」

怖いのは、怖い。けど、確かに、そこまでして、消したいのだろうか。自分の中を探る。良くないものに触れそうになりながらも、答えを探す。

「うん、違う。私が怖いのは、その先にあるんだ。記憶が蘇つて、壊れてしまうのが怖いんじゃない。」

「カグヤ、私が解放団に入らずにいれるには、どうすればいい？」
痛みと苦しみに私が折れて、解放団に入ってしまうのが怖いのだ。
事実、私は半ば折れかけている。次攫われて半日でも痛めつけられたら、頷いてしまうだろう。そうなったら、苦痛に怯えて裏切ることさえままならないだろう。心の底から、解放団に従うよつて元気にならなくなるだろ。そんなのは、嫌だった。

「……戦うことよ」

「誰と？」

カグヤからの言葉を、私はすぐに否定することができなかつた。
「あなたを傷つけようとする者全てをよ。あなたは、守りたいものために戦つてもいいのよ」

「……でも、私」

「私があなたなら、いいえ、あなたを守るために、解放団の連中を殺すことだって躊躇わないわ」

カグヤの過激な言葉が、耳に入つてくる。否定しようとして、できない。

「……私は」

どうしたいのだろう。なぜ、いつも頑なのだろう。もつともつと奥まで、自分を探る。自問自答を繰り返す。

ああ、そうか。

「……私は、私のままでいたい」

お父さんと会つたときに、お父さんが戸惑わないようにするため。大切に守つてくれて、私を大事に思つてくれたアリスの思いを、無駄にしない為に。遊びを教えてくれると言つたマリサのため。私と遊びたいと言つてくれたチルノのために。私のことを気遣

つてくれた人里のゲンや、ケイネのために。そして、私と友達になつてくれたカグヤのために。皆のために。

「それなら」

「でもそれは、戦つて、解放団を皆殺しにして、私の敵を殲滅したら守れることじゃない、と思ひ」

私がそう言ひうと、カグヤはにっこりと微笑んだ。

「答え、見つかつたみたいね」

「うん。ありがと、カグヤ」

どういたしまして、とカグヤは私の頭を撫でてくれる。

「ノーマの様子はどうだったかしら？」

カグヤは私を撫でる手を止めてそんなことを聞いてきた。私はカグヤにゆっくりと抱きついて、背中をさする。

「大丈夫だよ、カグヤ」

「本当に？」

「うん。辛そうだったけど、多分大丈夫」

確信はない。けど、わかる。ノーマは、私と違つて頑固じゃない。いつか助けが差し伸べられるのを、待ってるんだ。

「……情報、ありがとうね、澪」

「ひとつこそ、慰めてくれてありがとう」

私たちは離れると、お互いを見て微笑んだ。私の表情は動かなかつたけど、わかってくれたと思う。

「とりあえず、私たち永遠亭は解放団と徹底抗戦するわ。澪、こんなのが頼むのおかしいんだろうけど、気が向いたら戦闘に参加して」「気が向いたらね」

そう言って私は外へ出る襖を開けた。

「ふふふ、用がなくても、遊びに来てね。今度はどびきり楽しいことをしましょ」

「うん。じゃあね」

「どびきり楽しいこと? なんだもう、すごく興味がある。この問題が収束すれば、またここに来よう。今度は、純粹に遊ぶために。」

「それじゃ

私は襖を開けた。驚くべきことに、レイセンが扉から少し離れたところに立っていた。

「……聞いてた？」

私が聞くと、彼女はふるふると首を振った。

「ごめんね。でももう、あなたや姫様の友達が攫われるわけにはいかないから。帰る？」

頷く。

レイセンは私の手を引くと、玄関まで私を連れて行つてくれた。

「澪、どうだつた？」

玄関では、アリストとエイリンが何かを話していた。アリストとエイ

リンも、顔が険しい。

「ん。来てよかつた」

「それは何より」

エイリンが仮頂面のまま言つた。

「何があつた？」

「……何でもないわ。一人とも、今日何か予定あるかしら」

「これから少し調査に出るとこり」

「そうか。急ですまないが、頼みたいことがあるのだけど

「……どうする、澪？」

私は頷いた。

「そうか。頼みたいこと、といつのはな……」

エイリンは厳しい表情で、口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256y/>

東方幻想入り

2012年1月5日19時53分発行